

カンボジアの文化復興(34)

—アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

RENAISSANCE CULTURELLE DU CAMBODGE (34)

2025年

上智大学アジア人材養成研究センター

Sophia Asia Center for Research and Human Development, Tokyo

The Publication of the Research Report “*La Renaissance Culturelle du Cambodge (34) (2025)*”
was supported by a grant from Sophia University

© Copyright 2025 by Sophia University. ISSN-0917-141X

Edited & Published by Sophia Asia Center for Research and Human Development

Editor in chief Dr. Yoshiaki ISHIZAWA, Editor Dr. Nhim Sotheavin

7-1, Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8554, Japan

Tel : (03) 3238-4136, Fax : (03) 3238-4138

カンボジアの文化復興 (34)

目次

石澤良昭教授の王立プノンペン大学名誉博士号受諾講演 (2022年11月1日) 「カンボジアの文化復興を手伝うソフィア・ミッション 33年間—私たちは難 民救済から人間の原点を学び、遺跡救済から民族の誇りを学びました—」 (日本語/英語)	石澤良昭	1
研究論文		
1. ヴィシュヌと観音 —クメール碑文から読み解く身体観と特質— (日本語)	宮崎晶子	23
2. 刻文史料にみるジャヤヴァルマン7世時代の寺院と尊像 (1) —バンテアイ・クデイ寺院の歴史的 position をめぐって— (日本語)	松浦史明	37
3. カンボジア・アンコール地域バンテアイ・クデイ出土・陶磁器をめぐって —前柱殿 (C09) 一帯出土の資料から— (日本語)	宮本康治	67
研究ノート		
1. 王の不当人事介入に敢然と抗議—元宗務官サーダーシヴァは前国王を告発 (日本語)	石澤良昭	89
2. Exploring the Royal Road from Angkor to Wat Phu (英語)	Nhim Sotheavin .	101
調査報告		
1. バンコク国立博物館の火事からスドック・カク・トム碑刻文石柱を救出 (日本語)	宇崎真.....	139
2. バンテアイ・クデイ第62次、第63次発掘調査速報—外周壁東南地区における 盛土遺構の発掘調査— (日本語・英語) .. 上智大学アジア人材養成研究センター／アプサラ国立機構		149

Renaissance Culturelle du Cambodge (34)

Contents

Dr. Yoshiaki Ishizawa, (Professor at Sophia University), Honorary Doctorate

Acceptance Speech at the Royal University of Phnom Penh, (November 1, 2022)

Sophia University International Service Activities in Cambodia for 33 years - Refugee Relief for the Restoration of Humanity and Rescue of Monuments for the Restoration of National Pride -

(Japanese/English) Yoshiaki Ishizawa 1

Articles

1. Viṣṇu and Avalokiteśvara – View of the Body and its Characteristics as Extracting from Khmer Inscriptions –
(Japanese) Akiko Miyazaki 23
2. Temples and Deities in the Reign of Jayavarman VII through Inscriptions (1):
A Basic Study on the Historical Status of the Banteay Kdei
(Japanese) Fumiaki Matsuura..... 37
3. Excavated Ceramics at the Banteay Kdei, Angkor, Cambodia – from Excavated Materials at the Front Colonnade Hall (C09) –
(Japanese) Yasuharu Miyamoto 67

Research Notes

1. Protesting Against the King's Unjust Intervention in Personnel Affairs - Former Religious Official Sadasiva Accused the Former King
(Japanese)..... Yoshiaki Ishizawa 89
2. Exploring the Royal Road from Angkor to Wat Phu
(English) Nhim Sotheavin 101

Reports

1. Report on the Rescue of Sdok Kak Thom Inscription from the National Museum of Bangkok Fire Incident
(Japanese) Makoto Uzaki 139
2. Preliminary Report of the Archaeological Excavation at Banteay Kdei, August 2023 (BK62) and February-March 2024 (BK63)
(Japanese & English) Sophia Asia Center for Research and Human Development, Sophia University, Tokyo, and APSARA National Authority
..... 149

ការកកើតឡើងវិញនៃវប្បធម៌ខ្មែរ (៣៤)

មាតិកា

បាត់កថានៃការទទួលបណ្ឌិតកិត្តិយសរបស់សាស្ត្រាចារ្យ អ៊ីស៊ីហ្សាវ៉ា យ៉ូស៊ីអាគី នៅសាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទភ្នំពេញ (ថ្ងៃទី១ ខែវិច្ឆិកា ឆ្នាំ២០២២)

“កិច្ចការអន្តរជាតិនៃសាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ានៅប្រទេសកម្ពុជាក្នុងរយៈពេល៣៣ឆ្នាំ ៖ ជំនួយសង្គ្រោះជនភៀសខ្លួនដើម្បីមនុស្សជាតិ និងការជួយប្រាសាទដើម្បីស្តារឡើងវិញនូវមោទនភាពជាតិ”

(ភាសាជប៉ុន និងអង់គ្លេស)អ៊ីស៊ីហ្សាវ៉ា យ៉ូស៊ីអាគី

អត្ថបទស្រាវជ្រាវ

១. ព្រះនារាយណ៍ និងលោកេស្វរ ៖ ពិនិត្យលើរាងកាយ និងភិនភាគពិសេស តាមរយៈសិលាចារឹក

(ភាសាជប៉ុន)មីយ៉ាហ្សាគី អាគីកុ

២. ប្រាសាទ និងទេពនៅក្នុងរាជ្យព្រះបាទជ័យវរ្ម័នទី៧តាមរយៈសិលាចារឹក (១) ៖ មូលដ្ឋានសម្រាប់ការសិក្សាប្រវត្តិសាស្ត្រនៃប្រាសាទបន្ទាយក្តី

(ភាសាជប៉ុន)ម៉ាត្ស៊ីវ៉ា ហុមីអាគី

៣. កំណាយរកឃើញកុលាលភាជន៍នៅបន្ទាយក្តី ៖ តាមរយៈកំណាយនៅសាលបុរី

(ភាសាជប៉ុន)មីយ៉ាម៉ូតូ យ៉ាស៊ីហារី

របាយការណ៍ស្រាវជ្រាវ

១. ការដំទាស់លើការអន្តរាគមន៍ដោយអយុត្តិធម៌របស់ព្រះរាជាក្នុងកិច្ចការផ្ទាល់ខ្លួន ៖ អតីតមន្ត្រីសាសនាសទសិវចោទប្រកាន់អតីតព្រះរាជា

(ភាសាជប៉ុន)អ៊ីស៊ីហ្សាវ៉ា យ៉ូស៊ីអាគី

២. ដំណើរស្រាវជ្រាវផ្លូវបុរាណពីអង្គរវត្តទៅវត្តភ្នំ

(ភាសាអង់គ្លេស)ញឹម សុធាវិទ្ធី

របាយការណ៍ខ្លី

១. របាយការណ៍ជួយសង្គ្រោះសិលាចារឹកស្តុកកក់ធំពីអគ្គិភ័យនៅសារមន្ទីរជាតិបាងកក
(ភាសាជប៉ុន)អ៊ុហ្សាគី ម៉ាកុតុ

២. របាយការណ៍បឋមនៃកំណាយបុរាណវិទ្យានៅបន្ទាយក្តីនៅខែសីហា ឆ្នាំ២០២៣
(BK62) និងខែកុម្ភៈ-សីហា ឆ្នាំ២០២៤ (BK63)

(ភាសាជប៉ុន និងអង់គ្លេស)មជ្ឈមណ្ឌលអាស៊ីសិក្សាស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះ
បណ្តាលធនធានមនុស្សនៃសាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា និងអាជ្ញាធរជាតិអប្សរា

カンボジアの文化復興を手伝うソフィア・ミッション 33 年間 —私たちは難民救済から人間の原点を学び、遺跡救済から民族の誇りを学びました—

上智大学アジア人材養成研究センター

所長 石澤 良昭

（上智大学教授・2017年R・マグサイサイ賞受賞者）

私の少年時代：日本→中国満州→日本帰国（1937～1948年）

私は1937年に北海道で生まれ、3歳で中国遼寧省東部の撫順市に移り住み、10歳の時、1948年北海道帯広に帰国しました。

1. 国際政治に翻弄されるカンボジア

カンボジアでは1970年から隣国ベトナム戦争と連動し、政治の大混乱がはじまった。ポル・ポト政権（1975年-1979年）下では約150万以上にのぼる知識人を中心に大虐殺があり、その時フランス語に汚染されているという理由でアンコールで働く保存官たち40数名が全滅。この政治混乱から数百万人のカンボジア人難民がタイ国境に逃れた。

2. 上智大学ソフィア・ミッション(国際奉仕活動)はカンボジア難民救済

上智大学教職員・学生・賛同者は、1970年からカンボジアで始まった混乱と内戦のため、タイ国境に逃れた数百万人のカンボジア人難民の人たちを見過ごすわけにはいかなかった。上智大学は1979年から「インドシナ難民に愛の手を」のキャンペーンを掲げ、同年12月にJ.ピタウ学長を中心に新宿駅の駅頭で2週間にわたり「インドシナ難民」のために募金活動を実施し、カオイ・ダンやサケオの難民キャンプへ食糧と医薬品を届け、戦争孤児を収容するセンターに学生ボランティアを派遣した。当時のピタウ学長は「今、インドシナ半島では、何十万、何百万という人々が故郷を追われ、難民となって苦しんでいる。この人々のことを忘れてはなりません。これこそ、上智大学の根本的な理念、さらには、人間としての、人間らしさの根本にかかわることだと信じればこそ、この難民救済活動を行っているのです。」と国内外に発表した（『上智大学通信』第84号1980年3月25日発行）。

3. 日本から「カンボジア」支援活動を開始

(A) 現地アンコール遺跡群の保存と修復作業は1970年から解放勢力が遺跡占拠し、停止されていた。タイ・ミャンマー・インドネシア・日本の4カ国の専門家が東京に集まり、以下の救済アピールを全世界に向け発信した。

(B) アンコール遺跡救済「ソフィア・アッピール」を発表

1985年4月20日上智大学において開かれた「アンコール遺跡救済国際シンポジウム」(International Symposium on the Preservation of the Angkor Complex, on 20 April, 1985)において私たちは、「アンコール遺跡救済ソフィア・アッピール Sophia Appeal for the Safeguarding of the Angkor Complex」を採択し、全世界の関係者へ配信した。第一条は、「アンコール遺跡群の救済の再考を求める(1.Considering that the Angkor Complex comprising Angkor Wat, Angkor Thom and many other monuments is the highest expression of the splendor of Khmer civilization which flourished in the present Cambodia)」ではじまる、このアッピール文は世界の多くの心ある友人たちに対して救済を求めたものであった。しかし、ベトナム系のヘン・サムリン傀儡政権下という理由で回答はなく、放置されてしまった。

(C) アンコール遺跡の保存救済活動が何故重要なのか知っていただくため、2回にわたり、プノンペン国立博物館の彫刻美術作品約150点を借り受け、日本の8カ所でアンコール・ワット展を開催した。多くの日本人にカンボジア文化遺産の素晴らしさを鑑賞いただき、そして、ご支援いただくために開催した。

①第一回は「大アンコール・ワット展 壮麗なくクメール王朝の美」、主催:東映(株)、期日:この巡回展は2005年7月から2年間にわたり、日本全国8カ所の展示場で開催され、その来場者数は86万人に及んだ。石澤が遺跡案内図録『大アンコール・ワット展』(2005年)を作成した。

②第二回は「アンコール・ワット展-アジアの大地に咲いた神々の宇宙」、主催:岡田文化財団(三重県):2009年8月から3年間にわたり、さらに全国10カ所の展示場で開催され、東京の三越デパート本館の「アンコール・ワット展」には秋篠宮文仁親王殿下(当時)がご臨席くださいました。来場者は約33万人の及んだ。図録は『世界遺産アンコール・ワット展-アジアの大地に咲いた神々の宇宙』を石澤が作成した(2009)。その波及効果としてカンボジア和平後、約100万人以上にのぼる日本人観光客が現地アンコールを訪れ、大石造伽藍とそのきらびやかな彫刻美術を鑑賞した。

4. 民族の誇りを取り戻すことを願い、アンコール・ワット西参道を研修修復現場に

1979年からの14年間にわたる内戦で傷つき、失意のカンボジアの人達に元気を取り戻してもらうため、だれもが崇拝する「アンコール・ワット」の救済を採りあげた。

その大方針は「By the Cambodians, for the Cambodians」を掲げ、カンボジア人新保存官たちが保存・修復工事・整備を自分たちの手で出来るように願い、1991年から新しいカンボジア人「遺跡保存官」および石材加工ができる「石工技能者」の育成を開始した。私たちは2名の建築家が常駐させ、加えて西参道修復技術交流研修委員会は、委員長の上智大学客員教授(日本学名誉教授)平山善吉先生をはじめ14名の専門委員を現地に派遣し、遺跡現場においてカンボジア人保存官に技術指導を実施してきた。

5. クメール民族の誇りを取り戻したアンコール・ワット西参道修復プロジェクト

西参道の修復は1960年代にフランス極東学院により着工されたが、政治情勢から30年以上にわたり放置されてきた。この西参道は環濠を渡る200mの陸橋で、参道の巾は26m、南側半分13mはフランス極東学院により修復された。上智大の担当は北側半分の13メートルで、長さ200mの参道を担当した。

上智大の最初の西参道の工事は、1996年からはじまり、その現場で遺跡研修を受けた新保存官関係者は、石工技能研修生15名、技術作業員20名、建築・考古幹部研修生12名など合計47名であった。片桐正夫先生（日大教授）の指導のもとに1996年に全解体工事を開始し、2007年11月に、東寄り北側の工事100mを完成した。

1992年、故シハヌーク前国王はアンコール遺跡が世界遺産に登録された時に、パリのユネスコ国際会議において特に発言を求め、「最初に井戸を掘った人を忘れてはいけない」と発言された。「内戦が収まらず、多くの国がカンボジアに背を向けている時に、最初にカンボジアに来てくれて、人材養成を開始した東京の上智大学の活動を忘れてはいけない」というお言葉を賜った。

2016年からの上智大と遺跡公団の第2期工事では、日本国外務省からODA（一般文化無償資金協力）に採択され、全機材がアンコール・ワット西参道の修復現場に届いた（2015年）（日本政府より初めての遺跡修復機材供与され、合計金額は9,470万円）であった。

6. カンボジアへ出かけて「ソフィア・ミッション（国際奉仕活動）」の記録

(A) 知識人虐殺のため教授陣がゼロに近かった王立芸術大学（プノンペン）支援の件：
上智大学の西参道技術委員の日本人教授陣は、シエムリアップへ行く途中のプノンペン空港で降り、王立芸術大学において毎夏集中の専門分野の講義を10年間にわたり実施してきた（期間：1991年 - 2001年）。その受講学生の延べ人数は12年間で約5,400名に及んだ。



プノンペンの王立芸術大学集中講義(1991)



学生現場研修(1994)

(B) カンボジア王国政府緊急幹部養成の学位取得プロジェクトでは①カンボジア人留学生として18名を上智大学大学院（地域研究専攻）に入学させ、1997年から2016年

までの約 20 年かかって、18 名（博士学位 7 名、修士学位 11 名）が学位を取得した。学位取得後は全員が帰国し、現在カンボジア王国政府内で活躍中である。中・長期にわたるソフィア・ミッション実施のための人材支援であった。

(C) 約 900 年前の接着剤なし 65 メートルの高塔アンコール・ワットの威容

①1997 年には NHK スペシャル番組「アンコール・ワット-知られざる水の帝国」が全国放映された。日本の JICA 作成の 5,000 分の 1 の地形図資料に基づき、コンピューター・グラフィックを駆使し、約 900 年前のアンコール時代の田越灌漑存在の発見であった。アンコール時代の二期作の収穫を裏付ける大発見であり、当時の農業経済活動を裏付ける現場検証であった。さらに、②NHK「プロジェクト X 挑戦者たち」番組の「アンコール・ワットに誓う師弟の絆」として日本全国で放映（2001 年 11 月 20 日）され、大好評を博した。日本航空（JAL）の機内番組としても上映された。



(D) アンコール遺跡の「環境保全プロジェクト」、環境人材の養成

ISO14001 認証取得のための人材養成—ごみゼロ運動（2003—2006）を目指す活動：上智大学(学外共同研究)は、「国際標準化機構（ISO）14001(環境マネジメント)」の認証取得のため、ラオ・キム・リャン研究員（上智大学）が中心となり、アプサラ機

構の協力を得て地域の住民と屋台の売り子さんはじめ、それに小学生たちも動員し、環境保全・ゴミゼロ運動を実施してきた。大へん厳しい現地査察を含む審査ではあったが、世界遺産としては初めて国際標準化機構（ジュネーブ）から2006年にISO認証を取得した。国家再建と復興中のカンボジア王国政府としては大きな国際的に誇示できる成果であった。

(E) 「アンコール文化遺産教育センター」建設の件：アンコール遺跡を盗掘から守り、遺跡について勉強する啓蒙教育センターが、2011年日本国外務省「草の根文化無償支援」によりバンテアイ・クデイ遺跡内に開設された。現在も多くの地域住民と観光客で賑わっている。

(F) アジアのノーベル賞といわれる「R. マグサイサイ賞」を上智大学が受賞

R. マグサイサイ財団の評価では「①遺跡の保存修復はカンボジア人の手でなされるべきと、②カンボジア人保存官や石工の育成、③クメール人たちが自国文化への誇りを取り戻し、遺跡保存の重要性が世界へ向けて発信された」これが受賞の理由であった。

(G) ソフィア・ミッション（国際奉仕活動）とは何か、質問に答えて：

上智大学は現地カンボジアに土地を購入し、上智大学アジア人材養成研究センターを保存官養成の研究教育の施設として建設（1996年）。所在地：カンボジア・シェムリアップ市、敷地面積：4800 m²、建物面積：280.10 m²、構造：鉄筋コンクリート2階建て、1階：事務室、大講義室 2階：大講義室（建築・考古研究室）、機材収納庫、宿泊室（5部屋）

上智大学は日本の大学として初めてカンボジアに文化遺産の教育と研究の施設、「アジア人材養成研究センター」を開設した。日本有志から多大なご寄付をいただき、ポル・ポト政権下で行方不明となったアンコール遺跡保存官と石工を養成するため、1996年に建設された。上智大は2013年に開学100周年を迎えるため、記念事業のグラウンド・レイアウト第一号として建設されたのである。保存官候補研修生は夕刻からこのセンターで歴史学や建築学や考古学、さらに石材を積み上げていく構造力学などの補修授業を受け、国内の遺跡現場へ配属されている。



シェムリアップに在る上智大学アジア人材養成研究センター

(H) 「シハヌーク・イオン博物館」の建設とカンボジア王国への贈呈がされた。

上智大学の国際奉仕活動は、1991年から保存官育成をアンコール遺跡現場において研修を開始した。考古学実習をバンテアイ・クデイ遺跡で実施している最中に、2001年に同遺跡内の地中から274体の仏像、その中には千体仏石柱があり、21世紀の最大を発掘といわれ、全世界のマスコミが取材に訪れた。2010年にはさらに6体の仏像を発掘した。

イオン1%クラブの岡田卓也委員長は、2002年3月に、この仏像を床にならべている上智大学アジア人材養成研究センターに立寄られ、発掘した仏像を見学され、その彫刻の美しさに大へん感動された。2003年11月、岡田委員長はイオン1%クラブの支援による新仏像博物館を建設する件を提案された。2007年11月にこの新しい仏像博物館が竣工した。博物館の正式な館名：「シハヌーク・イオン博物館(英語名:Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum)」、建築主は上智大学、建設拠金協力者：イオン1%クラブ、所在地：アンコール・ワットに隣接するカンボジア王国政府国有地、敷地面積：1万3,140㎡(カンボジア王国政府から無償提供)、建物面積：1,820.90㎡、延床面積：2,533.80㎡、構造：鉄筋コンクリート2階建。

同月2日に開かれた完成式典には、関係者約450人が出席した。ご臨席くださったノロドム・シハモニ国王は式典で感謝の意を表した。この式典をもって、上智学院理事長高祖敏明からカンボジア政府に博物館寄贈の目録が手渡された。同博物館は、王国国立仏像博物館として現地の遺跡公団のアンコール地域遺跡整備機構(略称:アプサラ機構)により管理と運営がなされ、一般に公開されている。その美しいアンコール時代の彫像の尊顔をぜひ見物していただきたい。建設後10年の2017年にはイオン1%クラブが補修工事を実施がなされ、リニューアル開館された。



シエムリアップ・アンコールにてンコールシハヌーク・イオン博物館

(I) 文化衝突の連続、ぶつかり合い学ぶ

カンボジア人保存官と私たちソフィア・ミッションの担当者たちは、この新保存官養成の遺跡の保存・修復・人材養成を通じて、国境のない強固な信頼関係を構築してきた。人材養成プロジェクトでは、毎日文化衝突の連続であることを申しあげたい。この国際協力は、ただショベルカーで掘って、クレーン車で石材を積み直せばよいと

いうものではない。まず何よりも、技術交流的には遺跡を綿密に調査・研究し、どのように石積みするかなど、その背景の歴史を含めて土着技術を採り上げなければならない。現地の土着の技術レベルに適合した保存技術の導入から始まり、現場には徐々に機器や先端技術を持ち込まねばならない。結局のところ、この国際協力プロジェクトとは、「人」と「人」との協力ではあり、「ぶつかり合い学ぶ」ことであると実感するものである。遺跡の保存修復は、あくまでもカンボジア人保存官たちの手によってなされることが原則である。そして、クメール民族の固有な民族文化を世界へ向かって説明できるのは、誰よりも現地に暮らすカンボジアのみなさんである。人材養成と保存修復事業に関する国際協力というのは、人と人との協力であり、なんと言ってもそこに暮らすカンボジアのみなさんを助けることが、その基本でなければならないと考えている。

(J) 私たちは「なぜ」カンボジアの人材養成を始めたのか

1960年代保存修復のアンコールの遺跡現場で、私と一緒に働いていたカンボジア人保存官（コンサベイター）たち40数名が、フランス語に汚染されていると理由でポル・ポト政権下で行方不明となった。アンコール遺跡をなんとかしなくてはならないと私たちを駆り立てるものは、彼らに対する鎮魂の気持ちからである。新保存官育成事業が開始された1991年からアジア人材センターでは、遺跡公団のアプサラ機構に所属しながら、考古学、建築学、画像学、石工の研修生たちが毎日遺跡現場で私たちから研修を受け、夕方からは人材センターの補修授業があり、研修実績を積んでいる。

(K) 結論として国境のない強固な信頼関係の構築に向けて

遺跡の保存修復から着手されて始まった私たちの国際協力は、最初から遺跡（文化）と村落（人間）と森林（自然）を三位一体と考え、遺跡だけに目的を絞らずに、周辺の村人の人たちの協力を得て共に展開してきた。遺跡の調査研究と保存修復の活動を通じて、カンボジアの人たちと強固な信頼関係を結んできた。

基本的な立場は、①「国際協力とは人間の協力」であるという極めて単純なものであり、遺跡保存活動の領域で肌の色、言葉の壁を突き破り、個々人のレベルでどれだけ「国境のない信頼関係」が構築されるかにかかっている。

②私たちはまず、カンボジアに学ぶべき「知」の遺産がたくさん村々やその地域に残っており、私たちはそれを参考にしながら、自らが日本の同様の「知」の遺産を語るという姿勢を貫いてきた。この相互比較対話が、カンボジア人の友人たちの信用度（クレディビリティ）を高めてきたと思われる。

③私たちは1980年代から頻りにカンボジア現地に入って活動しているので、地元シェムリアップの人たちの生活に溶け込み、現地の観光ガイドのみなさんは、日本人観光客に上智大学の、こうした村人と日本人の活動を伝え、その活動を知らない人はいない。

④「継続は力なり」と言える。そして、人づくりはどこまでもそうであるが根気（執念）と時間（継続）そして予算であることを実感している。私たちのこうした現地で

の活動に賛同し、日本人や多くの外国人のみなさんからのご寄附をいただき、感謝申し上げます。

⑤カンボジアの稲作農村と日本の農村には、似かよった村踊りや民話がある。カンボジアも日本も同じ田畑の耕作民族です。その田畑や水田を中心に村をつくり、生活をしてきました。だからいろいろ似かよった催物や季節ごとの行事がある。例えばカンボジアでは「タニシ（田螺）」が知恵の王様といわれ、じっと田んぼに居すわって世の中をみすえているからです。なにごとにも熟知判断し、よくわかり、知っている。日本の田んぼにもたにしはおります。日本では昔からタニシを戦わせて、占いをしておりました。

⑥もう一つ類似の行事があります。日本ではお正月に獅子舞いがやってきます。獅子のアタマをつけた村人の芸人が家々をまわって、悪りょうを追い払います。カンボジアでは、鹿頭をつけた「トロット」の踊りがあり、これもカンボジア正月（4月）に家々をまわり、悪りょうを取り払う民族儀礼であります。

※アンコール・ワット西参道修復機材整備計画（ODA/H25）に基づき、2013年12月、日本国政府 ODA（一般文化無償）アンコール遺跡修復機材（タワークレーンなど 9,450万円相当）の無償資金協力の公文書が署名される。



石澤良昭教授と教育大臣ハン・チュン・ナロン閣下（2022年11月1日）から
王立プノンペン大学の名誉博士号を受領



(王立プノンペン大学の名誉博士号受諾の演説、(2022年11月1日))



王立プノンペン大学名誉博士号受領の集合写真

石澤良昭教授、ハン・チュン・ナロン教育大臣閣下、駐カンボジア日本国三上正裕大使閣下(当時)、王立プノンペン大学のチェト・チアリー学長、同オム・ラヴィ副学長(上智大学で博士学位取得)などが出席

**Dr. Yoshiaki Ishizawa, (Professor at Sophia University), Honorary
Doctorate Acceptance Speech at the Royal University of Phnom Penh,
(November 1, 2022)**

**Sophia University International Service Activities in Cambodia for 33 years
—Refugee Relief for the Restoration of Humanity and Rescue of
Monuments for the Restoration of National Pride—**

Dr. Yoshiaki Ishizawa
Director
Sophia Asia Center for Research and Human Development
(Professor at Sophia University, Recipient of the Ramon Magsaysay Award for 2017)

My Childhood: Japan → Manchuria, China → Return to Japan (1937-1948)

I was born in Hokkaido in 1937. When I was three years old I moved to Fushun City in eastern Liaoning Province in China, and returned to Japan in 1948 when I was 10 years old.

1. Cambodia at the Mercy of International Politics

Political turmoil commenced in Cambodia in 1970, during the Cold War. Under the Pol Pot regime (1975-1979), over 1.5 million intellectuals were massacred, and over 40 Angkor conservation officers lost their lives since they were tainted by the French language. Hundreds of thousands of Cambodian refugees had fled to the Thai border, due to the political chaos in the country.

2. The Sophia Mission (a Global Service Activity of Sophia University), commenced with Relief for Cambodian Refugees

We, the faculty, staff, students, and advocates of Sophia University, could not bear to ignore the Cambodian refugees who had fled to the Thai border, due to the civil war that began in Cambodia in 1970. From 1979 Sophia University got engaged in the campaign, “Hands of love for Indochinese refugees,” and in December of that year, President J. Pittau and others organized a two-week fundraising campaign for Indochinese refugees at Shinjuku Station. Food and medicines were sent to refugee camps in Khaoi Dan and Sa Kaeo, war orphans were cared for, and student volunteers were dispatched to centers where the children would be housed. At that time both within the nation and abroad, President Pittau made the following announcement, “Currently in the Indochina Peninsula, hundreds of thousands, even millions of people have been forced to leave their homes and become refugees, and they suffer. We must not forget those people. This is the primary goal of Sophia University. We carry out this refugee relief work precisely because we believe that it is related to our ideals, and to the essentials of who we are as human beings.” (“Sophia University News” No. 84, published on March 25, 1980).

3. From “Cambodian” Support Activities within Japan

(A) Presentation of the Angkor Relief “Sophia Appeal.”

At the “International Symposium on the Preservation of the Angkor Complex” held at Sophia University on April 20, 1985, (where the participating nations were Thailand, Myanmar, Indonesia, and Japan), we adopted the “Sophia Appeal for the Safeguarding of the Angkor Complex,” and distributed it around the world to people concerned. Article 1 called for a review of the rescue of the Angkor ruins. This appeal, which begins with, “1. Considering that the Angkor Complex comprising Angkor Wat, Angkor Thom and many other monuments is the highest expression of the splendor of the Khmer civilization that flourished in present-day Cambodia,” was a request for relief from many kindly friends around the world. However, it was abandoned, because it was under a puppet government.

(B) In order to make people in Japan aware of why conservation and relief efforts for the Angkor ruins are so significant, we conducted the Angkor Wat exhibition over two terms, borrowing around 150 works of sculptural art from the Phnom Penh National Museum. This event was organized so as to enable many Japanese people to value the beauty of Cambodian cultural heritage and to support them.

- ① The first “Great Angkor Wat Exhibition: The beauty of the Khmer dynasty without the splendor,” sponsored by: Toei Co., Ltd., was held for two years from July 2005 at eight exhibition halls across Japan, and at the Mitsukoshi main store in Tokyo. His Imperial Highness Prince Akishino attended the Angkor Wat exhibition. The number of visitors reached 860,000.
- ① The second “Angkor Wat Exhibition – A Universe of Gods Blooming on the Land of Asia,” was sponsored by the Okada Cultural Foundation. It was held for three years from August 2009 at 10 exhibition halls nationwide. It attracted around 330,000 visitors. Sophia University was in charge of coordination and catalog creation. As a ripple effect, after the Cambodian peace process, approximately 3 million Japanese tourists visited Angkor, and admired the large stone temple and its gorgeous sculptural art.

4. The Western Approach to Angkor Wat was adopted as a Training Construction site, in order to restore National Pride

In order to restore the spirits of the anguished Cambodian people who were devastated by the civil war of 14 years that had commenced in 1979, we adopted the relief of the Western approach to Angkor Wat, which is revered by all. We espoused the policy that the restoration of the ruins should be carried out, “by the Cambodians, for the Cambodians.” In order that the Cambodian conservation officers could carry out the conservation, restoration, and maintenance on their own, from 1991 the International Service Activities of Sophia University began to newly initiate the training of Cambodian “Archaeological Site Conservation Officers” and “Skilled Masons,” who could process stones. The university’s Technical Exchange Committee for the Restoration of the Western Approach of Angkor

Wat, dispatched 14 members to the site, including the chairman, Dr. Zenkichi Hirayama, Visiting Professor Emeritus of Japanese Studies at Sophia University, to provide technical guidance to Cambodian conservators at the site of the ruins.

5. The Restoration Project of the Western Approach to Angkor Wat reinstates the Pride of the Khmer People

The first phase of restoration work on the western approach was completed in 1996, over a period of 12 years. A total of 60 people participated in the on-site heritage training, including 25 trainees in masonry skills, 30 technical workers, and 12 architecture and archeology executive trainees. With the guidance of Professor Masao Katagiri (Professor at Nihon University), the first phase of the Angkor Wat construction, 100 meters in length, was finished in November 2007.

In 1992, when the Angkor ruins were registered as a World Heritage Site, the former monarch, the late King Sihanouk, stated at a UNESCO international conference in Paris, “We must never forget the men who dug the first well.” He went on to say, “We will never forget the activities of Sophia University in Tokyo. They came to Cambodia first and started training human resources, at a time when the civil war had not abated, and many nations turned their backs on Cambodia.” For the second phase of the construction which began in 2016, the project was selected as ODA (General Cultural Grant Assistance) by the Japanese Ministry of Foreign Affairs, and all equipment was sent to the restoration site of the western approach to Angkor Wat (2015). (The Japanese government provided the first ruin restoration equipment, at a total cost of 94.7 million yen).

6. Departing to Cambodia. Record of the “Sophia Mission (Worldwide Service Activity)”

(A) Regarding support for the Royal University of Fine Arts (Phnom Penh), where the number of professors was reduced to zero owing to the massacre of intellectuals, Japanese professors of the Sophia University Angkor Wat Western Approach Technical Committee got off the plane at Phnom Penh Airport on their way to Siem Reap, and for 10 years they have been conducting intensive lectures in their specialized fields at the Royal University of Fine Arts, every summer (1991-2001). Over the past 12 years, the total number of students who have taken their courses has been around 5,400.



Intensive lecture at the Royal University of Fine Arts (1991)



On-site Student Training (1994)

(B) Degree Acquisition Project of the Royal Government of Cambodia for Emergency Executive Training: Sophia University (1) invited 18 Cambodian students to the Graduate School of Sophia University (area studies major), and over a period of around 20 years from 1997 to 2016, 18 students received degrees and graduated (7 received doctoral degrees and 11 received master's degrees). After obtaining their degrees, all of them returned to their home country and they are now working for the Royal Government of Cambodia. This was a medium to long-term human resource support of the Sophia Mission.

(C) Video recording of the tasks of the Sophia University Angkor Wat Western Approach Technical Training Committee: (1) The program was aired nationwide in Japan (November 21, 2001) as “The Bonds between Masters and Disciples who swear by Angkor Wat,” in the “Project X Challengers” program of NHK, and was very well received. It was also screened as an inflight program of the Japan Airlines. Furthermore, (2) in 1997, the NHK special program “Angkor Wat – The Unknown Water Empire,” was broadcast nationwide. On the basis of the 1/5,000 scale topographic map data prepared by the JICA of Japan and by using computer graphics, we had the discovery of the Tagoshi Irrigation of the Angkor period, approximately 900 years ago. This was a major discovery that confirmed the harvesting of double crops during the Angkor era, and as field verification it confirmed the agricultural economic activities of the time.

The “Conservation and Restoration of Angkor Wat by Cambodians for Cambodia” was featured in the NHK “Project X” program and was aired (November 20, 2001)



(D) Human resource training for the “Environmental Conservation Project” at the Angkor ruins: Human resource development to obtain the ISO14001 certification – Activities aimed at the zero waste movement (2003-2006): Sophia University (external joint research) worked along with local residents and food stalls with the aid of the APSARA Organization. Researcher Lao Kim Liang took the lead, to obtain the certification of the International Organization for Standardization (ISO) 14001 (Environmental Management). We organized sales people and elementary school students, in order to

conduct environmental conservation and zero waste campaigns. Despite the examination being very severe we became the first world heritage site to receive the ISO certification from the International Organization for Standardization in 2006, and this was a major global success for the Royal Government of Cambodia.

(E) The erection of the Angkor Cultural Heritage Education Center: An awareness and education center to protect the Angkor ruins from grave theft, and to carry out study on the ruins, was opened within the Banteay Kdei ruins in 2011, with the backing of the “Grass Roots Cultural Grant Assistance” of Japan’s Ministry of Foreign Affairs. Even today it abounds with many local residents and tourists.

(F) Sophia University received the Ramon Magsaysay Award, known as the Asian Nobel Prize: The reason for the award is as follows. The evaluation of the Ramon Magsaysay Foundation states, “(1) The conservation and restoration of the ruins should be carried out by the Cambodians. (2) The training of conservation officers and stonemasons has to be done. (3) Through these efforts the Khmer people will regain pride in their culture and be able to improve the conservation of the ruins. The importance of this project has been communicated to the world.”

(G) Answering the query as to what is the Sophia Mission (International Service):

Sophia University procured land in Cambodia, and built the university’s Sophia Asia Center for Research and Human Development, as a research and education facility (1996). The location is: Siem Reap City, Cambodia; Site area: 4800 square meters; Building area: 280.10 square meters; Structure: two-storied reinforced concrete building; First floor: office, large lecture room; Second floor: large lecture room (architecture and archeology laboratory), equipment storage room, and rooms for accommodation (5 rooms).

As a Japanese university, Sophia University was the first to open an education and research facility in Cambodia, namely the “Sophia Asia Center for Research and Human Development.” It was built in 1996 with lavish donations from Japan, to train Angkor heritage conservation officers and masons to replace those who had vanished under the Pol Pot rule. As Sophia University celebrated its centennial in 2013, it was erected as the first commemorative project of the grand layout. Conservation officer candidate trainees received practical training at the site of the ruins until 2:00 P.M., and in the evening they attended lectures at the center, on subjects like architecture, archaeology, and structural mechanics that involved the piling up of stones.



The Sophia Asia Center for Research and Human Development located in Siem Reap

(H) Erection of a museum to display Buddhist statues from the Angkor Dynasty, dating back to about 900 years.

In 1991, the global service program of Sophia University began training conservators at the Angkor ruins. While conducting archaeological training at the Banteay Kdei site in 2001 (Heisei 13), 274 Buddha statues and 1,000 Buddhist stone pillars were excavated from the ground within the site, and in 2010, six more Buddha statues were unearthed.

In March 2002, Takuya Okada, Chairman of the Aeon 1% Club, stopped by at the Sophia Asia Center for Research and Human Development where the Buddha statues were lined up on the floor, in order to see the excavated statues. He was amazed at the beauty of the sculptures and was highly impressed. In November 2003, Chairman Okada suggested erecting a new museum for the Buddhist statues with support from the Aeon 1% Club, and the new museum was erected in November 2007. The official name of the museum is: Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum, the architecture is by Sophia University, the funding was by the Aeon 1% Club, the location is Cambodia, adjacent to the Angkor Wat National land owned by the Royal Government, the site area is 13,140 square meters (provided free of charge by the Royal Government of Cambodia), the building area is 1,820.90 square meters, the total floor area is 2,533.80 square meters, and the structure is a two-storied reinforced concrete building.

The completion ceremony held on the 2nd of the same month, was attended by about 450 people who were involved. His Majesty King Norodom Sihamoni expressed his gratitude at the ceremony, and at that ceremony, Toshiaki Koso, the Chancellor of the Sophia School Corporation, offered a catalog of the donation of the museum to the Cambodian government. The museum is directed and operated by a local archaeological public corporation, the Authority for the Protection of the Site and Management of the Region of Angkor, (abbreviated as APSARA Authority), and it is open to the public. We invite people to witness the precious faces of those lovely statues. In 2017, 10 years after its construction, the Aeon 1% Club carried out repair work.



Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum located in Siem Reap

(I) Learning from each other via a series of Cultural clashes.

The people of Cambodia and we at the Sophia Mission are linked by strong bonds of trust that transcend borders, through the conservation and restoration of ruins and the training of human resources. I wish to point out that human resource development projects comprise a series of cultural clashes. Cooperation regarding the protection of archaeological sites is not just an issue of digging with shovels and re-stacking stones with cranes. First and foremost, we need to carefully study and research the ruins and rediscover indigenous techniques. This includes the history behind them, such as how the stones were laid and so forth. Starting with the introduction of conservation techniques that are compatible with the local indigenous level of technology, equipment and advanced technology need to be steadily brought in, while observing the site. Ultimately, we realize that these human resource development projects are about “learning by colliding with each other.” In principle, the conservation and restoration of archaeological sites need to be carried out solely by the Cambodian people. More than anyone else, those who can explain the unique ethnic culture of the Khmer people to the world are the Cambodians residing there. I believe the basis of international cooperation in human resource development and in the conservation and restoration of projects, should be to assist the people of Cambodia who dwell there.

(J) Why did we begin the training of Human Resources in Cambodia?

In the 1960s, over 40 Cambodian conservators who had worked with me on the conservation and restoration of projects, vanished under the Pol Pot regime. What urged us to do something concerning the Angkor ruins, was our aspiration to provide some consolation to their souls. At the center, trainees in archaeology, architecture, iconography, and stonemasonry linked to the APSARA Authority of the National Heritage Corporation, receive daily training at the archaeological sites and gain experience.

(K) Villagers participate in countermeasures adopted towards garbage, in projects linked to the coexistence of monuments, residents, and the natural environment.

We do not believe it is enough to just conserve and restore ruins. We also assist the villagers residing around the ruins, with projects to develop their village society and revitalize their traditional culture. In particular, the results of economic and social surveys of the nearby village of Sura Srang, and surveys of intangible cultural assets of traditional culture, have been announced. The village people voluntarily see to the cleanliness of the monuments.

(L) To conclude: Towards a strong relationship of trust without borders.

Our international collaboration, which commenced with the conservation and restoration of ruins, has from the start considered ruins (culture), villages (people), and forests (nature) as a trinity. Rather than focus solely on the ruins, we have worked with the surrounding villagers. Through projects of research and conservation of archaeological sites, we have established a strong relationship of trust with the people of Cambodia.

The basic position is (1) Extremely simple: “International cooperation is Human Cooperation.” In the field of heritage preservation activities, how much we can build will depend on the extent to which we can break through the barriers of skin color and language, and “create borderless relationships of trust,” at the personal level. ② First of all, we adopt the attitude that there is a great deal of “knowledge” heritage that we can gain in Cambodia, that remain in the villages and regions. We should refer to it ourselves and speak about similar “knowledge” in Japan. This mutual comparative dialogue appears to have increased the credibility of our Cambodian friends. ③ Since the 1980s we have often visited Cambodia and worked there, and so we have blended into the local life of Siem Reap. Tour guides inform Japanese tourists concerning the activities of the villagers and the Japanese at Sophia University, and there is no one who does not know about them. It may be said, “Continuity is Power.” I realize also that development of human resources as in everything else, needs perseverance (persistence), time (continuity), and a budget. We would like to express our gratitude to the Japanese and many foreign nationals for supporting our local activities, and for offering donations.

(M) Cambodian rice farming villages and Japanese farming villages have similar Dances and Folk tales.

Both Cambodians and Japanese are cultivators of fields. Villages were built around fields and rice paddies and people inhabited them, and hence we have various similar events and seasonal festivals. For example in Cambodia, the “snail” is said to be the king of wisdom, because he sits still in the rice field and observes the world. He judges and understands everything well, and knows it. Snails are also found in Japanese rice fields. In Japan, fortune-telling has been practiced since ancient times by pitting snails against each other. There is another similar event. In Japan, there is a lion dance on New Year’s Day, and village comedians wearing lion heads go from house to house to scare away evil spirits. In Cambodia, there is a “Trokot” dance where deer heads are worn, and this is also a folk ritual wherein people move from house to house during the Cambodian New Year (in April) to ward off evil spirits.



Dr. Yoshiaki Ishizawa and His Excellency Dr. Hang Chuon Naron, Minister of Education (November 1, 2022). Reception of an honorary doctorate from the Royal University of Phnom Penh



Royal University of Phnom Penh Honorary Doctorate Acceptance Speech (November 1, 2022)



Group photograph of the reception of an honorary doctorate from the Royal University of Phnom Penh by Professor Yoshiaki Ishizawa.

Present in the photograph are, among others, His Excellency Dr. Hang Chuon Naron, Minister of Education, His Excellency Masahiro Mikami, Ambassador of Japan to Cambodia (at the time), Dr. Chet Chealy, President, Royal University of Phnom Penh, and Vice President Dr. Oum Ravy (who earned a doctoral degree from Sophia University in Tokyo).

研 究 論 文

ヴィシュヌと観音 —クメール碑文から読み解く身体観と特質—

茨城キリスト教大学

宮崎晶子

1. はじめに

本稿では、アンコール（9–15 世紀）がインド由来の神々をどのように認識していたのか、観音の土着化および内延化¹の過程を辿るべくクメール碑文に記された身体観および特質を読み解く。特に「観音」と「ヴィシュヌ」の記述を取り上げ、外来の宗教に対してアンコールがどのような取捨選択をしたのか、一般的なインド美術との相違点を探る一助としたい。

アンコールで最も広い領域に影響を及ぼしたジャヤヴァルマン7世（1181–1218 年）は、辺境の寺院に観音像（図1）を配し、その様相はあたかも「遍在するほとけ（*viśvarūpi*）」を物語るかのようなようである（地図1）。「毛孔に天人をあまた宿す観音像」

（図1）は、『カーランダヴューハーストラ（*Kāraṇḍavyūha Sūtra*）』（以下KV、7世紀頃西北インド成立）（Studholme 2002）の「毛孔の描写」（第2部第2章）を典拠とする（宮崎 2022）。しかしながら、インド美術には「毛孔の描写」をもとに図像化した観音像の作例は管見の限り認められない。「毛孔の描写」を典拠とする図像について、失われた装飾写本に描かれた可能性や観音像以外の彫像に施された図像から影響を受けた可能性は否定できないが、このユニークな図像は、おそらく特定の「インド美術の観音像」の姿形に依拠することなくアンコール域内において経典の意味内容を解釈、図案化し制作したものと筆者は考える²。

このようにアンコールの図像には、

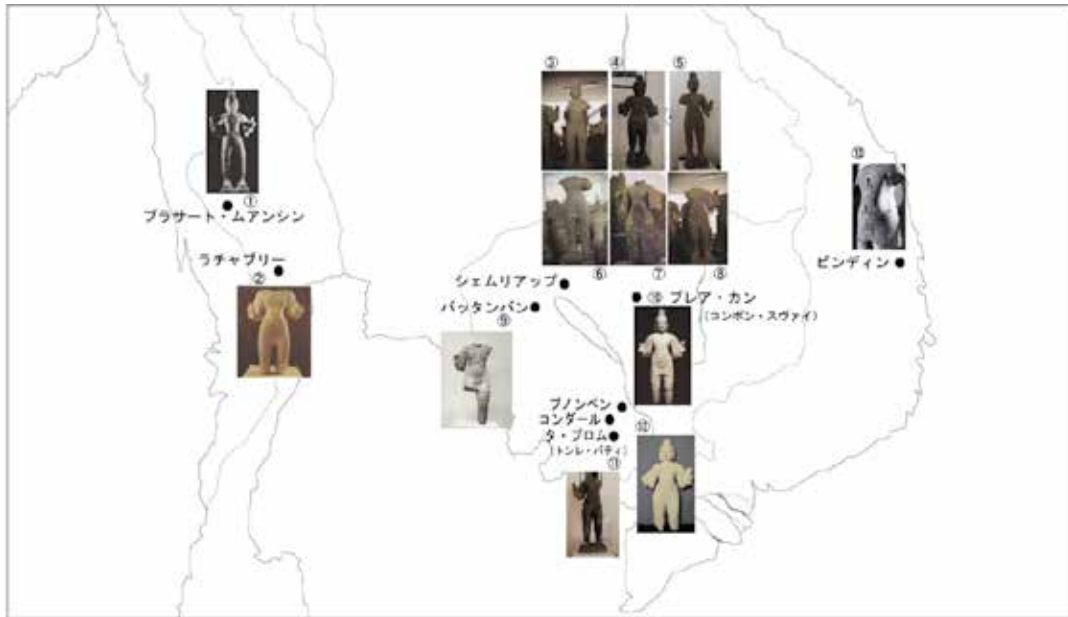
インド美術の一般的な図像から影響を受け制作されたと断定できないものがあることはすでに知られている。



宿す観音像（Jessup and Zephir (ed.) 1997: 315）

¹ 「土着化」とは一般に、外来の文化や宗教が発祥した地域とは異なる地域で受容され、変容し、定着することを意味する。しかし、「土着化」だけではジャヤヴァルマン7世期にいたるまでの観音信仰の広がりをも具体的に説明できないと筆者は考える。筆者の研究では、プレ・アンコール期に点在していた観音の彫像及び観音に言及する碑文が10–11世紀になり定着を見せ、「点」が「面」になり王都周辺へと影響が及ぶ様子がみられる（宮崎 2018）。本稿では「点」が「面」になり王都周辺の「内」側に観音信仰の影響が「延びて」行く様子を「内延化」と呼ぶ。「土着化」だけでなく「内延化」にも言及することにより信仰の広がりを具体的に検討できると考える。

² アンコールでは、ジャヤヴァルマン7世期以前よりヴィシュヌの千体仏石柱などが制作されており、多数の像を刻む「千仏」の表現はすでに認識されている（Jessup and Zephir 1997: 265-266）。神々が「遍満」する様子を表現していると考えられる。



地図1. 観音像の分布 (Miyazaki 2020)

- ① ムアン・シン (タイ) (Chutiwongs 2002: pl.153)
- ② ラチャブリー (タイ) (The Fine Arts Department 2002: 57)
- ③ シェムリアップ (死者の門) (筆者撮影)
- ④ シェムリアップ (バライ) (筆者撮影)
- ⑤ シェムリアップ (プレア・カン) (筆者撮影)
- ⑥ シェムリアップ (Mnt.486(?)) (筆者撮影)
- ⑦ シェムリアップ (プレア・カン) (筆者撮影)
- ⑧ シェムリアップ (バライ) (筆者撮影)
- ⑨ バッターンバン (バノン (Giteau 1976: 84) (Woodward 1994/1995: 107)
- ⑩ コンボン・スヴァイ (プレア・カン) (Jessup 1997: 315)
- ⑪ トンレ・バティ (タ・プロム) (筆者撮影)
- ⑫ コンダール (©アンコール国立博物館)
- ⑬ ビンディン (ヴェトナム) (Boisselier 1963: fig.223)

ジャヤヴァルマン7世期における王権の拡大は、10世紀以降に観音と王権の関係性が密接なものへと変化したことと関連があると筆者は考える(宮崎 2018)。10世紀ごろの碑文には、王が仏教を信仰する高位聖職者や有力者に対し地方の土地を付与し、未開の地を開拓したと記されている。11世紀に入ると、碑文には仏教寺院の建立や観音の奉納は「王のダルマ」として行われたとある(K.230、1026年)。領土拡大という王権の意図と、観音信仰の拡大という仏教徒の高位者の意図が一致した結果だといえよう。このような現象は、観音が王権との密接な関係を築く重要な過程の1つに位置づけられるだろう。王は観音の教えを拠り所とし、菩薩が「自利利他円満」を求めるがごとく広大な領域において統合を推し進めた(宮崎 2022)。

さらに王権と観音の関係が密接になる過程において、観音はヴィシュヌへと歩み寄るように

その身体観や特質を模倣する (Miyazaki 2020)。筆者の研究によれば、碑文には観音 (Avalokiteśvara および Lokeśvara) の身体観について「ヴィシュヌのように四臂である」とある (K.872、10 世紀半ばごろ、表 1・2 参照)。観音の特質を説明する碑文においても「トライローキヤナータ (Trailokyanātha、三界の主)」という、アンコールで主にヴィシュヌに対して使用されていた異名を観音に用いる。インドの経典や碑文を見ると、成就法について記した文献『サーダナマーラー (成就法蔓)』の世自在の項に「トライローカーナタ (Trailokanāthan)」という呼称があるものの (佐久間 2011:441,459)、ヴィシュヌや観音に対して広く「トライローキヤナータ」という呼称を使用した例は管見の限り見つからなかった。アンコールにおける観音信仰の拡大は領土拡大という目的と結びつき、すでに王権と密接な関係性を築き社会に広く知られたヴィシュヌになぞらえることで浸透したといえる。

以上のことから、インド美術における神々に対する一般的な身体観および特質と、アンコールに見られる神々の身体観および特質は分けて議論すべきであり、アンコール側の認識を検討することなしにアンコールひいては東南アジア仏教美術の解明は困難だと筆者は考える。同地における土着化・内延化の過程を読み解くことで、初めてインド、ネパール、チベットなど他地域の仏教美術との比較軸を確立し、「仏教東漸」の文脈に東南アジア仏教美術を組み入れることが可能になる。

2. これまでの研究における神々の同定方法

アンコールの美術に関する研究は、初期においてはフランス極東学院を中心に行われ、近年では大乘仏教や密教美術に関してシャーロック (Sharrock 2015) などの研究が見受けられる。これらの研究に共通していることは、アンコールの図像を読むにあたりインドにおける「一般的な」神々の同定方法を踏襲していることである。

従来の研究者の関心は 1 つの遺跡に表現された作例の包括的な調査にあり、アンコール域内の動態を俯瞰する研究は少ない。シャーロックや他の研究者はインド美術における神々の一般的な同定方法をアンコールの美術に適応させることに疑問を抱いていない。「四臂」の男神であればヴィシュヌ以外の神々は始めから選択肢に入らない (Sharrock 2015: 55, 81)。碑文研究のマックスウェルも特定の遺跡に残された王の系譜や王政そのものに着目し、神々の名前を限定的に拾い上げるにとどまっており、宗教的背景に踏み込んではいない (Maxwell 2012)。アンコールの碑文には、王の系譜や祭祀、地方行政、豪族の業績が記載されるだけでなく、神々の説話をもとに婉曲的な表現が用いられており、宗教的背景を知らなければ読み解けない描写が織り込まれている。

本稿では、碑文に見られる神々の身体観に焦点をあて、どのような認識のもと神々を具現化し造像したかを探る。具体的な例をあげれば、研究者の見解が分かれる図像としてバンテアイ・チュマーの四臂立像があげられる。四臂立像は、ジャヤヴァルマン 7 世の行軍を描く場面などで王の髻にヘアピンのように描かれている (図 2a・図 2b)。ポチエは、戦いにおいてこのような四臂立像を掲げることにどのような意味があるのか疑問を呈するにとどまり、尊格の同定は避けている (Pottier 2004: 140-143)。註 16 ではブリュノ・ダジャンスの助言により、同定は注

意深くあるべきという姿勢を示している。ポチエが再録したグロリエによる論考の最後には「この寺院の宗教は、ヴィシュヌから始まりやがて仏教に移行」とあり、「この寺院の図像は全てヒンドゥー教と仏教の二つに属する」と結論付けている (Groslier 2004(1937):161)。観音を追えば、必ずヴィシュヌに行き当たる。



図 2a-1. 王の髻に描かれた四臂立像
(バンテアイ・チュマー東回廊南側) (筆者撮影)



図 2a-2. 拡大 (筆者撮影)



図 2b-1. 王の髻に描かれた四臂立像
(バンテアイ・チュマー東回廊南側) (筆者撮影)

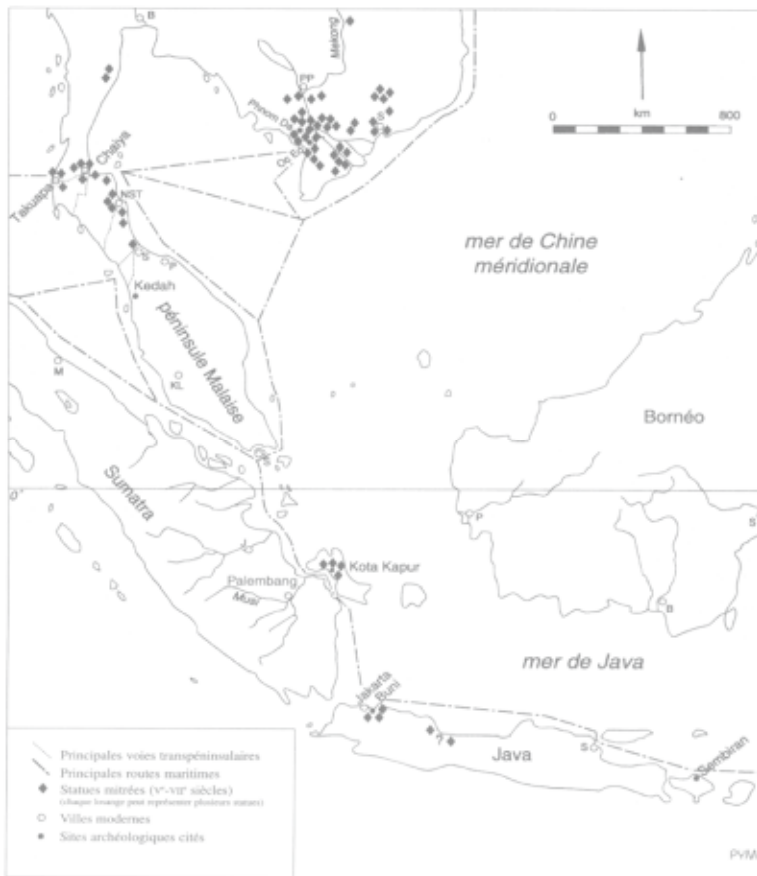


図 2b-2. 拡大 (筆者撮影)

四臂のヴィシュヌ像自体は、アンコール以前から東南アジアで広く知られる図像であり (Lavy and Clark 2015: 30-31)、紀元後 1 世紀ごろには東南アジアの広域で同じような特徴をもつヴィシュヌ像³が発見されている (Dalsheimer and Manguin 1998: 87-110)。碑文を見る限りインドと同様に東南アジアのヴァイシュナヴィズム (ヴィシュヌ派) は 5-7 世紀にかけて王権や政治勢力と結びつき“State Religion”となる動きが見受けられ、それに連動するように彫像も見つかっている、とマンガンは指摘する (Manguin 2010: 174-175)。このことから、交易ネットワークと関係する「ヴァイシュナヴァネットワーク」が存在したといえるだろう (地図 2)。一方、仏教徒の碑文にはこのような政治勢力との結びつきは見いだせない。筆者がアンコールの碑文から明らかにしたように、実際 10 世紀までは仏教徒の動きを見る限り王権と直接結びつ

³ 立像で王冠をいただき、長い裙を身につける。四臂をそなえ、宝珠、チャクラ、法螺貝、棍棒を持つ。

いてはいない (Miyazaki 2020)。アンコールの“State Religion”になるには、ジャヤヴァルマン7世の治世を待たねばならない。



地図2. 交易ネットワークとヴィシュヌ像
(Dalsheimer and Manguin 1998: 90)



図3. ター・リエチ (筆者撮影)

バンテアイ・チュマーのレリーフに描かれた四臂立像 (図 2ab) 以外にも、バイヨン様式の作例で「ヴィシュヌ」か「観音」か結論がでない図像はいくつもある。代表的なものでいえばアンコール・ワットのネアク・ター「ター・リエチ」だろう (図 3)。観音が主流だった時代のヴィシュヌ像が何を意味するかは、現地でも議論は尽きない。

断が難しい事例として四臂立像がある (図 4a)。本像は化仏もなく、持物は右第一手から時計回りに「宝珠 (もしくは蓮の茎)」「チャクラ」「法螺貝」があることからユネスコが作成したリスト (UNESCO-DCA) には、バイヨン様式の“Visnu debout” (Bakon) と記されている。しかしながら左第一手には棍棒ではなく四臂の坐像が認められる (図 4b)。バイヨン様式で四臂坐像を持つ代表的な図像といえ、バンテアイ・チュマーのレリーフに描かれた観音像だろう⁴ (図 5a・図 5b)。

⁴ バンテアイ・チュマー西回廊南側には観音のレリーフが8体描かれており、KVを典拠とするものと考えられている (Finot 1925)。KVに登場する六字真言は擬人化し四臂の六字大明となる (Studholme 2002: 144)。このことから、筆者はバンテアイ・チュマーの観音像がもつ四臂坐像は六字真言を意味すると捉えている。

このように、今までの研究でもインド美術の一般的な解釈を踏襲すべきか、それともアンコールの図像表現をもとに慎重に判断すべきか、常に見解は分かれる。同定できない図像がある場合、どれだけその図像を丁寧に調査したところで何かが明らかになることはない、と筆者は考える。

そもそも、『法華経』「普門品」にあるように「観音」は変幻自在な特質を持つため、相手に応じて姿を変える。「偉大な志を持つ求法者アヴァローキテーシュヴァラが仏の姿で人々に教えを説く世界もあれば、偉大な志を持つ求法者アヴァローキテーシュヴァラが求法者の姿で教えを説く世界もある…イーシュヴァラ（自在天）によって導き得られる者たちには、イーシュヴァラの姿で教えを説く…」とあるように、相手が求める姿に化身するという特質を持つ（坂本・岩本 2014: 253-259）。ヴィシュヌ派が集まる寺院内においては、ヴィシュヌに姿を変えて教えを説くだろう。図像と尊格が1対1で対応することを前提とした議論そのものを見直すべきだ。すでに他地域における研究でも指摘されているように、ヒンドゥーか仏教かという二項対立的な問い自体が、東南アジアにおいて意味をなさない (Brown 1996: 48, 56-61)。

本稿では、まず碑文からアンコール側の認識を明らかにするため、次項において「ヴィシュヌ」「観音」の身体観および特質をリストアップする。



図 4a. ヴィシュヌ立像 (バコン)
(筆者撮影、アンコール保存事務所)



図 4b. 拡大



図 5a. 三十二臂の観音像
(バンテアイ・チュマー西回廊南側) (筆者撮影)



図 5b. 右第一手・四臂坐像(筆者撮影)

3. 碑文に見られるヴィシュヌと観音の身体観および特質

ヴィシュヌに関する碑文 (表 1)、観音に関する碑文 (表 2)、それぞれのリストを見ながら身体観と特質について検討する。

表を作成する前提として、筆者は碑文は個別具体的な内容を含むと認識している。よって、1つの碑文に書かれた身体観が必ずしも領域全体で共有された普遍的なものであるとは捉えていない。碑文自体、当時記された文字史料の一部であり、書き手の社会的階層が限定される。領域内で身体観と特質をどの程度認識していたかは、今後の図像調査によって明らかにできるだろう。

表1・2は“Viṣṇu”、“Avalokiteśvara (Lokeśvara)”⁵を *Inscriptions du Cambodge* (以下 IC) の各巻末の索引および検索を用いリスト化したものに、すでに他稿(宮崎 2018)(Miyazaki 2020)で言及した碑文の情報を付け加えたものである。リストの各項「身体観」や「特質」は“Viṣṇu”、“Avalokiteśvara (Lokeśvara)”が記されている碑文の一節から読み取ったものであり、前後もしくは碑文全体を網羅しているものではない。つまり、*Nouvelle Inscriptions du Cambodge* (Pou 1998-2011) や *BEFEO (Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient)*、*Siam Society* に記載されている碑文などを対象としてリスト化していない。また、ヴィシュヌの呼称として使用される「四本の腕をもつもの」「三步で世界を制するもの」、「蓮の目をもつもの」、「へそから蓮を出すもの」、加えてヴィシュヌ、観音に使用される「三界の主」なども網羅していない。1つ1つの碑文から明らかになるヴィシュヌと観音の身体観や特質を図像と照らし合わせ、どのような内延化が認められるかについては、今後の課題としたい。

それでは、ヴィシュヌの身体観および特質を読んでいく(表1)。6世紀ごろから“Viṣṇu”という記述が認められ、9・10世紀が最も多い。個人名および固有名詞として使用されることが多く、後述するようにプラーナなどでインドでも広く認知されている特質をなぞらえているように見受けられる。表1に設けた「人名・役職名 固有名詞・比喩」は、本稿で言及するヴィシュヌの身体観や特質とは直接的な関係はないが、「ヴィシュヌ」を村名や個人名として名乗る現象は、内延化や地域への定着と捉えることができる。

「ヴィシュヌ」の身体観に関する記述として、「腕が四本」「法螺貝とチャクラを持つ」「足の塵」「へそから蓮、蓮にはブラフマー」「腹の中にすべての3つの世界がある」などが見られた⁶。

これらの記述と『リグ・ヴェーダ (*Rg-Veda*)』、『バガヴァッド・ギーター (*Bhagavadgītā*)』、『バーガヴァタ・プラーナ (*Bhāgavata Purāṇa*)』を照らし合わせる。以下簡単にそれぞれの文献について概観する。

最も古い宗教文献であるヴェーダのなかでも最古層に位置する『リグ・ヴェーダ』は、紀元前1200年ごろを中心として長い期間かけ制作された。ヴィシュヌの項は独立讃歌あるいはこれに準ずるものとして五篇があるのみで、ヒンドゥー教における最高神の地位をこの数字から予想することは困難である(辻 1970: 41)。太陽の光照作用を神格化したと考えられ、「遍満する」を語源に持つ(上村 2020: 96, 99)。闊歩の神・ヴィシュヌは「(人間の)領土をなさんがた

⁵ Viṣṇudeva、Viṣṇudharma、Viṣṇupada、Viṣṇupura、Viṣṇuloka など Viṣṇu から派生した言葉、また Avarokiteśa、Lokeśa を含む。

⁶ 「蓮の目をもつもの」(K. 445)、「三步で世界を支配する (Trivikurama)」(K.256)の表記も見られるが、本稿では割愛する。

め」三步で世界を踏破し、その三步のうちに一切万物は安住する（辻前掲書:41-44）。五篇の中には、すでにヴァーマナ（矮人）物語の萌芽が確認できる。

『バガヴァッド・ギーター』は1世紀ごろの成立とみられ「神の歌」を意味する。『マハーバーラタ』第6巻に編入され、教主は英雄クリシュナであり、ヴィシュヌの化身、ヴァスデーヴァの息子である。『リグ・ヴェーダ』に比べ、神々の身体観や特質を丁寧に述べている。『リグ・ヴェーダ』の太陽神ヴィシュヌは、ブラーフマナ文献の新層部（前8-前6世紀?）において、プルシャ、ナーラーヤナと同一視されるようになり、ついにバーガヴァタ派の人格神ヴァスデーヴァ・クリシュナと同一視されるに至った。（上村前掲書:221）とあるように、ヴィシュヌは時代を経るごとに様々な形で語り継がれる神となった。

『バーガヴァタ・プラーナ』の成立年代には諸説あり10世紀ごろ成立したと考えられる。ヴィシュヌ派の最高聖典でもっともよく知られているプラーナである。ヴィシュヌとその権化クリシュナへの讃美が繰り返される中で、人間と神との情愛や幼少時の牧童クリシュナの姿が描かれている。『リグ・ヴェーダ』、『バガヴァッド・ギーター』と比べ神々の身体的特徴に関する記述が多く見受けられる。

では、これらの文献と照らし合わせながらクメール碑文に記されたヴィシュヌの身体観を確認する。

「腕が四本」という表現は2つの碑文（K.165、K.872）に認められる。関連する持物への言及は「四本の腕にチャクラ・土地（mahī）・法螺貝・棍棒を持つ」（K.165）、「法螺貝とチャクラを持つ」（K.256）などがある。『リグ・ヴェーダ』において、辻の翻訳を読む限り「四臂」に言及している箇所はない。一方、『バガヴァッド・ギーター』ではクリシュナに対し「以前のよう、王冠をつけ、棍棒を持ち、円盤を手にしたあなたを見たい。まさにあの、四つの腕を持つ姿になってください。千の腕を持つ方よ。一切の姿を持つ方よ。」（上村2020:101）と呼びかけており、註に「通常、ヴィシュヌは四本の手に、法螺貝、円盤、棍棒、蓮華（または弓）を持つとされる」とある。『バーガヴァタ・プラーナ』では「四本の腕に、法螺貝と鎚矛、蓮の花、円盤を持たれて」（美莉亜 2015:353）という記述が見受けられる。プラーナにおいても「四臂」はヴィシュヌの代表的な身体的特徴といえる。

持物に関する記述をみると、碑文には四本の腕に「法螺貝」「チャクラ」「棍棒」「土地（mahī）」を持つとある（K.165）。「四本の腕」に言及していない碑文においても「手には大地（bhūmi）」と記す（K.291）。前述したように、プラーナにおいて一般的に四臂のヴィシュヌは「蓮（Padma）」「チャクラ（Chakra）」「法螺貝（Śankha）」「棍棒（Gadā）」を持つとされる（Bidyabinod 1920）。『バーガヴァタ・プラーナ』では、ナーラーヤナに対し「法螺貝と円盤、鎚矛を手に持つ御方よ」（美莉亜 2009:257）と呼びかけ、クリシュナに対し「法螺貝と円盤、鎚矛を手に持つ御方よ」（前掲書:273）と呼びかけている。このように、「蓮」について言及しない場面も認められるが、クメール碑文のような「土地」を持つとの表記はやはり見受けられない。アンコール側がどのような理由から「蓮」より「土地」という表現を選択したかは分からないが、プラーナを読む限り「蓮」は手や足、目、臍、顔など体の様々な部分を形容する言葉として使用される。単純に「蓮」の表現が重複しすぎてしまうため、表現の重複を避けたとも考えられる。

アンコールのヴィシュヌ像に関して、持物の4つ目が蓮ではなく「宝珠」であることはすでに周知の事柄である (Jessup and Zephir 1997: 194)。彫像が持つ「宝珠」が碑文の「土地」という記述を意味するとは断定できないが、「蓮」とは別の表現を選択するという認識は、彫像を見る限りアンコールにおいてある程度普遍的な広がりを持っていたと想定できるだろう。

次に「足の塵」(K.923)についてプラーナに記された表現を調べると、『バーガヴァタ・プラーナ』にはクリシュナに対して「あなたの御足の塵で世界を清めてください」(美莉亜 2009: 182)という場面があり、「御足の塵」と「御足を洗った水」に「世界を清める」という同一の作用があるとみなしている。そのほかにも「栄光に満ちた主の御足をその水で洗うと、祭主(バリ)は、全宇宙をも聖化するその水を、自分の頭に受けたのです。」(美莉亜 2015: 363)、「偉大な聖者の御足を洗った水は、全てを浄化してくれるのです。」(美莉亜 2009: 406)など「御足」と「水」について言及している。

「へそから蓮、蓮にはブラフマー」(K.218)については、『バーガヴァタ・プラーナ』に「臍から蓮(ヴィシュヌ)」(美莉亜 2009: 196)、「その臍から生えた蓮の上に座る、サンサーラを恐れるブラフマー神」(前掲書: 639)という記述がみられた。

最後に、「腹の中にすべての3つの世界がある」(K.989)について、セデスは、『バーガヴァタ・プラーナ』の「主の命名式と、幼児としての主の遊戯」の一場面であるとする。筆者が確認したところ、クリシュナの母ヤショーダーがクリシュナの口の中に全宇宙を見た、という表現があった(美莉亜 2009: 54)。

そのほかのヴィシュヌの身体観については K. 989、K.661 に見られるように「首にはカウストゥバが輝き」という表現があり、『バーガヴァタ・プラーナ』でクリシュナの姿について述べる場面において認められる(美莉亜 2009: 335)。

ヴィシュヌの特質については「支配者」「勝利の、勝りたる(jayati)」などが挙げられる。「支配者」については『リグ・ヴェーダ』に「彼は独りして三界を支えたり、天をも地をも、一切万物をも」というような記述がみられる。「勝利の、勝りたる」については、辻が翻訳した『リグ・ヴェーダ』には単語そのものとしては見られないものの、神格を形容する一般的な文言であり『バガヴァッド・ギーター』においてはクリシュナやアルジュナがいるところ「勝利がある」と表現される(上村 2020: 142)。そのほかの「望みの如く不断の雨が降る」(K. 872)という特質などについては、別稿で検討したい。

次に「観音」の身体観および特質についてである(表2)。

観音の身体観の中で複数みられる表現は「四本の腕を持つ」(K. 872, K. 266)という記述であった。観音の代表的な経典『法華経』「普門品」(坂本・岩本 2014: 243-271)とアンコールで流布したと考えられる KV の要約(Studholme 2002)を見る限り、観音が「四本の腕を持つ」という記述は見受けられない⁷。

⁷ 具体的な身体観について経典に書かれていることは少ないが、KV の第2部第2章「毛孔の描写」には“nirañjano rūpī mahārūpī śatasahasrabhujah kotīśatasahasranetro viśvarūpī ekādaśaśiṅṣah”とあり、「穢れない身体」、「偉大な(大きな)身体」、「千手」、「千眼」、「多種の(様々な)身体」、「11面(頭)」という身体観が認められる(Vaidya 1961: 290)。

そのほか「光り輝くローケーシュヴァラ、ジナアミターバを頭の上に置く。」(K.214)という記述が見受けられる。しかし『法華経』「普門品」にはジナアミターバが頭の上にあるとは書かれていない(坂本・岩本 2014: 243-271)。一般的に観音像の髻にあるとされる化仏については、マルマン(Mallmann 1948: 308-310) が言及しているように『観無量寿経』(大正蔵巻 12, 343c)を典拠とすると考えられるものの、当該箇所では「立像」とされ尊格も定かではない。他地域においても化仏のない観音は存在し(福山 2002: 34)、反対に菩薩であれば化仏を有するという作例も認められる(山田 2003: 356)。よって、化仏の有無は尊格の同定の「必須項目」ではないと筆者は捉えている。KVにおいては、第1部11章「バリへの慰め」に“I bow my head to the one who has the image of Amitābha (amitābhamūrte śirasā namāmi)” (Studholme 2002: 130) とあり、漢訳では「頂戴弥陀一切智」(大正蔵巻 20: 53a, 16) とある。いずれにせよ KVの成立年代を考えれば「観音が阿弥陀仏(化仏)をいただく」という表現はむしろ図像が先行するため典拠が特定できるものではなく、南アジアの慣例に従ったに過ぎないといえる。よって、K.214の記述についても経典や説話の教えよりも図像による認識が先行したものとみなす。

そのほか、身体観の中でも観音の化身について「バーラーハカという馬である。」(K.485)という記述がある。KVの第2部第1章「シンハラ冒険譚」で観音の化身として現れた神馬バーラーハのことである。

観音の特質については「勝利の、勝りたる (jayati)」(K. 244, K.266, K.417, K.288 と K.908) という表現が最も多い。「勝利の、勝りたる (jayati)」の初出はK. 244(A. D. 791) だろう。「チリチリした地獄の火に打ち勝つ (jayati)」(K.417)とあるように観音の最も一般的な特質である「地獄からの救済」という表現も見られた。「勝利の、勝りたる (jayati)」や「地獄からの救済」というテーマは『法華経』「普門品」で一貫して描かれる観音の代表的な特質である(坂本・岩本 2014: 243-271)。

以上、「ヴィシュヌ」および「観音」の身体観・特質を表1・2から読み解いた。



図6. 四臂の観音像(筆者撮影、バンコク国立博物館)

全体を通して「ヴィシュヌ」に関する身体観や特質は、すでに筆者が言及しているように「ヴィシュヌ」のそれを「観音」が模倣するものであった。本稿でヴィシュヌの身体観をまとめた結果、インド美術におけるヴィシュヌの一般的な持物(Bidyabinod 1920) と比べ、「蓮」ではなく「土地」とするという違いはあるものの、特筆すべき身体観の違いは見受けられなかった。一方、観音について言えば、ヴィシュヌの数ある身体観のなかでも「四臂である」という点を好んで模倣する様子が見受けられた。碑文にみられる身体観や特質と彫像やレリーフにみられる図像表現との照合は別稿で詳細に検討するが、ヴィシュヌのように「四臂」で「法螺貝」を持つ観音像はすでに確認されている(図6)。タイのタ・ムアン付近で発見されたという本像は髻に化仏の痕跡があり、右第一手・蓮、右第二手・数珠、左第一手・経冊、左第二手・法螺貝を持つ。

最後に、本稿でICを中心にリスト化した限りでは「観音」から「ヴィシュヌ」を模倣するような表現は認められるものの、その反対、つまり「ヴィシュヌ」から「観音」へのアプローチは見受けられなかった。

4. まとめにかえて

観音に関する碑文は7・8世紀から存在するが、同地において観音信仰の定着・内延化がみられるのは10・11世紀ごろと言えるだろう。10世紀以降、観音特有の身体観とともにヴィシュヌの身体観をもなぞらえていく。11世紀には「三界の主」というヴィシュヌの特質を後追いつする。

インド美術を研究する佐久間は「変化観音の種類や姿が多様であるということの背景には、その源流の地であるインドにおいて、仏教がヒンドゥー教と共存していたという事実があることを忘れてはならない。」(佐久間 2015:242)とする。変化観音とは、多くの手や顔を持つ密教的要素を持った観音のことであり、本稿で示した「毛孔に天人をあまた宿す観音像」(図1)もそれにあたる。さらに、社会における観音の役割に焦点を当て「観音のさまざまな姿や形は、その救済能力を表す一方で、ヒンドゥー教との摩擦や軋轢を緩衝する役割を果たすものとして、出家や在家を問わず、人々に受容されてきたのである。」と述べる(佐久間前掲書:242)。「衆生を救う」という特質を持つ観音は、実社会の中でも衝突を回避する役割を担っていた。

また、『菩薩とはなにか』を著した平岡は「民間信仰レベルにおいて、仏教とヒンドゥー教とは共通する基盤を持ち、インドの人々の心をとらえるために、すでに知られていたヒンドゥー神の表現方法が部分的に取り入れられた可能性がある」と述べる(平岡 2020: 183)と述べる。神が化身して生類を救う、という発想はヴィシュヌ神の化身信仰に認められる。

佐久間や平岡がインドの観音について述べるように、アンコールにおいても他の神々と共存するため従来のヒンドゥー教における神々の表現方法を取り入れ、社会という基盤を共有した。ヒンドゥーの神々の表現手法を取り入れた点は、アンコールはインドと同じような道筋をたどったといえる。また、王権がトップダウンで外来宗教の浸透を図る、という点は他地域と同様といえるだろう。

本稿で焦点を当てた碑文および筆者のこれまでの観音に関する研究を見る限り、インドとアンコールにおける神々の身体観に見られる差異として「観音は四臂である」という認識を強調した点が挙げられる。東南アジアにおいて5-7世紀以降にヴィシュヌ派による社会的ネットワークが確立したのち、12世紀のアンコールでは王権が観音の教えを抛り所とし最大版図をまとめようと試みる。換言すれば、南アジアからヴィシュヌ派の影響を受け、ヒンドゥー教による権威や社会的枠組みが定着した領域内において、観音を依り代とし「菩薩」の行いという非常に東アジア的な手法を用い統合を目指す。

本稿では基礎資料の収集に重点をおいたが、さらに類例を検討しつつ、今後はアジアにおける観音信仰のなかにアンコールの観音を位置づけられるよう広域にも目を向けていきたい。

謝辞

碑文の読解については、松浦史明氏に助言いただいた。また、本研究は「アンコール朝における観音信仰の土着化と王権の拡大」[文部科学省科研費 22K00184] (研究代表者 宮崎晶子) および「東南アジア古代宗教世界における「コトバとモノの関係史」への地域横断的アプローチ」[文部科学省科研費 23H00659] (研究代表者 佐藤桂) の成果の一部である。

参考文献

碑文関連

- Aymonier, Etienne. 1883. « Quelque notions sur les inscriptions en vieux Khmèr. » *Journal Asiatique* (8-1): 441-505.
- Cœdès, George. 1908. “Les inscriptions du Bat Chum.” *Journal Asiatique* (12): 213-252.
- _____. 1937-1966. *Inscriptions du Cambodge*. vol. I-VIII. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- _____. 1913. “Études Cambodgiennes VII: Seconde étude sur les bas-reliefs d'Angkor-Vat.” *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (13): 1-36.
- _____. 1928. “Études Cambodgiennes XIX: La date de Bayon.” *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (28): 81-146.
- _____. 1941. “La stèle du Prah Khan d'Angkor.” *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (41): 255-302.
- Cœdès, George et Dupont, Pierre. 1937. “Les inscriptions du Pràsàt Kôk Pô.” *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (37): 377-413.
- Finot, Louis. 1915. “Notes d'épigraphie.” *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (15): 1-135.
- _____. 1925. “Inscriptions d'Angkor.” *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (25): 289-409.

そのほかの文献

- Bidyabinod, Pandit B. B. 1920. “Varieties of the Vishnu Image.” *Memoirs of the Archaeological Survey of India* (2): 23-33.
- Boisselier, Jean. 1963. *La statuaire du Champa: recherches sur les cultes et l'iconographie*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- _____. 1965. “Precisions sur quelques images Khmères d'Avalokitesvara les bas-reliefs de Banteay Chmar.” *Arts Asiatiques* (11): 73-90.
- Brown, Robert L. 1996. *The Dvāravatī Wheels of the Law and the Indianization of South East Asia*. Leiden: Brill.
- Chutiwongs, N. 2002. *The Iconography of Avalokitesvara in Mainland South East Asia*. Indira Gandhi National Centre for the Arts: Aryan Books International: New Delhi.
- Dalsheimer, Nadine and Manguin, Pierre-Yves. 1998. “Visnu mitrés et réseaux marchands en Asie du Sud-

- Est: nouvelles données archéologiques sur le I^{er} millénaire apr. J.-C.” *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* (85-1): 87-123.
- Finot, Louis. 1925. “Lokesvara en Indochine.” *Études Asiatiques: publiées à l'occasion du vingt-cinquième anniversaire de l'École Française d'Extrême-Orient par ses membres et ses collaborateurs*, G. van Oest: 227-256.
- Giteau, M. 1976. *The Civilization of Angkor*. New York: Rizzoli.
- Groslier, George. 2004 (1937). “Une merveilleuse cité Khmère «Banteai Chhmar» ville ancienne du Cambodge.” *Aséanie* (13): 151-161.
- Jessup, Helen Ibbitson and Thierry Zéphir, eds. 1997. *Sculpture of Angkor and Ancient Cambodia, Millennium of Glory* National Gallery of Art, Washington: National Gallery of Art.
- Lavy, Paul A., and Clarke, Wesley. 2015. “Integrating the Phong Tuek Viṣṇu: The Archaeology and Art History of a Forgotten Image.” *Journal of the Siam Society* (103): 19-62.
- Mallmann, Marie Thérèse de. 1948. *Introduction à l'étude d'Avalokiteṣvara*. Paris: Civilisations du Sud.
- Manguin, Pierre-Yves. 2010. “Pan-Regional Responses to South Asian Inputs in Early Southeast Asia.” In Bérénice Bellina, Elisabeth A. Bacus, Thomas Oliver Pryce, and Jan Wisseman Christie (eds.), *50 Years of Archaeology in Southeast Asia: Essays in Honour of Ian Glover*: 170-181. Bangkok: River Books.
- Maxwell, TS. 2012. “A new Khmer and Sanskrit Inscription at Banteay Chhmar.” *Udaya, Journal of Khmer Studies* (10): 135-201.
- Mette, Adelheid. 1997. *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha*. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.
- Miyazaki, Akiko. 2020. “Lokesvara (Avalokiteṣvara) and ‘Rājadharmā’ in Angkor.” *Preah Nokor* (2): 23-34.
- Pottier, C. 2004. “Apropos du temple de Banteay Chmar.” *Aseanie* (13): 131-149.
- Pou, Saveros. 1998-2011. *Nouvelles Inscriptions du Cambodge (I-IV)*. Paris: École Française d'Extrême-Orient
- Regamey, Constantin. 1971. “Motifs Vichnouites et Śīvaites dans le Kāraṇḍavyūha.” *Études Tibetanes, Librairie d’Amérique et d’Orient*: 411-432 (esp. 127-132).
- Schweyer, Anne-Valerie. 2007. “The Confrontation of the Khmers and Chams in the Bayon Period.” In Joyce Clark (ed.), *Bayon, New Perspectives*: 50-71. Bangkok: River Books.
- Sharrock, Peter D. 2015. *Banteay Chhmar: Garrison Temple of the Khmer Empire*. Bangkok: River Books.
- Studholme, Alexander. 2002. *The Origins of Oṃ Maṇipadme Hūṃ: A Study of the Kāraṇḍavyūha Sūtra*. New York: State University of New York.
- The Fine Arts Department. 2002. *Guide to the Gallery of Thai History*. National Museum Bangkok.
- Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa (ed.) 1961. *Mahayana-sutra-samgraha*. Part I. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- _____ (ed.) 1960. *Gaṇḍavyūha Sūtra*. Buddhist Sanskrit Texts, No. 5. Darbhanga: Mithila Institute.

Woodward, Hiram. 1994-1995. "The Jayavuddhamahānātha Images." *The Journal of Walters Art Gallery* (52-53): 105-111.

_____. 2007. "The Kāraṇḍavyūha sūtra and Buddhist Art in the 10th-century Cambodia." In Pratapaditya Pal (ed.), *Buddhist Art: Form and Meaning*: 71-83. Mumbai: Marg Publications.

上村勝彦 (訳) 2020 『バガヴァッド・ギーター』 岩波文庫

坂本 幸男・岩本 裕 (訳) 2014 (1967) 『法華経〈下〉』 岩波文庫

佐久間留理子 2005a 「『カーランダ・ヴェーハ』の研究—メッテ校訂本とサマスラミ校訂本の相違点—」 『印度學仏教學研究』 (54-1): 426-421.

_____. 2005b 「『カーランダ・ヴェーハ』の研究序説—サマスラミ(ヴァイドヤ)校訂本と漢訳との比較対象から—」 『中世インドの学際的研究』 平 14-16 年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書(研究代表者 前田専学): 200-215.

_____. 2011 『インド密教の観自在研究』 三喜房佛書林

_____. 2015 『観音菩薩: 変幻自在な姿をとる救済者』 春秋社

周達観、和田久徳訳注. 1989 『真臘風土記』 (東洋文庫 507) 平凡社

辻直四郎 (訳) 1970 『リグ・ヴェーダ讃歌』 岩波文庫

平岡聡. 2020 『菩薩とは何か』 春秋社

福山康子 2002 「アジャンター石窟における観音諸難救済図」 『名古屋大学博物館報告』 (18): 29-48.

宮崎晶子 2018 「観音とアンコールのフロンティア」 『カンボジアの文化復興』: 69-85.

_____. 2022 「ジャヤヴァルマン7世期における統合のイデオロギー —観音像と「仏の花飾り」—」 『東南アジア考古学』 (42): 61-71.

美莉亜 (訳) (上・2010, 中・2015, 下2009). 『全訳バーガヴァタ・プラーナー』 上・中・下、ブイツーソリューション.

山田耕二 2003 「大乘菩薩像の誕生と展開」 肥塚隆・宮治昭 (責任編集) 『世界美術大全集 インド (1)』 小学館: 353-360.

刻文史料にみるジャヤヴァルマン7世時代の寺院と尊像（1） —バンテアイ・クデイ寺院の歴史的な位置付けをめぐって—

松浦 史明

日本学術振興会特別研究員
上智大学総合グローバル学部

はじめに

バンテアイ・クデイ寺院の発掘調査報告書第1巻が刊行された（上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022）。同書では1991年から2000年に実施された発掘調査の成果がまとめられており、寺院をめぐる土地利用の変遷について有益な情報を多く含んでいる。

本稿の目的は、この報告書刊行に触発されながら、バンテアイ・クデイ寺院の歴史的な環境およびその位置づけについて、刻文史料をもとに改めて考察することである。

バンテアイ・クデイ寺院の研究史については、荒樋久雄による論文に詳しい（荒樋 2001；上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022：33-70）。荒樋は、「バンテアイ・クデイ寺院がバイヨン様式の中で最初に建立された」という年代観も含め、「虚説に近い仮説」があたかも「歴史的史実」であるかの様に語られ、次の世代へと受け継がれている」と述べる（荒樋 2001：157）。

すでによく知られているように、バンテアイ・クデイからは寺院建立の縁起などを記したいわゆる創建碑文（Foundation Stele）が見つかっておらず、刻文史料から得られる直接的な情報は限りなく少ない。そこで、寺院が建立されたジャヤヴァルマン7世期（在位1181年頃～1220年頃）の刻文史料の状況を全体的に把握しつつ、寺院と尊像にまつわる基礎的な情報を総合的に整理した上で、当該時期の寺院建立のあり方などを提示し、その中でバンテアイ・クデイ寺院をいかに位置付けることができるかを考える必要がある。

本稿では、その手始めとして、同王治世下で残された刻文のうち、紀年のある刻文3基を取り上げ、検討を加える。

1. ジャヤヴァルマン7世期の刻文史料の状況¹

¹ 現在も新発見が続くクメール刻文の整理については、フランス極東学院（EFEO）が「クメール」の頭文字「K」を付した整理番号で管理しており、刻文研究においてはこのK番号が主に用いられている。現在EFEOのウェブサイトには公開されている最新の刻文リスト（2021年11月9日付）によれば、K.1からK.1566までの登録がなされている。ただし、刻文の点数については数え方が不統一で、一つのK番号に複数の刻文が登録されている場合もあれば、一連の刻文と捉えても差し支えない刻文に別個の番号が振られている場合もある。これらは発見時、登録時の状況によるものと考えられる。いずれにしても、東南アジア全域と比較してクメール刻文がもっとも数量が豊富であることは間違いない。クメー

アンコール朝の歴史で最も有名な王の一人であるジャヤヴァルマン7世は、西暦1181年もしくは1182年に即位したことが複数の刻文から知られる。死去した年代については、研究者間で若干のズレはあるものの、1218年から1220年の間に亡くなったとされる²。

同王の治世中、アンコール朝は最大版図を獲得し、一時は東隣国のチャンパーを支配下においたほか、現在のラオス、ヴィエンチャン周辺やタイ西端部にも同王治世下に帰属する遺跡や遺物が所在する。また、いわゆる「王道」と呼ばれる幹線道路網の整備や施療院の配置、数々の寺院建立などを行ったこともよく知られている。ジャヤヴァルマン7世の事績については拙稿（松浦2019b）を参照されたい。

EFE0による刻文リストを確認したところ、ジャヤヴァルマン7世期に帰属する紀年のある刻文は49点である（刻文点数は整理番号ベース。以下同）。このうち、「施療院碑文」と呼ばれる、施療院（*ārogyasāla*）建立の縁起を記したほぼ同内容の刻文（紀年は西暦1186年）が約半数の25点を数える³。また、金属器や石製および青銅製の彫像に奉納者・奉納対象などの情報が1行～数行刻まれた刻文が17点ある⁴。四角柱の石碑状の形状をもち、寺院建立縁起など比較的豊富な内容をもつ有紀年刻文は、施療院碑文の他には、タ・プローム碑文（K.273/1186年）、プラサート・リチ刻文（K.453/1206年。ただし同碑文は損傷のためほとんど判読不能）、プラサート・トー碑文（K.692/1195年）、プレア・カン碑文（K.908/1192年）の4点を数えるのみである。

紀年はないが、同王に帰属するものと考えられる刻文もある。同王の事績を記した刻文として有名なピミアナカス碑文（K.484, K.485）、プラサート・チュルン碑文（K.287, K.288, K.547, K.597）には紀年がない。また、ジャヤヴァルマン7世期に建てられたいわゆるバイヨン様式の寺院にみられる、各部屋の入口側柱等に奉納者や崇拝対象物を記した小刻文の類（60点あまり）は、その大部分が同王治世下に帰属するものと考えられる（Maxwell 2007c; 松浦2014: 45-49）。このような、紀年はないが同王治世に帰属する可能性のある刻文史料を含めると、ジャヤヴァルマン7世期の

ル刻文の年代幅は、有紀年刻文で言うと、西暦611年のトゥオル・ワット・コムヌー（アンコール・ボレイ）刻文（K.611）から西暦1917年のワット・クラン・ドン刻文（K.771）、西暦2003年のプニェ・ルー刻文（K.1390-1392）など近現代の刻文も含まれる。前述したとおり、本発表ではジャヤヴァルマン7世期に帰属する刻文史料を扱う。

² これは、同王の名が確認される最後の有紀年刻文がシャカ暦1139年（西暦1217/18年）の日付をもつ金属器刻文K.1234であること、同王治世中に継続した隣国チャンパーとの係争が1220年に終息したらしいことがチャンパー刻文（C.4 チョディン刻文）にみられる「1220年、クメール人は聖なる都〔アンコール〕に行き、チャンパーの人々は〔王都〕ヴィジャヤと南北〔の土地〕に戻った」との文言から知られることを根拠とする。

³ K.12, 160, 209, 368, 375, 386, 387, 395, 402, 435, 537, 602, 614, 667, 912, 952, 955, 1170, 1402, 1519, 1520, 1521, 1522, 1523, 1524

⁴ なお、金属器に刻文が書かれるのは、今のところ西暦1007/08年のK.1218が初出である。

刻文史料は少なくとも 100 点を上回ると思われ、精査は必要だが 150 点に届くかもしれない。なお、K. 1005 までの刻文リストをまとめたジョルジュ・セデスは、留保付きのものを含め 63 点を同王に帰属させている (Cœdès 1937-1966 (8): 9)。

2. ジャヤヴァルマン 7 世期の主要刻文にみる寺院の建立

本稿では、上記したジャヤヴァルマン 7 世期の刻文のうち、以下の 3 基の碑文を検討する。

- ① タ・プローム碑文 (K. 273/ 1186 年) (Cœdès 1906; Honda 1993; Kapur & Sahai 2007)
- ② プレア・カン碑文 (K. 908/ 1192 年) (Cœdès 1942; Honda 1999; Maxwell 2007a)
- ③ プラサート・トー碑文 (K. 692/ 1195 年) (IC1: 227-249; Honda 1994)

各碑文の記載内容の概要については本稿末尾に掲載したので、以下ではまず、これらの刻文において、寺院や尊像の建立がどのような形でみられるのかを検討する。

なお、従来の研究では、各自の研究テーマに沿って“有意義な”刻文の記載箇所をつまみ食いする形で引用されることが多く、当該箇所の記述の文脈上の理解が不十分である。そこで、やや冗長ではあるものの、各刻文の記載内容の全体的な構成を踏まえつつ議論を進める。

2-1. タ・プローム碑文 (K. 273/ 1186 年)

タ・プローム寺院は、アンコール遺跡公園内、アンコール・トムの東に所在する。砂岩を積み上げた建物に覆いかぶさるように樹木が繁茂する様子から、同遺跡公園内でも有名な観光地の一つとなっている。この碑文は同寺院の建立縁起等を記した創建碑文であり、ジャヤヴァルマン 7 世期の創建碑文としては最も早い日付をもつ。すなわち同寺院は、刻文上で確認されるジャヤヴァルマン 7 世期の最初の寺院である。

なお、タ・プローム寺院に先行して、同寺院の南東に隣接する、本稿の主題であるバンテアイ・クデイ寺院が建立されたとする説がジョルジュ・セデス以来定説化しており (Cœdès 1947: 192)、フィリップ・ステルンは、美術様式の検討からバンテアイ・クデイ寺院はタ・プローム寺院と同時期に完成したとする (Stern 1965: 138) が、刻文上にその根拠を見出すことはできない。

碑文は、四角柱の形状をもち、A 面: 72 行、B 面: 72 行、C 面: 72 行、D 面: 74 行にわたって書かれる。言語は全てサンスクリット語である。

碑文では、仏・法・僧・観音 (ローケーシュヴァラ)・般若波羅蜜多 (プラジュニャーパーラミター) に対する賛辞に始まり (第 1-5 偈)、次いでジャヤヴァルマン 7 世の王統 (第 6-17 偈) と、ジャヤヴァルマン 7 世に対する賛辞を載せる (第 18-27 偈)。賛辞

の部分では、シヴァ・ヴィシュヌ・カーマなどのヒンドゥー諸神の神話と比較しつつ同王の偉大さを褒めたたえている。

第 28 偈以下は、同王の業績について書いている。その中で、恐らく王の即位式を執り行ったグル（師）のジャヤマンガラールタと、母ジャヤラージャチューダーマニ、兄のジャヤキールティに荣誉を与え、西暦 1186 年にラージャヴィハーラと名付けたこの寺院を建立し、母の彫像を主尊格とし、グル、兄の彫像を脇侍として、さらに 262 の尊像が祀られたという⁵。

第 38 偈以下では、この寺院に供給される物品のリストを列挙し、さらに寺院に関わる人々の員数、寺院の規模が記載される。とりわけ、タ・プローム寺院が、尖塔のある祠堂 (valabhiprāsāda) が 39 基 (第 77 偈)、石造りの建物 (upalaveśman) が 566 軒、レンガ造りの建物 (iṣṭakāveśman) が 288 軒 (第 78 偈) 作られ、長方形の貯水池 (vāpītātāka) の規模は幅 76 尋、周囲の全長が 1,150 尋であり (第 79 偈)、〔寺院の〕周壁の規模は 2,702 尋である (第 80 偈) などの表現は、当時の伽藍がどのような構成で認識されていたのかを知る上で興味深い。

第 83 偈からは、チャイトラ月 (3-4 月) の白分⁶第 8 日より始まる「春の祭礼 (vasantotsava)」について、儀式の次第やその際に王の倉庫から拋出される物品のリストを載せ、壮大な祭礼が挙行されたことを想起させる。

第 117 偈は、施療院 (ārogyaśālā) の設置について書かれた有名な箇所であり、それぞれの地方 (viṣaya) に 102 の施療院があり、798 の神 (sūra) が置かれたという。本稿では取り扱わないが、そのうちいくつかの施療院跡からは、施療院碑文と呼ばれるほぼ同一内容の碑文が現在までに 25 点確認されている。

第 141 偈ではジャヤヴァルマン 7 世がタ・プローム寺院建立を発願した旨が書かれ、王は、母への献身のためにこれらの善行 (sukṛta) を行い「私のこれらの善行により、衆生が現世の海をわたるために母が仏陀性 (jīnatva) を獲得するように」願ったという。

第 142-144 偈ではこの寺院建立事業その他の善行を保護し継承することを「未来のカンブジャの王たち」に懇請し、末尾の第 145 偈において、この碑文を作成したのは、ジャヤヴァルマン〔7 世〕王の第一王妃より (agranyām devyām) 生まれたスーリヤクマールという名の王子 (rājakumāra) であったことが明らかにされる。

さて、現在のところ同王治世下で最も早く書かれたと目される本碑文であるが、寺院等の建立については、全国に施療院を設置したこと以外には、ほとんどタ・プローム伽藍地内での話題に終始する。

次に検討するプレア・カン碑文において、プレア・カン寺院以外の寺院建立等につい

⁵ ここで言う「母の彫像」「グル、兄の彫像」に関連して、クメール刻文では、「〔個人名〕の姿 (mūrti, rūpa) で」彫像が作成されたという表現が散見するが、これはその個人の顔貌を写し取った肖像彫刻というよりも、理念的に、その個人の特性を尊像に埋め込んだものとするべきである (松浦 2014)。

⁶ 新月から満月までの、月が満ちていく期間を白分

ても言及があることを加味すれば、タ・プローム寺院建立の時点では施療院の他には言及すべき寺院がなかった、すなわちまだ建立されていなかったと考えることもできる。

加えて、第 77-80 偈には同寺院の規模等に関する記載があるが、注目したいのは、第 79 偈の長方形の貯水池 (vāpītāka) の造成である。その規模は幅 76 尋、周囲の全長が 1,150 尋であったとされる (すなわち幅 76 尋、長さ 499 尋の大きさ)。第 80 偈では周壁の全長が 2,702 尋であったと書かれているので、おおよそ周壁の規模の 4 割程度の貯水池があったことになる。ただ、ここで述べられる「貯水池」の規模は複数作られた貯水池の規模の総計である可能性もある。この箇所はタ・プローム寺院周壁外を含んで言及している可能性があるにもかかわらず、すぐ近くに位置するバンテアイ・クデイ寺院に対する明確な言及がないことは、この碑文が書かれた当時 (1186 年) に、バンテアイ・クデイ寺院が存在しなかった可能性を考慮させるものである。

前述したとおり、従来の研究においてバンテアイ・クデイ寺院がタ・プローム寺院に先行して建立されたという説が散見するが、タ・プローム碑文にその記載がないことは、バンテアイ・クデイ寺院先行説に異を唱える根拠となりえるだろう。

2-2. プレア・カン碑文 (K. 908/ 1192 年) (Cœdès 1942; Honda 1999; Maxwell 2007a)

プレア・カン寺院は、アンコール遺跡公園内、アンコール・トムの北側に位置し、東側には方形貯水池のジャヤタターカを擁する。ジャヤタターカの中央には、ニアック・ポアン遺跡が所在する。前述のタ・プローム寺院と同じく、創建碑文の一種であり、西暦 1191 年もしくは 1192 年にプレア・カン寺院が創建されたことを記す。本尊は父の姿をした観音像であったようである。ジャヤヴァルマン 7 世は、タ・プローム寺院において母を、プレア・カン寺院において父を祀っており、両者は対の関係であるように見える。しかし、タ・プローム碑文と違い、プレア・カン碑文においては、王の版図全体を見渡したような記述が豊富に含まれる。

碑文は、四角柱の形状をもち、A 面: 72 行、B 面: 72 行、C 面: 72 行、D 面: 72 行にわたって書かれる。言語は全てサンスクリット語である。

第 1 偈から第 18 偈まで、すなわち仏法僧への賛辞からジャヤヴァルマン 7 世の王統および誕生まではタ・プロームと同内容である。

第 19-31 偈はジャヤヴァルマン 7 世に対する賛辞であり、ヒンドゥー諸神やマハーバーラタ等の説話と対照させつつ王を称賛することは他の碑文と同じである。王は古い言語を好み、サンスクリット語に精通していることを文法学者パーニニに比して称賛する箇所 (第 21 偈) は、同王治世下の碑文の多くがサンスクリット語で書かれている理由を説明しており注目に値する。

第 32 偈以下はプレア・カン寺院の建立について述べられる。ジャヤヴァルマン 7 世が敵に勝利 (ジャヤシュリー) した後、「敵の血のあるところ (dviṣad-rudhira-dhāman)」(激しい戦闘が行われた地点、もしくは戦死者を集めた場所か) に寺院を作

り、「ジャヤシュリー」と命名したという。主尊格は、「ジャヤヴァルメーシュヴァラ」という名の父の姿をしたローケーシャ（観音）」であり、1191年もしくは1192年に開眼された（第34偈）。その後、プレア・カン伽藍地内における尊像配置について書かれ、中央・東・南・西および北の順で主要な尊格名と尊像の総数が書かれ、その他「米の倉庫（vr̥hi-gr̥ha）」、「歩道〔回廊〕（caṅkrama）」、「王の天幕〔宿駅？〕（upakāryā）」、「施療院（ārogya-āyatana）」「四方の門（dvāra）」にも尊像が配置されたという（第39-40偈）⁷。寺院地内に安置された尊格は総計で430とされるが、これは個々に挙げられた数量の和と一致する。

次に第41-43偈では、伽藍地の外側における神像の安置について書かれ、ラージャシュリー（ニアック・ポアン遺跡。プレア・カン寺院の東に隣接する方形貯水池ジャヤターカの中心施設）のほか、ジャヤターカの沿岸に位置するいくつかの建物（対応関係は明確ではないが、同時期の建立と思われるクラオル・コーヤタ・ソム寺院など）に尊像が安置された。ここまでの尊格の合計は515とされ、これは上述の寺院内の尊格430に、第41-43偈で述べられた尊格数を足した数字になっている。このことから、プレア・カン寺院の周壁で囲まれた内側の部分（伽藍地）と、そこにジャヤターカ周辺を合わせた地域（寺院地）が、寺院をめぐる地理空間として区別されていたことが示唆される。

続く第44-102偈には、プレア・カン寺院に対する日々の供物や祭礼にあたって捧げられる品々、寺院に関わる人員などが列挙される。

第103-107偈には、前述のタ・プローム碑文と同じように、寺院の規模についての言及がある。尖塔のある祠堂（valabhiprāsāda）が102基、石の建物（śilā-gr̥ha）が485軒、さらに周壁（[sama]n[ta]to vaprah）は2238尋（vyāma）で（第104偈）、「砂の堆積した石でできた⁸通路（śarkaraugha-śilā-baddha-tara）」（回廊または参道か、規模は判読不能）（第106偈）、全体で439の小屋（kuṭi）（第107偈）があったという。そのほかにも恐らく貯水池の規模なども書かれていたと思われるが、ところどころ刻面に損傷があり、判読不能になっているのが惜しまれる。さらに第108-111偈には、寺院に起居する人びとが人数とともに書かれる。

第112偈からは、寺院地についての話題から離れ、国土全体を俯瞰して王が行った業績が書かれる。その最初に挙げられるのがヴィーラシャクティという名の如来（sugata、善逝）⁹の確立で、その次の尊格については損傷のため判読不能である（第112偈）。そして、ラージャパティーシュヴァラとジャヤマンガラールタチューダーマニをシカター（Sikaṭā）という名の地に安置したという（第113偈）。そして、ジャヤ

⁷ プレア・カン寺院の尊像配置については、久保の博士論文に詳しい（久保 2012）。

⁸ baddha（√bandhの過去受動分詞）は、「縛る、結ぶ、結合する、（堰または橋を）築く、せき止める、堤で囲む」などの多様な意味があり、ここで述べられる構築物の具体的な機能を限定することは困難である。

⁹ sugataは一般に善逝と訳され、如来はtathāgataの訳語であるが、ともに仏を指す言葉であり本稿では如来に統一する。

ンタプラ、ヴィンディヤパルヴァタ、マルカルプラの三都市に三宝 (ratna-traya) を確立した (第 114 偈)。また、23 の地域に「ジャヤブッダマハーナータ」なる尊像を確立し、さらにジャヤタターカの沿岸部に 10 の「yāga (祭式のための場所)」を作った (第 115-121 偈)。

第 122 偈からは国内の幹線道とそれに沿って建立された宿駅について書かれ、全体で 121 軒建てられたとする。国内に「金 (rai)・銀 (rūpya)・青銅 (kaṃsa)¹⁰・石 (aśman) で作られた、ヤマヤカーラを含む神々 (deva)」は、全体で 20,400 体であったとする (第 127 偈)。その後、これらの国内各地に確立された神々に対して供給された物品のリストや関わる人々の総数、建物を荘厳するために用いられた物品のリスト、建物の総数および規模が記される (第 128-157 偈)。

第 158-166 偈にみられる、パールグナ月 (2-3 月) に行われる祭礼についての記述も重要である。この祭礼では、尊像の物理的な運搬を伴うかどうかは不明だが、上記された全国の尊像が一堂に会するような祭典が催されたようである。そこで挙げられる尊格は、東の (or 以前の) 仏陀 (prācyah munīndrah)、ジャヤラージャチューダーマニ [タ・プローム寺院] と、25 の地域 (deśa) にあるジャヤブッダマハーナータ、如来 (sugata) ヴィーラシャクティ、ピマーイの如来、バドレーシュヴァラ、チャーンペーシュヴァラ、プリトウシャイレシュヴァラなどで、脇侍 (parivāraka) を含め全体で 122 であるという。

ここでまず注目したいのは、第 115-121 偈でも言及のある「ジャヤブッダマハーナータ」が、第 121 偈では「23 の地域」であったところ、ここでは「25 の地域」になっている点である。マクスウェルは、刻文を書いている最中に 2 つが確立されたとする (Maxwell 2007a: 95) が、直前に挙げられる東の (or 以前の) 仏陀 (prācyah munīndrah) とジャヤラージャチューダーマニを含めて 25 であるという解釈も可能である。なお、ここにみられる「東の (or 以前の) 仏陀 (prācyah munīndrah)」については後段で検討する。

このパールグナ月の祭礼においては、ジャワ、ヤヴァナ (大越か)、2 人のチャム人の王が沐浴用の水を供献するという。この儀式がどのようなものであったかは不明であるが、ジャワ島中部にある 17 世紀以降のマタラム王家の陵墓イモギリでは、各地の王が水を運ばせて献じたといわれており、それぞれの王が水を運ばせた可能性もある¹¹。

第 167-170 偈では、プレア・カン寺院東前面に位置する大貯水池ジャヤタターカについて記され、ジャヤタターカは「石 (upala) と黄金 (kanaka) と花環 (mālā) で彩られた鏡 (ādarśa) である」と表現される。

¹⁰ 「kaṃsa」は辞書的には真鍮 (黄銅) などを指す言葉であるが、銅を用いた合金を指すと思われる。これに類するクメールの神像は青銅製であることが一般的であるので、ここでは「青銅」と訳した。「銅合金」の方が適切かもしれない。

¹¹ イモギリ陵墓における水の献供については、青山亨氏にご教示いただいた。

第 171-178 偈は、同寺院の建立が仏教的な功德のためであり、とりわけ父のためであることが宣言され、将来にわたってこれらの善行が守護されるように請願している。

末尾の第 179 偈では、この碑文を作成したのが、「ジャヤヴァルマン〔7世〕王陛下の第一の (agryā) 妻 (satī) であるラージェンドラデーヴィーの長子であるヴィーラクマーラ」であったことが明記される。

プレア・カン碑文の内容は、他の碑文と比べてジャヤヴァルマン7世の王国全体を俯瞰したような記述が目立つのが特徴であり、この碑文が作成された時点での主要な建立事業が網羅されていると言ってよい。もしバンテアイ・クデイ寺院がこの時までには建立されていたとすると、この碑文にみられる未同定の尊格のなかに、バンテアイ・クデイ寺院を指すものがあると考えられよう。次節においてさらに検討する。

2-3. プラサート・トー碑文 (K. 692/ 1195 年) (IC1: 227-249; Honda 1994)

プラサート・トー寺院は、アンコール遺跡公園内、プラダック村に属し、大貯水池の東バライ北東角の近傍に位置する。プラサート・トーの名称は近世以降に名づけられたものと思われる。トー (Tor, 𑀮) は「樋、雨樋」の意であるが、寺院近くを流れる水路を同じく「トー川」というから、これにちなんだ名称であろう。

ジャヤヴァルマン7世期の刻文のほとんどが王を主体として書かれているが、この碑文は王以外の高官によって書かれている点で注目に値する。この碑文は、ブーペンドラパンディタの名を世襲する家系によって書かれており、この家系はヒンドゥー教を信奉していたようであるが、議長 (sabhāpati) や宮廷の長 (sabhyādhipa) など、おそらく要職に就いていることが見て取れる。刻文作成者の家系の正統性を数代前に遡りつつ記述する刻文は、10世紀後半から11世紀にかけて盛行するが、ジャヤヴァルマン7世期にはほとんど見つかっておらず、まとまった内容をもつ (判読可能な) 碑文は、現在のところこの碑文だけである。

碑文は、四角柱の形状をもち、A面: 36行、B面: 36行、C面: 36行、D面: 32行にわたって書かれる。言語は全てサンスクリット語である。

第1-4偈は、シヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマー・ガンガーに対する賛辞で、第5偈には刻文作成者のブーペンドラパンディタへの賛辞を載せる。

第6-41偈は、ジャヤヴァルマン7世に対する賛辞で、ヒンドゥーの神話や説話に取材しつつ王を称賛する。

第42偈以下は、王国が (おそらくチャンパーによる侵攻などで) 困難に見舞われたが、王が勝利したことを述べる。とくに、チャンパーに勝利した後、「力強き西の王を降した」(第45偈) との文言は、東隣国のチャンパーや大越との係争が主に語られる同王の事績にあって、西方への遠征を記す希少な箇所である。

第46偈以下は、ブーペンドラパンディタの家系について記されている。どうやら

「ブーペンドラパンディタ」の名は少なくとも3代にわたって世襲されているようであり、「議長 (sabhāpati)」や「宮廷の長 (sabhyādhipa)」など、おそらく高位の意思決定権者であったことが分かる。

末尾の第 61 偈には、ジャヤーディティヤプラの村（プラサート・トー寺院が所在する一帯の地名であろう）において、ジャヤヴァルマン〔7世〕王の宮廷の長 (sabhyādhipa) であるスーリヤスーリ (sūryasūri) が、西暦 1195 年にこの碑文を書いたとする。

この碑文では、ブーペンドラパンディタの家系は、ジャヤヴァルマン7世を含む歴代の王から厚遇を受けていたことが主張されているものの、記載内容としては、言うなればプライベートな内容に終始しており、本稿にとって見るべき箇所は少ない。とは言え、同碑文の重要性は直截的な文言に限らない。同王治世下の刻文史料には王や王族の直接的な関与を示す刻文が多く、同王治世下における建立事業は、王による直接的な指示のもと行われたというイメージで語られることが多い。そのため、バンテアイ・クデイ寺院についても、王や王族の直接的関与が半ば当然視される傾向にあるが、この碑文の存在により、王以外の高官による建立事業の可能性も指摘できるだろう。ただ、プラサート・トー寺院は規模の小さい寺院で、祠堂のいくつかは刻文作成より前に存在したらしいことから考えても¹²、バンテアイ・クデイ寺院との単純な比較はできない。

3. 3 碑文にみられる寺院と尊像

次に、上記の 3 碑文から、確立・建立 (pratiṣṭhā) あるいは寄進の対象となった寺院や尊像、尊格などを抽出し、寺院等に対する当時の認識を明らかにする。その上で、バンテアイ・クデイ寺院との関連を考えたい。なお、いわゆる施療院および宿駅については、本稿で扱わない同時期碑文との関わりも深いため、稿を改めて検討する。

① ラージャパティーンドラ村 (Rājapatīndra-grāma) (タ・プローム碑文第 30 偈)

王の師 (guru) であるジャヤマンガラールタに対して与えられたという。ベルナル・フィリップ・グロリエなどは、バンテアイ・クデイ寺院がこのジャヤマンガラールタのために建てられたとしているが、ラージャパティーンドラ村とバンテアイ・クデイ寺院との関わりを示す証拠は今のところ見られない。

ジャヤヴァルマン7世の父方の祖母がラージャパティーンドララクシュミーであり、バイヨンの小刻文 (K. 293)¹³には「ラージャパティーンドラヴァルマンの姿 (rūpa) をしたラージャパティーンドラデーヴァ」という尊格が見える。恐らく、もともと別の有力者の土地であったものを、ジャヤマンガラールタの所有としたのであ

¹² プラサート・トー寺院の調査を主導したジョルジュ・トルーヴェは、建築の特徴から、主祠堂はアンコール・ワット以前に建てられ、碑文建物はジャヤヴァルマン七世期に建てられたとし、「プラサート・トーは、一度に考案された建築物ではなく、継続した一連の建立事業の集合である」と結論づけている (Trouvé 1932: 227)。

¹³ ジャヤヴァルマン7世期の寺院にみられる小刻文については後述。また拙稿 (松浦 2014) 参照。

ろう。なお、487号遺跡（東トップ寺院）碑文（K. 567）によれば同人物の息子もジャヤマンガラールタの名を引き継いだようである [松浦 2023: 31]。

②ラージャヴィハーラ (Rājavihārapurī)¹⁴ (タ・プローム碑文第 35 偈)

タ・プローム寺院が建てられた土地の名前を指すという既往の研究に付け加えることは特にない。「purī (城砦、町)」は、クメール刻文において寺院を指す場合も多い。「城砦」の字義からはクメール語の「Banteay」すなわち周壁をもつ寺院との関連を指摘できるかもしれないが、定量的な分析が必要である。主尊は、中央に母（ジャヤラージャチューダーマニ）の姿 (mūrti) をした仏母（プラジュニャパーラミター）、左右に師（ジャヤマンガラールタ）と兄（ジャヤキールティ）を置いた三尊像であったと思われる。

寺院建立後は、他の諸寺院と同じく、祀られた本尊の名前をもって寺院の名称としていたと思われ、後に書かれたプレア・カン碑文ではジャヤラージャチューダーマニの語でこの寺院を指す。

③ジャヤシュリー (Jayaśrī) (プレア・カン碑文第 32, 168 偈)

プレア・カン寺院を指すことに疑いはない。寺院が所在する場所が敵軍との戦場になり、「勝利 (jayaśrī)」したことを記念して同名の寺院 (purī) を建てたという。本尊が父の姿 (mūrti) をしたローケーシャ（観音）であり、寺院内に多数の尊格が置かれたことは良く知られているが、ここでは詳述しない。

④ラージャシュリーの小島 (Rājayaśrī-pulina) (プレア・カン碑文第 41 偈)

ジャヤタターカの中央に位置するニアック・ポアンのことであろう。ジャヤヴァルマン7世によって14柱の尊像が安置されたという。プレア・カン碑文第 168-170 偈において、ラージャシュリーの名は出ないが、ジャヤタターカの中に小島 (pulina) があるという表現があり、これと対応するものと考えられる。

⑤ヨーギンドラヴィハーラ (Yogīndra-vihāra) と二つの井戸? (curi)¹⁵ (プレア・カン碑文第 41 偈)

¹⁴ 原文は「purī rājavihāranamnī (ラージャヴィハーラという名のプリー)」。なお、セデスの翻字では「rājavihāra」を「rājavi**h**hāra」と表記しているが、セデス本人も認めるように [Cœdès 1940: 347] 翻字のミスである。

¹⁵ 「curi」は「小さな井戸」や「貯水池」を指す。なお、古クメール語では寄進された宝物の一つとして用例があり (プレア・アンカオサー碑文 K.263D 面第 5 行)、ジェンナーはダガーやナイフを指すとする。語源についてジェンナーは不明とするが (Jenner 2009b: 128)、カンナダ語などドラヴィダ語系で「curi」はナイフなどを指すので、関連が示唆される。

上記と同じく、ここにも 16 柱の尊像が安置された。マクスウェルは、「curi」を貯水池と解し、ヨーギンドラヴィハーラに二つの貯水池が付属していたとする。そして、ジャヤタターカ近隣で二つの貯水池をもつ寺院であるタ・ソム寺院がヨーギンドラヴィハーラにあたるとした (Maxwell 2007a: 48)。

しかし、本稿付録史料 2 で注記するように、安置された神々の総計から考えるに、ヨーギンドラヴィハーラと二つの「curi」の、それぞれに 16 柱ずつの尊像が安置されたことは疑いなく、「二つの curi」をタ・ソム寺院に付属する貯水池 (=タ・ソム寺院を説明するための要素) と考えることには疑問が残る。つまり、3 か所の寺院がここで示されている可能性の方が高いのではないか。

⑥ジャヤタターカ (jayataṭāka) の堤岸 (tīra) の諸尖塔 (valabhī) および最上の白象 (gaura-srī-gaja-ratna) の塔 (caitya) (プレア・カン碑文第 42 偈)

ここには 22 柱の尊像が安置されたというが、尖塔 (valabhī) が処格複数形をとる (valabhīṣu) ことから、マクスウェルは 3 つ以上の寺院を指すとするが (Maxwell 2007a: 50)、タ・プローム碑文やプレア・カン碑文で明らかのように、尖塔 (valabhī) は一つの寺院の構成要素として複数建てられるものと認識されていることから、「最上の白象 (gaura-srī-gaja-ratna) の塔 (caitya)」を含めて一つの寺院を指すとも可能である。また、前記⑤と違い、ここで記述される寺院には 22 柱の尊像がまとめて安置されていることから考えても、この記載箇所全体で一つの寺院を指す可能性が高い。

いずれにしても、⑤と⑥で記載される寺院は、文脈上ジャヤタターカ周辺に位置しており、全部で 5 か所について述べていると考えるのが穏当である。そのうち 1 か所はニアック・ポアン (ラージャシュリーの小島) であるから、残りは 4 か所である。ジャヤタターカ周辺で、建築様式等から同王治世下に帰属する寺院は、タ・ソム、クラオル・コー、バンテアイ・プレイ、プラサート・プレイが挙げられるので、それぞれの寺院との具体的な対応関係は不明ながら、ひとまずはこれらの寺院を指していると考えておいてよいだろう。

⑦ヴィーラシャクティ如来 (Viraśakti-sugata) (プレア・カン碑文第 112 偈、タ・プローム碑文第 85 偈)

同碑文において、王がジャヤタターカ周辺を含むプレア・カン寺院地の外側と認識される場所で行った事業を述べる箇所で、最初に言及されるのがこの如来 (善逝) である。タ・プローム碑文では、同寺院で行われる春の祭礼 (vasantotsava) の締めくくりとして、このヴィーラシャクティが祠堂の周囲を 3 回右饒 (右肩を祠堂中心に向けて時計回りに巡ること) する。また、地方寺院バンテアイ・チュマーの新発見刻文 (K. 1313) には、シャカ暦 1138 年 (西暦 1216 年) に、王がヴィーラシャクティを伴ってバンテアイ・チュマーに行幸したという (Maxwell 2009: 155)。マクスウェル

は、バンテアイ・チュマーの同碑文に見える聖火 (vrah vleiñ) の語から、聖火の形状をした尊像であった可能性を指摘している (Maxwell 2009: 180) が、容易には決しがたい。

いずれにしても、ヴィーラシャクティは可動式の尊像であり、おそらく車や輿に載せられ移動したのだろう。巡行しないときにどこに安置されていたのかは分からない。マクスウェルは、コンポンチャム州のワット・ノコール寺院の刻文 (K. 82/ 1566 年/ パーリ語、古クメール語) に、ジャヤヴィーラシャクティ・ナガラという名前が出てくることから、ワット・ノコール寺院にヴィーラシャクティが祀られていたとする (Maxwell 2009: 181-183)。しかし、クメール刻文においては、15 世紀に史料上の断絶期があり、その前後で地名や寺院名を含めて大きな変化がみられる [松浦 2023] ことから、これをそのまま採用することはできない。また、シアムリアプ州の西側州境近くにあるプラサート・タ・アンの刻文 (K. 240/10 世紀末) にみえる

Vīraśaktimahādeva との関連が指摘される [IC3: 76] が、プレア・カン碑文ではジャヤヴァルマン7世が「開眼した」尊格であることを考えると、憶測の域を出ない。

加えて、下記も含め、この箇所で言及される尊格については、記載される順序にも留意する必要がある。碑文全体の構成を眺めた時に明らかであるが、碑文作成者は十分な吟味の上、内容を記載しているはずである。そのため、ここでの記述の順番は、王権にとっての重要度、王 (王族) の関与を深さ、確立された順序、地理的な順序のいずれかが反映されていると見るべきである。

⑧名称不明の尊格 (プレア・カン碑文第 112 偈)

上記のヴィーラシャクティの次にもう一つ尊格名が書かれていたと思われるが、碑文の損傷により判読不能となっている。

⑨ラージャパティーンシュヴァラ如来 (Rājapatīśvara-sugata) (プレア・カン碑文第 113 偈)

⑩ジャヤマンガラルタチューダーマニ (Jayamaṅgalārthacūḍāmaṇi) (プレア・カン碑文第 113 偈)

上記の2尊については、シカター (Sikaṭā) という名の場所 (詳細不明) に安置されたようである。ラージャパティーンシュヴァラについてはよく分からない。ラージャパティーンンドラの類語だと考えれば、タ・プローム碑文第 30 偈に見える、王のグルであるジャヤマンガラルタに与えられたラージャパティーンンドラ村に安置された尊像と解することもできる。

ジャヤマンガラルタチューダーマニについては、セデスはタ・プローム碑文にみられるグルのジャヤマンガラルタと、母のジャヤラージャチューダーマニを合わせた名で、タ・プローム寺院の本尊を指すとした。しかし、プレア・カン碑文の後段 (第 159 偈) では、タ・プローム寺院をジャヤラージャチューダーマニと表記してい

る、もう一つの可能性として、「チューダーマニ」はアンコールにおいて高貴な女性につけられる名前としていくつかの用例があることから、ジャヤマンガラルタの妻あるいは母を指す可能性も指摘しておきたい。前述の 487 号遺跡（東トップ寺院）碑文（K. 567）に、王シュリードラジャヤヴァルマンによって、ジャヤマンガラルタの息子（この人物も世襲してジャヤマンガラルタを名乗ることを許された）とその母の彫像が建立されたという例もある（松浦 2023: 31）。

⑪三宝 (ratna-traya) (プレア・カン碑文第 114 偈)

ジャヤンタプラ (Jayantapura)、ヴィンディヤパルヴァタ (Vindhya-parvata)、マルカルプラ (Markhalpura) の 3 か所に建立されたという。三宝は各種碑文の冒頭に書かれる仏・法・僧であることに疑いはないが、後述のヴィンディヤパルヴァタの例が示すように、ここでは三宝を示す尊像（仏陀像）を指すようである。ジャヤンタプラ、ヴィンディヤパルヴァタについては『マハーバーラタ』等にも登場する地名ではあるが、ここではアンコール朝における特定の地域を指すことは間違いない。

ジャヤンタプラは、バッチュム碑文 (K. 266-268/ 953, 960 年) で、同寺院の所在する土地のことをジャヤンタデーシャ (Jayantadesā) と呼んでおり、セデスの所説に従い (Cœdès 1942: 295, n. 6)、今のところはバッチュム寺院周辺の土地と考えておきたい。本稿が主眼とするバンテアイ・クデイ寺院との関連で言うと、バッチュム寺院とバンテアイ・クデイ寺院はかなり近い場所にあり、ジャヤンタプラがバンテアイ・クデイ寺院を含む地名であると考えられることもできる。なお、バイヨン寺院の名称の由来が「vajjayanta (インドラ神の宮殿)」から来ているという (Sotheavin 2018: 28-29) が、ジャヤンタプラとの関連を考えるには材料が乏しい。

ヴィンディヤパルヴァタについてはよく分からないが、バイヨンの小刻文に、「ヴィンディヤパルヴァタの三宝の仏陀 (vrah̄ vuddha kamrateñ añ ratnatraya vim̄ndhya parvvata)」が、バイヨン寺院北西区画の北西半の御堂 (vrah̄ kuṭī) に納められた 10 尊の一つとして挙げられている。

マルカルプラについても不詳である。セデスはカンボジアの地名であるモンコル・ボレイとの関連に言及するが、判断材料をに欠ける。

⑫ジャヤブッダマハーナータ (Jayabuddhamahānātha) (プレア・カン碑文第 115-121 偈、第 159 偈)

ジャヤラージャダーニー、ジャヤンタナガリー、ジャヤシンハヴァティー、ジャヤヴィーラヴァティー、ラヴォーダヤプラ、スヴァルナプラ、シャンブーカパッタナ、ジャヤラージャプリー、ジャヤシンハプリー、ジャヤヴァジュラプリー、ジャヤスタンバプリー、ジャヤラージャギリ、ジャヤヴィーラプリー、ジャヤヴァジュラヴァティー、ジャヤキールティプリー、ジャヤクシェーマプリー、ヴィジャヤディプリー、ジャヤシンハグラーマ、マディヤマグラーマカ、サマレーンドラグラーマ、ジャ

ヤプリー、ヴィハローッタラカ、プールヴァヴァーサの23の地域 (deśa) において確立された尊像とされる。この23地域の地名比定について本稿では立ち入らないが、このうちのいくつかは現在のタイ地域に位置する地方遺跡が該当する。蓋然性の高いところでは、ラヴォーダヤプラ (現在のロップリー)、スヴァルナプラ (現在のスパンブリー)、ジャヤヴァジュラプリー (現在のペッチャブリー) などである。また、2番目に書かれる「ジャヤンタナガリー」について、セデスは⑩のジャヤンタプラと同じであるとする。列挙された地名の順序は、所在地によるもの (王都から近い順など) とは考えられず、おそらく建立されたのが早い順 (宮廷が確立の指示を出した順、建立が宮廷に認識された順) に書かれたのではなかろうか。

前述したように、同碑文後段の第159偈では、パールグナ月 (2-3月) に行われる祭礼において言及される計122の諸尊の中に、「25の地域にある」ジャヤブッダマハーナータが言及されており、2地域増えている。

この尊格の解釈をめぐっては多くの研究があるが、「Jaya (ジャヤヴァルマン7世が確立させたことを示す)」、「buddha (仏陀)」、「mahānātha (大いなる主)」の複合語である。ジャヤブッダマハーナータの語はプレア・カン碑文以外には出てこないが、バイヨンの小刻文で「ラージャプリーのジャヤマハーナータ」、「ヴァジュラプリーのジャヤマハーナータ」が祀られており、ラージャプリーもヴァジュラプリーも上掲の23地域に含まれることから、「ジャヤマハーナータ」と「ジャヤブッダマハーナータ」は同一の尊格を指すことは疑いなかろう。そして、バンテアイ・チュマーの小刻文

(K. 827) から、ジャヤマハーナータ、ナーラーヤナ (ヴィシュヌ)、シュリーおよびナーラーヤニー (ヴィシュヌの神妃) が一緒に祀られたことが分かっており (Coedès 1951: 119)、ヒンドゥー教とくにヴィシュヌとの親近性をもつ尊格とも考えられる。そして、本誌の宮崎論文が指摘するように、観音とヴィシュヌはアンコールにおいて近い存在と位置付けられることから、仏陀を内包する存在としての観音像であった可能性も指摘できる。

⑬東の (以前の) 仏陀 (prācyā-munīndra) (プレア・カン碑文第158偈)

プレア・カン碑文の第158偈以下では、同寺院でパールグナ月 (2-3月) に行われる祭礼において、一堂に会する諸尊が列挙される。その最初に挙げられるのがこの「prācyā-munīndra (prācyāḥ munīndrah)」であり、次にジャヤラージャチューダーマニ (タ・プローム寺院) が続く。同種の表現に、ピミアナカス碑文 (K. 485/ 13世紀) 第81偈の「東の (以前の) 如来 (pūrva-tathāgata) がある。ピミアナカス碑文は、ジャヤヴァルマン7世の王妃ジャヤラージャデーヴィーの事績を伝えるものだが、彼女が諸寺院に行った寄進のやはり最初に「pūrva-tathāgata」が挙げられ、その次にジャヤラージャチューダーマニ (タ・プローム寺院) を挙げる。

この語をセデスは「東の仏陀」と解し、タ・プローム寺院の東にある仏陀、すなわちバンテアイ・クデイ寺院の本尊を指すとした¹⁶（タ・プローム寺院からみたバンテアイ・クデイ寺院は南東にあたる）。前述したようなフィリップ・ステルンによる美術様式研究（バンテアイ・クデイ寺院とタ・プローム寺院を同時期の建立とする）もこの解釈を後押ししたであろう。その他、マクスウェルは、第 36 偈にみられるプレア・カン寺院内の東区画に祀られたトリブヴァナヴァルメーシュヴァラであるとする

(Maxwell 2007a: 95)。また、より東方の、コンボン・スヴァーイのプレア・カンやベン・メリアと考える説もあるようである（上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022: 45）が、いずれも確証はない。

「prācyā」および「pūrva」の語には「東方の」という意味の他に「以前の」という意味もあり、「以前の仏陀」すなわち過去仏を指す可能性もある。あるいは、ジャヤヴァルマン 7 世以前に建立されていた仏陀像などを指すことも考えられる。また、東方浄土に住するとされる薬師如来や阿閼如来のことであると推定することも可能であろう。

いずれにしても、現状ではこの尊格を同定するための材料が不足していると言わざるを得ず、これをバンテアイ・クデイ寺院（に祀られた尊像）と考える意見には賛同できない。

この如来の後には、ジャヤラージャチューダーマニ、25 地域のジャヤブッダマハーナータ、ヴィーラシャクティ如来、ピマーイ如来 (Vimāya-sugata)、バドレーシュヴァラ (Bhadreśvara)、チャンパーシュヴァラ (Cāmpēsvara)、プリトゥシャイレシュヴァラ (Pṛthuśaileśvara) と続き、脇侍 (pariāraka) を含めて 122 柱の尊格が礼拝されたという。ピマーイは東北タイに位置する寺院であることに疑いはない。バドレーシュヴァラは古くから刻文等に言及される神格 (シヴァ) で、ワット・プー寺院 (ラオス南部チャンパーサク県) に祀られたものが有名だが、他にも様々な場所で祀られたようであり、チャンパーシュヴァラもプレア・カン寺院の西側に祀られているが、これも他に様々な用例がある。

これらパールグナ月の祭礼に関する諸尊格の列挙においては、地理的な序列や建立された順序で書かれたとは思えない。

16 セデスは「東の仏陀」の解釈について以下のように述べる。「この Prācyamunīndra は、ピミアナカス碑文 (第 81 偈) の Pūrvatathāgata (フィノはこの語を「最初の仏陀」と訳した) と同一であることは確かである。同碑文でもこの箇所と同様に、東の仏陀の名前はジャヤラージャチューダーマニの直前に挙げられている。一つにはバンテアイ・クデイ寺院の少なくとも一部は、様式から見てタ・プローム寺院と同時期と思われる、他方で〔現存する〕建物そのものではなかったとしても、バンテアイ・クデイ〔寺院地〕のどこかにあったクティの地は「東部地区 (viṣaya pūrvadiśa)」にあったとされており、東の仏陀の聖域をバンテアイ・クデイに求めたくなる」(Cœdès 1941: 298 n. 2)。

⑭ ブーペンドラデーシャ (Bhūpendra-deśa) (プラサート・トー碑文第 49 偈)

プラサート・トー碑文によれば、かつてブーペンドラパンディタは、ここブーペンドラデーシャで、シヴァリングと自身の彫像を確立したといい、プラサート・トー寺院周辺がこの名前と呼ばれていたと考えられる。このブーペンドラパンディタは、ジャヤヴァルマン6世、ダラニインドラヴァルマン1世、スーリヤヴァルマン2世の3代にわたり判事 (sabhyadarśin) として仕えたという。

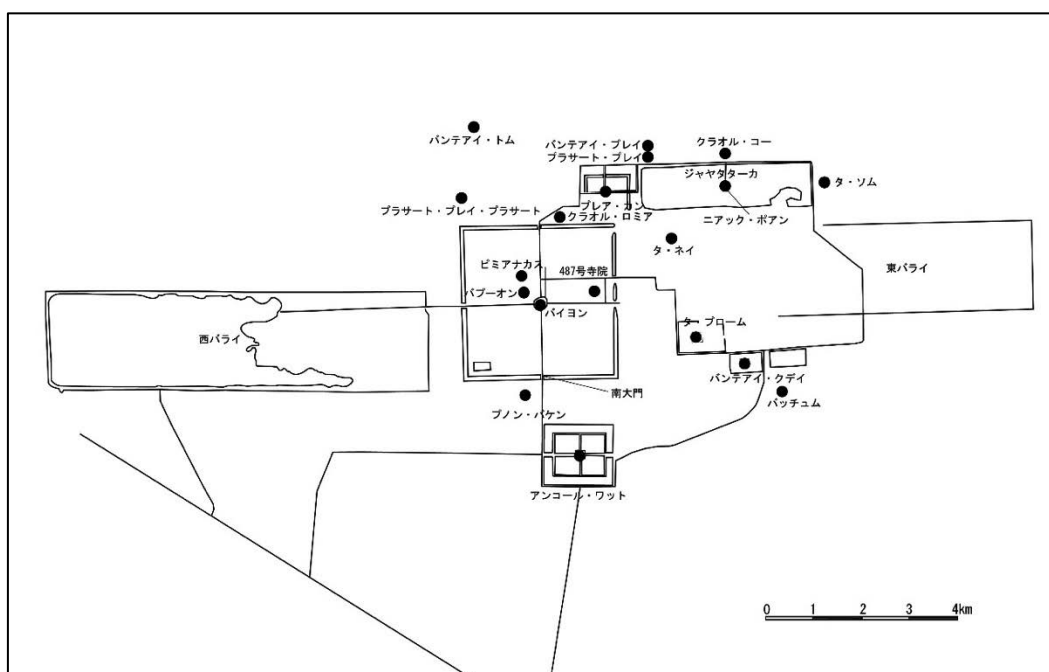
まとめにかえて

以上、ジャヤヴァルマン7世治世下の年紀が明記された3基の刻文史料を概観しつつ、寺院と尊像に関連する箇所について検討を加え、その中でバンテアイ・クデイ寺院にまつわる要素について所見を述べてきた。

刻文史料の解釈をめぐるには、記載された指示内容を明確にできることの方が少なく、多様な解釈の幅から蓋然性の高い読みを行う必要がある。そこで、しばしばかなり飛躍した議論が横行してきた。そのなかでバンテアイ・クデイ寺院は、同時期の他の遺跡と比べても発見・整備が早く、また規模も大きい目立つ存在であったために、碑文中の記載にその痕跡を探ろうとする努力が行われてきたともいえる。

その反面、バンテアイ・トム、タ・ネイ、プラサート・プレイ・プラサート、クラオル・ロミアなど、アンコール地域に所在する同王に帰属すると考えられているその他の諸遺構と刻文との比較分析はほとんど行われていない。

次稿では、年紀はないがジャヤヴァルマン7世期に帰属すると思われるピミアナカス碑文やプラサート・チュルン碑文などを検討する予定である。



地図：関連遺跡配置図

付録：本稿で扱った刻文史料の要約

以下は、本稿で扱った刻文史料の内容の要約である。拙稿 [松浦 2023] に加筆修正を加えた。翻字および訳出にあたっては、先行研究に依拠しつつ、部分的に原文を参照しながら行った。本稿に関わりの薄い箇所など、吟味を加えていない部分も多い。しかし、従来日本語でクメール刻文の紹介がなされることが少ないこともあり、あえて掲げることにした。批判に浴することができれば幸いである。

史料 1：タ・プローム碑文 (K. 273/ 1186 年) (Cœdès 1906; Honda 1993; Kapur & Sahai 2007)

- 1 仏 (buddha) に対する賛辞。
- 2 法 (dharma) に対する賛辞。
- 3 僧 (saṃgha) に対する賛辞。
- 4 観音 (lokeśvara) に対する賛辞。
- 5 仏母 (jinajanānī、プラジュニャーパーラミター) に対する賛辞。
- 6-12 母方の王統について。シュルタヴァルマンの子であるシュレーシュタヴァルマン王は「カンブの家系 (kambuvamśa)」に属した。彼の母方の家系 (mātrkula) の子孫にカンブジャラージャラクシュミーがおり、彼女の夫がバヴァヴァルマン王で、この二人の子孫にあたるのがハルシャヴァルマン (4 世) 王である。そして、ハルシャヴァルマン 4 世の娘が、ジャヤラージャチューダーマニ (ジャヤヴァルマン 7 世の母) である。
- 13-16 父方の王統について。「マヒーダラプラの血統の座 (mahīdharapurābhijanāspada)」にあったジャヤヴァルマン (6 世) の姉妹の子であり、スーリヤヴァルマン 2 世の母の弟でもあるマヒーダラーディティヤと、ラージャパティーンドララクシュミーの子供が、ダラニーンドラヴァルマン 2 世である。
- 17 ダラニーンドラヴァルマン二世に対する賛辞。仏教に深く帰依していたという。
- 18 ジャヤヴァルマン 7 世の誕生について。「アディティ女神が聖仙 [=カシュヤパ] から、スダルマー [善法堂、神々の集会場] に座る神々の王 [インドラ神] を産んだように、ハルシャヴァルマン [4 世] の娘は、彼 [ダラニーンドラヴァルマン 2 世] からジャヤヴァルマン 7 世王を産んだ。彼は光り輝く力をもつ英雄であり、大地を守るために、戦いのなかで [インドラ神の] 武器である雷霆で敵どもの英雄を殺した。」
- 19-27 ジャヤヴァルマン 7 世に対する賛辞。カールッティケーヤ、シヴァ、ヴィシュヌ、カーマなどの諸神と対比させつつ同王を称賛。「ハリ (ヴィシュヌ) が大洋を攪拌したように敵どもを打ち倒した」(第 21 偈)、「もし大洋と三界が王の名声と同じであるなら、ヴィシュヌは大洋から大地を引き上げることは

できないだろう」(第 24 偈) など。また、王は太陽家系の生まれ
(amśumālivamśodbhava) であるとする。

- 28-34 王の業績について。「チャンパーに行きその王を捕らえて釈放した。それを聞いた他の王たちはジャヤヴァルマン 7 世に頭を下げた」(第 28 偈)、「王の灌頂の際に、グル(師)に対しジャヤマンガラルタデーヴァという名前をラージャパティーンドラ村とともに与え、彼の家族に、王の家族
(avanibhṛtkula) を名乗ることを認めた」(第 30 偈)。「王は、母に王宮の一部
(rājagrhaikabhāga) と傘を与えた」(第 31 偈)。「兄(pūrvaja)¹⁷に王国の一部と傘を与えた」(第 32 偈)。王は食料なども 4 つに分け、グル、母、兄〔と自身〕に分け与えた。
- 35-36 王は、仏母(munīndramātrī)〔プラジュニャーパーラミター〕のために、ラージャヴィハーラという名の町〔寺院?〕(purī) を作った〔獲得した〕
(utpādita)。シャカ暦 1108 年〔西暦 1186 年〕、彼はそこに、母のジャヤラージャチューダーマニの姿をした仏母〔プラジュニャーパーラミター〕を確立した。
- 37 王は、彼のグルの姿をしたシュリー・ジャヤマンガラルタデーヴァとシュリー・ジャヤキールティデーヴァを〔プラジュニャーパーラミターの〕左右に確立し、さらに 262 の尊格を確立した。
- 38 この女尊とその脇侍の、毎日の崇拜のための配分は、調理のための未脱穀米が 2 ドローナ、2 プラスタ、73 カーリカーである。
- 39-42 以下、「毎日の崇拜のため」に寺院で用いられる物品のリスト。ただし、「崇拜のための品物(pujopakaraṇa)のうち、果物、野菜などはここでは述べない。なぜならそれらはよく知られているからである」(第 42 偈)。
- 43-44 尊像を着飾るための布地などについて。「中国絹で作られた
(cīnāmuśkamayā) 蚊のために広げられた布」など。
- 45 種々のソーマ祭(sattra)を行う師と弟子のための米の配分について。
- 46-52 毎年行われる 18 の祭礼のための毎年の配分について。
- 53-61 各村(grāma)から拠出された品々のリスト。
- 62-67 寺院に関わる人々について。12,640 人が奉仕。66,625 人が礼拝。これらの 79,365 人には Pukam (ビルマか)、チャンパーなどの人々が含まれている。
- 68-80 寺院を飾るための品々(金、銀、絹など)と寺院の規模について。尖塔のある祠堂(valabhiprāsāda)が 39 (第 77 偈)、石造りの建物(upalaveśman)が 566、レンガ造りの建物(iṣṭakāveśman)が 288 (第 78 偈)、長方形の貯水池(vāpītaṭāka)が作られ、その規模は幅 76 尋、周囲の全長が 1,150 尋であった

¹⁷ pūrvaja は長子とも解せるが、次の第 33 偈で「この兄の主な妻たちに(tasyāgrajasyāgravadhūṣu)」も尊称(abhikhyā)の授与などをしているので、ここでは兄(ジャヤキールティ)でよからう。

- (第 79 偈)。〔寺院の〕周壁の規模は 2,702 尋である (第 80 偈)。
- 81-82 寺院に起居する人々について。1409 人がともに住んでおり。439 人の賢き者 (vipascita)、法を保護する者 (dharmadhārin) は、毎日王宮 (rājamandira) で食べる〔出仕する〕。
- 83-89 チャイトラ月 (3-4 月) の白分第 8 日より始まる春の祭礼 (vasantotsava) について。アーガマに従って、2 つの祭礼 (yāga) が行われる。第 14 日には諸神が配偶神とともに 3 回右饒し、満月の日 (第 15 日) にはヴィーラシャクティなど諸尊とともに 3 回右饒する。傘などで飾られ、太鼓音や踊りをともなう。若者は布施 (dāna) や持戒 (śīla) など〔いわゆる六波羅蜜か〕を行う。3 人のグルと 1000 の神 (devatā) とさらに 619 の神 (deva) が崇拝される。1000 人の比丘などがこれに関わる。
- 90-102 王の倉庫から (koṣān mahībhṛtaḥ) 祭礼の時に抛出される物品についてのリスト。
- 103-116 王の倉庫から、毎年抛出される物品のリスト。
- 117 施療院 (ārogyasālā) について。それぞれの地方 (viṣaya) に、102 の施療院があり、798 の神 (sura) が置かれている。
- 118-140 施療院の諸尊とそこに住む者、患者のための支給品のリスト。838 の村から 81,640 人の男女がかかわっている。
- 141 王は、母への献身のためにこれらの善行 (sukṛta) を行うことで発願した。「私のこれらの善行により、衆生が現世の海をわたるために母が仏陀性 (jīnatva) を獲得するように」。
- 142 王は、他の人々によってなされた dharmasthiti (法住。ダルマに従って在ること) が邪な人々によって改悪され破壊されたのをみて、再び強く固定し、彼のしたことを保護するように望み、未来のカンブジャの王たちに (anāgatakamvujendrān)、ダルマを保護しなければならないことについて、次のように言った。
- 143 「行い正しき者たちよ、母によって与えられた恩は欠点のないものであることを知り、その献身を破壊することは自らの命を破壊することである。それゆえ王たちよ、私はあなたがたが私の行ったことを保護すると知っているけれども、私は飽き足らず、自ら進んで懇願するのである」。
- 144 神々への奉仕者 (devabhujiṣya) を脅威から守護し、木や石その他 (kāṣṭhopalaprabhṛti) の神への奉仕に用いるものについても盗難や破壊から守るように。
- 145 スーリヤクマーラという名の王子 (rājakumāra)、ジャヤヴァルマン〔7 世〕王の第一王妃より (agranyām devyām) 生まれた者が、この碑文 (praśasti) を記した。

史料2：プレア・カン碑文 (K. 908/ 1192年) (Cœdès 1942; Honda 1999; Maxwell 2007a)

第1-18 偈はタ・プローム碑文と同内容。

19-31 ジャヤヴァルマン7世に対する賛辞。ブラフマー神が完璧な徳を備えた至上の王 (anavadyagunādhirāja) を願って生まれたのがジャヤヴァルマン7世である (第19偈)。王は古い言語を好んでおり、サンスクリット語に精通しており、若い時から〔文法学者〕パーニニのように有名であった (第21偈)。王は強大な力で敵どもを打ち倒した。王の力はアウラヴァ仙の火のように敵どもを焼き、敵はその姿を目にただけで戦意を喪失する (第23偈)。王の青い剣 (nīlāsi) は、戦いにおいて〔敵の〕血で赤くなり金で黄色くなった (第24偈)。王は、見返りを求めたチェーディ国の王やガーディ王¹⁸とは違い、〔見返りを求めることなく〕娘を結婚させた (第28偈)。ラーマと王は、どちらも神と人々のために働き、父を敬愛し、敵 (ブリグの末裔) を倒したけれども、ラーマは猿たちのために〔ランカー島に続く〕海を渡る石の橋を架けたが、ジャヤヴァルマン7世は現世の海 (bhavāvḍhi) を渡る黄金の橋を架けた (第29偈)。

32-33 プレア・カン寺院 (ジャヤシュリー) の建立について。王は戦いにおいて勝利 (jayaśrī) を獲得し、敵の血のあるところ (dviṣad-rudhira-dhāman) に、この〔jayaśrīという〕名前の町 (purī) を作った。その大地は血に塗れているが、金と蓮と石で色づけられている (第32偈)。プラヤーガ〔北インドのアラーハーバードの古名〕には2つの沐浴場 (tīrtha) があるが、ジャヤシュリーには仏陀・シヴァ・ヴィシュヌの〔3つの〕沐浴場がある (第33偈)。

34 ジャヤヴァルマン〔7世〕王は、ジャヤヴァルメーシュヴァラという名の、父の姿 (pitṛmūṭti) のローケーシャを、シャカ暦 1113 [or 1114] 年〔西暦 1191年 or 1192年〕¹⁹に開眼した。

35-40 プレア・カン寺院における尊像に配置について。中央の観音 (avalokiteśa) の周りに、283の神々 (deva) を確立した (第35偈)。東には、トリブヴァナヴァルメーシュヴァラなど3つの神を確立した (第36偈)。南には、ヤショーヴァルメーシュヴァラなど32の神々を確立した (第37偈)。西には、チャーンペーシュヴァラなど30の神々を、北にはシヴァパーダなど40の神々を確立した (第38偈)。米の倉庫 (vrīhi-gr̥ha) には1つの神を、歩道〔回廊〕 (caṅkrama) には10を、王の天幕〔宿駅?〕 (upakāryā) には4つ、施療院

¹⁸ ともに『マハーヴァーラタ』等で語られる人物。ガーディ王は、聖者リチーカが彼の娘に求婚した際、1000頭の白馬を要求した。

¹⁹ 当該箇所年数表記は、姿 (rūpa) [=1]、月 (candra) [=1]、月 (indu) [=1]、ヴェーダ (veda) [=3 or 4] である。4つのヴェーダのうち、最後に形成されたアタルヴァ・ヴェーダを含めるかどうかによって、「3」とも「4」とも解釈できる。

(ārogya-āyatana) には3つ〔の神を確立した〕(第39偈)。四方の (dvāra) には24の神々 (devatā) を確立し、あわせて430²⁰である。

41-43 寺院の外に安置された神々について。14〔の神々〕を、千体リング (liṅga-sahasra) とともにラージヤシュリーの小島 (rājyaśrī-pulina)²¹に、16〔の神々〕をそれぞれヨーギーンドラのヴィハーラ (vihāra) と2つの curi〔小さい井戸?〕に〔確立した〕(第41偈)。また22の神々 (devatā) を、ジャヤタターカ (jayataṭāka) の堤岸 (tīra) の諸尖塔 (valabhī) に、また最上の白象 (gaura-śrī-gaja-ratna)²²の塔 (caitya) に〔確立した〕(第42偈)。また、ヴィシュヴァカルマンという名の1つの神 (sura) を収入の倉庫 (āyasthāna-gr̥ha) に〔確立し〕、あわせて515である²³ (第43偈)。

44-53 ローケーシュヴァラを始めとした神々のために毎日捧げられるもののリスト。

54-60 毎年行われる18の祭礼のための品々のリスト。

61-77 毎年、各村から神々に捧げられる品々および人員のリスト。5324の村が王および村の所有者 (grāmavat) により奉納され、全体で97,840人〔が奉仕する〕(第73-74偈)。

78-94 毎年、王の倉庫 (bhūḥṛt-koṣṭha) から取られるべき物品のリスト。

95-102 寺院を荘厳するのに用いられた金属や宝玉のリスト。253の金の祠堂 (prāsāda) (第95偈)。

103-107 寺院内の石の建物について。尖塔のある祠堂 (valabhiprāsāda) が102、石の建物 (śilā-gr̥ha) が485。5つの場所 (sthāna) における砂の堆積した石〔砂岩 or ラテライト〕で作られた (śarkaraugha-śilā-mayā) 周囲の塚〔周壁〕([sama]n[ta]to vaprah) は2238尋 (vyāma) (第104偈)。砂の堆積した石でできた²⁴通路〔回廊 or 参道?〕(śarkaraugha-śilā-baddha-tara) が…〔規模は判

²⁰ 第35偈以下で述べられた神をあわせると、 $283+3+32+30+32+40+1+10+4+3+24=430$ となる。

²¹ ラージヤシュリーはニアック・ポアンのことと思われるが、同遺跡にある中央祠堂の観音像や神馬バーラーハではなく、「千体リングとともに」と表現されている。ちなみに1920年代のアンリ・マルシャルによる同遺跡の発掘調査では、北側の区画からリングが出土しており、このことを含めてボワスリエは、同遺跡にはヴィシュヌ、シヴァ、仏陀の三尊が祀られているとした (Boisselier 1970)。

²² マクスウェルは、「ratna」を「ratna-gr̥ha (宝石の家)」の略であると推測しているが (Maxwell 2007a: 49)、意味を限定的に捉えることについては慎重であらねばならない。ここでは、複合語の後分に現れる「ratna」の一般的な意味の一つ「最上の」で捉えておく。

²³ 先述された寺院内の神々430に加え、 $14+16\times 3+22+1=85$ なので、あわせて515となる。このことから、第41偈の解釈が「ヨーギーンドラのヴィハーラ (vihāra) と2つの curi」の3か所にそれぞれ16の神々が確立されたとなることが分かる。

²⁴ baddha (√bandh の過去受動分詞) は、「縛る、結ぶ、結合する、(堰または橋を) 築く、せき止める、堤で囲む」などの多様な意味があり、ここで述べられる構築物の具体的な機能を限定することは困難である。

読不能] (第 106 偈)。全体で 439 の小屋 (kuṭi) がある (第 107 偈)。

108-111 寺院に起居する人々について。教師 (adhyāpaka)、副教師 (upādhyāpaka)、苦行するヨーガ行者など。[仏教徒が?] 全体で 338 人。シヴァ教徒 (śaiva) も 39… [以下判読不能]。全体で 1xxx 人。

112-121 王が行ったその他の業績について。王は、如来 (sugata) ヴィーラシャクティを開眼し、…を確立した (第 112 偈)。王は、如来 (sugata) ラージャパティーシュヴァラとジャヤマンガラールタチューダーマニを、シカター (sikāṭā) という名の [場所] に確立した (第 113 偈)。ジャヤンタプラ、ヴィンディヤパルヴァタ、マルカルプラに、それぞれ王は三宝 (ratna-traya) を確立した (第 114 偈)。ジャヤラージャダーニー、ジャヤンタナガリー、ジャヤシンハヴァティー、ジャヤヴィーラヴァティー、ラヴォーダヤプラ、スヴァルナプラ、シャンブーカパッタナ、ジャヤラージャプリー、ジャヤシンハプリー、ジャヤヴァジュラプリー、ジャヤスタンバプリー、ジャヤラージャギリ、ジャヤヴィーラプリー、ジャヤヴァジュラヴァティー、ジャヤキールティプリー、ジャヤクシェーマプリー、ヴィジャヤーディプリー、ジャヤシンハグラーマ、マディヤマグラーマカ、サマレンドラグラーマ、ジャヤプリー、ヴィハローッタラカ、プールヴァヴァーサの 23 の地域 (deśa) において、王 (avanīpati) は、輝かしき (śrīmat) ジャヤブッダマハーナータを、ヤショーダラタターカの堤岸 (tīra) における 10 の祭式 (yāga) [のための施設?] ²⁵とともに確立した (第 115-121 偈)。

122-126 国内の幹線道と宿駅について。ヤショーダラプラからチャンパーの町 (campānagara) までの道 (adhvan) には、「火のある王の天幕」[宿駅] (upakāryā-hutabhujā) が 57 か所 (ālaya) ある (第 122 偈)。[ヤショーダラ] プラからピマーイの町 (vimāy-pura) までには 17 か所の火の [家=宿駅] (vahneḥ) があり、[ヤショーダラ] プラからジャヤヴァティー、さらにそこからジャヤシンハヴァティーまで、そこからジャヤヴィーラヴァティー、そこからジャヤラージャギリへ、そしてジャヤラージャギリからスヴィーラプリーへ、そこからヤショーヴァラプラへ [行く道には]、44 の火の家 [宿駅] (vahni-grha) がある。さらに、1 つ [の宿駅] がスーリヤパルヴァタに、1 つはヴィジャヤーディティヤプラに、1 つはカリヤーナシッディカにあり、全体で 121 である (第 125-126 偈)。

127 それぞれの地方 (pratīkṣetra) に、金 (rai)・銀 (rūpya)・青銅 (kaṃsa) ²⁶・石

²⁵ ここでの「yāga」は、祭式のための施設を意味する「yāga-maṇḍapa」や「yāga-sālā」を省略したものであるとマクスウェルは述べる (Maxwell 2007a: 83-84)。文脈上も、なんらかの建造物を指す可能性が高い。

²⁶ 「kaṃsa」は辞書的には真鍮 (黄銅) などを指す言葉であるが、銅を用いた合金を指すと思われる。これに類するクメールの神像は青銅製であることが一般的であるので、ここでは「青銅」と訳した。「銅合金」の方が適切かもしれない。

(*aśman*) で作られた、ヤマやカーラを含む神々 (*deva*) は、全体で 20,400 である。

128-140 [これら全国の] 神々に対する礼拝のために毎年支給される品々のリスト。脱穀済みの米は、マーガ月 (1-2 月) とバードラパダ月 (8-9 月) の市場 (*āpaṇa*) などで供給される (第 130 偈)。

141-144 これら全国の神々に奉仕する人びとについて。8,176 の村 (*grāma*) が、王と村の所有者によって [神々に] 与えられた (第 141 偈)。208,532 人の男女が神の奉仕者 (*deva-bhūjīṣyaka*) となっている (第 142 偈)。このうち、923 人の男性 (*puruṣa*) が監督者 (*adhyakṣa*) であり、6,465 人が労働者 (*kārin*) である (第 143 偈)。4,332 人が女性 (*strī*) であり、そのうち 1,662 人が舞踊者 (*natakya*) である (第 144 偈)。

145-152 [これら全国の] 寺院を荘厳するのに用いられた金属や宝玉のリスト。祠堂 (*prāsāda*) などを荘厳するための金などを列挙。

153-157 建てられたものの総計。尖塔のある祠堂 (*valabhiprāsāda*) が 514、石の家 (*śilā-veśma-khaṇḍa*) が 2066。砂の堆積した石 [砂岩 or ラテライト] で作られた (*śarkaraugha-śilā-mayā*) 周壁 (*prākāra*) [の長さ] は 16,490 尋である (第 154 偈)。長方形の池 (*dirghikā*) の周囲 (*samantatas*) [の長さ] は 24,628 尋である (第 155 偈)。ジャヤタターカなどの方形貯水池 (*tatāka*) の周囲 [の長さ] は 93,507 尋である (第 156 偈)。生徒 (*adhyeṭṭ*) が暮らす小屋 (*kuṭī*) は 1512 であり、全体は 2,989 である。

158-166 パールグナ月 (2-3 月) の祭礼について。毎年、パールグナ月において、以下の神々はここで見られる (*atrādhyeṣya*)²⁷。東の (or 以前の) 仏陀 (*prācyah munīndrah*)²⁸、ジャヤラージャチューダーマニ [タ・プローム寺院] と、25 の地域 (*deśa*) にあるジャヤブッダマハーナータ、如来 (*sugata*) ヴィーラシャクティ、ピマーイの如来、バドレーシュヴァラ、チャーンペーシュヴァラ、プリトウシャイレシュヴァラなど、脇侍 (*parivāra*) を含め全体で 122 である (第 158-160 偈)。以下、この祭礼に際して、王の蔵から

²⁷ 「*adhyeṣya*」は「*adhi*」(認める、学ぶ、暗誦するなどの意)の未来分詞であり、マクスウェルが述べるように様々な意味に解釈されている (Maxwell 2007a: 95)。この箇所以下で述べられる諸神を、尊像を実際に目にするか、あるいは朗誦などを通して心の中に想起するかは判じがたいが、身近に感じるようにすることであると解したい。

²⁸ 「*prācyo munīndraś*」について、セデスは「東の仏陀」と解し、ジャヤラージャチューダーマニ (タ・プローム寺院) の直前に記載されていることなどを踏まえ、バンテアイ・クデイ寺院のことであると推定している (Cœdès 1941: 298, n.2)。またマクスウェルは、第 36 偈にみられるプレア・カン寺院内の東区画に祀られたトリブヴァナヴァルメーシュヴァラであるとする (Maxwell 2007a: 95)。また、より東方の、コンボン・スヴァーイのプレア・カンやベン・メリアと考える説もあるようである (上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022: 45) が、いずれも確証はない。「*prācyā*」の語には「東方の」という意味の他に「以前の」という意味もあり、「以前の仏陀」すなわち過去仏を指す可能性もある。

(nr̥pater nidheḥ) 抛出される品々についてのリスト (第 161-165 偈)。スーリヤバッタなどのバラモンたち、ジャワの王 (javendra)、ヤヴァナの王 (yavaneśvara)、2 人のチャム人の王 (cāmpendra) は、毎日 (pratidinam)、献身 (bhakti) によって、沐浴用の水 (snānāmbu) を持つ (第 166 偈)。

167-170 ジャヤタターカについて。漁師 (mrgayu) のアジテンドラは、木の筵 (kāṣṭha-kāṭa) を仏陀に捧げたので、バイラヴァのような大王の地位 (aiśvarya) を獲得したが、王 [ジャヤヴァルマン 7 世] については、金 (suvarṇa)・宝石 (maṇi)・成長した象の牙 (dvipendra-radana)・祠堂 (prāsāda)・王座 (bhadrāsana) を仏陀と神、バラモンその他の苦行者 (yati) に捧げた [ことで権力を得た] (第 167 偈)。王は、石 (upala) と黄金 (kanaka) と花環 (mālā) で彩られたジャヤシュリー (プレア・カン寺院) の鏡 (ādarśa) であるジャヤタターカを作った。(第 168 偈)。その内側には、小島 (pulina) があり、罪を清める (第 170 偈)。

171-172 これらの善行は、すべての生き物のために行われたが、とりわけ父親のためであった。

173-178 将来にわたって、これらの善行が守護されるように請願。ここの 306, 372 人の、チャム人、ヤヴァナ [大越?] の人々、プカーン [ビルマ?] の人々、ルヴァン [モン?] の人々を含む [神々に奉仕する] 男女と 13, 500 の村と、木や石やその他の素材で作られた、神々を崇拝するために用いられるあらゆるものが、全て保護されるように (第 177 偈)。

179 ジャヤヴァルマン [7 世] 王陛下の第一の (agryā) 妻 (satī) であるラージェーンドラデーヴィーの長子であるヴィーラクマーラが、この碑文を書いた。

史料 3 : プラサート・トー碑文 (K. 692/ 1195 年) (IC1: 227-249; Honda 1994)

- 1 シヴァに対する賛辞。
 - 2 ヴィシュヌに対する賛辞。
 - 3 ブラフマーに対する賛辞。
 - 4 ガンガーに対する賛辞。
 - 5 ブーペンドラパンディタに対する賛辞。「尊者の頭の上にいる蜂の群れが蓮にお辞儀をするように、ブーペンドラパンディタの足に恭礼せよ。彼は輪廻の流れから世界を救済する (引き上げる) ためにグヒヤティーカー [グヒヤ・ストラの注釈] の道によってヤマの住居を空虚にした」。
- 6-41 ジャヤヴァルマン 7 世への賛辞と王の業績について。王の美しさや賢さ、勇敢さは、以前の王たちよりも優れている (第 7 偈)。目から出る光線でカーマ神を焼いたシヴァのように、王も愛をもっている (第 11 偈)。王が行った供儀の炎は、ゴーヴァルダナ山を支えるハリ (クリシュナ) の手のようであった (第 22 偈)。王は、天にいる自身の母の父 [ハルシャヴァルマン三世] に

随う（依拠する）比類なき金の彫像を確立した（第 25 偈）。彼の方形貯水池（vāpī）²⁹は、大きさで海と同じではないが、中央に現れたアウルヴァ仙の海中の火³⁰と黄金（kārthasvara）の塚（vapra）の姿（bimba）によって〔海に比肩する〕（第 27 偈）。新しい〔or 若い〕（navīna）大地の主（vasudhādhīpa）によって、チャム人の町に派遣されたチャム人の王³¹

（cāmpesvaraprahitacāmpapura）によって、大地がとても小さく（svalpa）されたとしても、ああ（bata）、思うにそれはまさにブラフマーの卵〔宇宙〕

（brahmāṇḍa）であり、彼が生み出した（tadutthita）偉大なる荣誉（kīrti）によって、うまく切り取られた（sutanūkrta）のである（第 35 偈）³²。ヴィハーラ（vihāra）の周囲にある王によるアーシュラマ（āśrama）の建立（viracita）は、天上の世界（dyuloka）であり、絶えず祈願され非常に多くの人々に祈願を伴っているため（nityahūtapuruhūtapurassareṇa）、分割されず絶え間ない祭式において喜んでいる（sukhin）神（sura）によって、長く継続（sthiti）する（第 36 偈）。火の家（vahnyagāra）³³において行われる火神〔アグニ〕

（saptārcis）への礼拝について、かつてカーンダヴァの森をアグニ神が焼いたときにクリシュナとアルジュナ、隠者マンダパーラが行った儀礼（『マハーバーラタ』）になぞらえる（第 37 偈）。（王が作った）貯水池（tatāka）をガンガーになぞらえる（第 39 偈）。

42-44 王国が一時困難に見舞われた（チャンパーによる侵攻を想起）が、王が再び征服したことを称賛。

45 チャンパーに対して勝利した後、王はすぐさま力強き西の王³⁴を（tejasvinam inam aparam）降した（adhahkrtya）。

46 （ブーペンドラパンディタの）母バーギーシュヴァリー・バガヴァティーと、父のナマッシヴァーヤ³⁵に対する賛辞。

²⁹ ここでいう方形貯水池は、この寺院のすぐ近くにある東バライカ、もしくはジャヤヴァルマン 7 世の創建とされるジャヤタターカ（ニアック・ポアン）を指すものと思われる。

³⁰ アウルヴァ仙が海中に放った火は馬の形をしているとされ、ジャヤタターカ（ニアック・ポアン）の馬の彫像（一般に観音の化身である神馬バーラーハを描いたものとされる）を想起させているのかもしれない。

³¹ かつてアンコール王都を陥れ、その後ジャヤヴァルマン 7 世によって捕虜にされ、さらにチャンパーでの反乱鎮圧のために派遣されたジャヤ・インドラヴァルマン 4 世のことを指す可能性がある。ジャヤ・インドラヴァルマン 4 世の派遣は 1190 年のことであったことがミーソン碑文により知られるので、1195 年の日付があるこの碑文にこのような表現があることは平仄があう。

³² この箇所は、ジャヤヴァルマン 7 世の即位前に、チャンパーにより王都が占領されるなどの混乱があったこと指すと思われる。ブラフマーが宇宙卵を割って世界を作ったことになぞらえ、国土の混乱を、同王の治世の繁栄の基礎として位置付けている。

³³ ジャヤヴァルマン 7 世が全国に建立したいわゆる宿駅のことを指すものと思われる。

³⁴ セデスは「おそらくビルマの王」とする（IC1: 246, n.7）。

³⁵ バーギーシュヴァリー・バガヴァティーとナマッシヴァーヤの夫妻はバーン・タート碑

- 47-49 ブーペンドラパンディタに対する賛辞および業績について。水がめで生まれし者（アガスティヤ仙）よりも優れているとする（第 47 偈）。ジャヤヴァルマン〔6 世〕、ダラニンドラヴァルマン〔1 世〕、スーリヤヴァルマン〔2 世〕の三人の王のもとで、ブーペンドラパンディタ（Bhūpendrasūri）は判事（？）（sabhyadarśin）³⁶であった（第 48 偈）。彼はリングと自身の肖像を（pratikṛtim svayam）、ここブーペンドラデーシャにおいて、同じように確立した（第 49 偈）。
- 50 大ブーペンドラパンディタの息子であるスーリヤパンディタは議長（sabhāpati）³⁷であり、スーリヤヴァルマン〔2 世〕の sausnātika³⁸であった（第 50 偈）。
- 51-59 ブーペンドラパンディタの家系について。このブーペンドラパンディタ〔の名を世襲した〕議長は、〔次に〕王からラージェンドラパンディタという名を与えられ、そしてスーリヤパンディタという名を与えられた。なぜなら以前の師（guru）よりも優れていたからである（第 51 偈）。19 歳で父より学識を獲得し、金の輿などを使用した（第 53 偈）。スーリヤパンディタは、母バガヴァティーと父ブーペンドラパンディタ、そして自身と妻の肖像を奉納した（第 57 偈）。スーリヤパンディタは両親への愛を通してシヴァ（īśvara）に対して宝石や金・銀・銅・鉄など、様々な奉獻を行った（第 58 偈）。
- 60 ブーペンドラパンディタの姉妹の息子で、大ブーペンドラパンディタの孫は、最善の議長（agryas sabhāpati）であり、クシャスタリー（Kusasthālī）³⁹のブーペンドラパンディタという名で呼ばれた。
- 61 ジャヤーディティヤプラの村において、ジャヤヴァルマン〔7 世〕王の宮廷の長（sabhyaādhipa）であるスーリヤスーリ（sūryasūri）が、シャカ暦 1117 年（西暦 1195 年）にこの碑文を書いた。

文（K.364/ 12 世紀/ ラオス、チャンパーサック県）にも記載されている。

³⁶ セデスは「inspecteur des magistrats」とする。バッタチャリヤは「sabhāpati」（議長、裁判官）と同様であるとするが（Bhattacharya 1991: 25）、詳しい職責等は不明である。

³⁷ 「sabhāpati」は、sabhā（会堂、宮廷、法廷、寺院）の主という意味であり、ある集団における高位の意思決定権者と思われる。時に「裁判官」と訳されることもあるが、その職責を限定するにはさらなる検討が必要である。ここではひとまず「議長」とする。

³⁸ 「sausnātika」は、王の沐浴に係する役職のようである。

³⁹ クシャスタリーは『マハーバーラタ』などに出てくる町の名で、ドヴァーラカー（現インド、グジャラート州ドワールカー）のことを指す語であるが、ラオス・チャンパーサック県のバーン・タート碑文でも同名の地名が見られることから、同寺院周辺の土地を指す可能性がある（Finot 1912: 5-6; IC1: 228）。

参考文献

- 荒樋久雄 2001 「バンテアイ・クデイ遺跡研究(1) —先行研究に立脚したバンテアイ・クデイ論考察—」『カンボジアの文化復興』(18): 141-163.
- 岡野潔 2008 「Avadānakalpalatā 55 章、91-92 章と Karmaśataka 125-126 話-Sarvaṃdada, Śibi, Maitrakanyaka の校訂・和訳---」『南アジア古典学』(3): 57-155.
- 久保真紀子 2012 『アンコールのプレア・カーンにおける図像表現とその配置構成—出入口に施された装飾を中心に』博士學位論文(上智大学)
- 2015 『タ・ソムの出入口に施された図像表現とその配置構成: プレア・カン及びジャヤタターカ周辺の寺院群に関する調査報告』Sophia Monograph Series No. 18、上智大学アジア文化研究所
- 上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022 『バンテアイ・クデイ I : カンボジア アンコール遺跡群バンテアイ・クデイ前柱殿 C09 一帯における発掘調査報告』上智大学、上智大学アジア人材養成研究センター
- 菅沼晃編 1985 『インド神話伝説辞典』東京堂出版.
- 松浦史明 2014 「アンコールの彫像にみる人と神—刻文史料の検討から」『佛教藝術』(337): 36-55
- 2018 「クメール刻文研究の新時代」『東方学』(136): 89-100.
- 2019a 「刻文史料から見たアンコール朝の仏教とその展開」肥塚隆編『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版: 195-226.
- 2019b 「仏教王ジャヤヴァルマン七世治下のアンコール朝」千葉敏之編『歴史の転換期 4 1187 年: 巨大信仰圏の出現』山川出版社: 130-187.
- 2023 「古代クメール刻文の終焉—ジャヤヴァルマン七世期とその後の刻文史料」青山亨編『東南アジア「古代史」の下限としての 14・15 世紀に関する地域・分野横断的研究』東京外国語大学: 22-39.
- Bhattacharya, Kamaleswar. 1991. *Recherches sur le vocabulaire des inscriptions sanskrites du Cambodge*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- Billard, Roger & John C. Eade. 2006. "Dates des inscriptions du pays khmer." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (93): 395-428.
- Boisselier, Jean. 1970. "Pouvoir royal et symbolisme architectural: Neak Pean et son importance pour la royauté angkoriennne." *Arts Asiatiques* (21): 91-108.
- Chhom, Kunthea. 2021-2022. "Vihāras in Ancient Cambodia as Evidenced in Inscriptions." *Buddhism, Law & Society* (7): 231-274.
- Cœdès, George. 1906. "La stèle de Ta-Prohm." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (6): 44-86.
- . 1918. "Études cambodgiennes XIV: une nouvelle inscription du Phīmānākās." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (44-1): 97-120.

- _____. 1937-1966. *Inscriptions du cambodge*. 8vols. Hanoi-Paris: Ecole Française d'Extrême-Orient.
- _____. 1942. "La stèle du Práh Khân d'Angkor." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (41): 255-302.
- _____. 1940. "Études cambodgiennes XXXIV: Les hôpitaux de Jayavarman VII." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (40-2): 344-349.
- _____. 1947. *Pour mieux comprendre Angkor: Cultes personnels et Culte royal, Monuments funéraires, Symbolisme architectural, Les grands souverains d'Angkor*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient, Adrien Maisonneuve.
- _____. 1951. "Études cambodgiennes XXXIX: L'épigraphie des monuments de Jayavarman VII." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (44-1): 97-120.
- Estève, Julia. 2009. *Étude critique des phénomènes de syncrétisme religieux dans le Cambodge Angkorien*. PhD Diss., École Pratique des Hautes Études.
- Finot Louis. 1912. "Notes d'épigraphie XIII: L'inscription de Ban That." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (12): 1-28.
- Griffiths, Arlo & Brice Vincent. 2014. "Un vase khmer inscrit de la fin du XI^e siècle (K.1296)." *Arts Asiatiques* (69): 115-128.
- Honda, Megumu. 1993. "Ta Prohm Inscription." *The Dohodaigaku Ronso: The Journal of Buddhism and Cultural Science* (68): 99-111.
- _____. 1994. "Prasat Tor Inscription." *The Dohodaigaku Ronso: The Journal of Buddhism and Cultural Science* (70): 85-98.
- _____. 1999. "Prah Khan Inscription." *The Dohodaigaku Ronso: The Journal of Buddhism and Cultural Science* (80): 1-29.
- Jacques, Claude. 1999a. « Les derniers siècles d'Angkor." *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* (143-1): 367-390.
- _____. 1999b. "Les inscriptions du Phnom Kbal Spân (K 1011, 1012, 1015 et 1016): Études d'épigraphie cambodgienne XI. » *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (86): 357-374.
- _____. 2003. "A propos de la découverte inespérée d'un objet inscrit au Cambodge: une dédicace du roi Jayavarman VII en 1217." *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* (147-1): 415-425.
- _____. 2007b. "The Historical Development of Khmer Culture from the Death of Suryavarman II to the 16th Century." In Joyce Clark (ed.), *Bayon: New Perspectives*: 28-49. Bangkok: River Books.
- Jenner, Philip N. 2009a. *A Dictionary of Pre-Angkorian Khmer*, Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- _____. 2009b. *A Dictionary of Angkorian Khmer*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School

- of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- _____. 2011. *A Dictionary of Middle Khmer*. Canberra: Pacific Linguistics, School of Culture, History and Language, College of Asia and the Pacific, The Australian National University.
- Kapur, Pradeep Kumar & Sachchidanand Sahai. 2007. *Ta Prohm: A Glorious Era in Angkor Civilization*. Bangkok: White Lotus.
- Lustig, Eileen. 2009. *Power and Pragmatism in the Political Economy of Angkor*. PhD Dissertation, University of Sydney.
- Majumdar, Ramesh Chandra. 1953. *Inscriptions of Kambuja*. Calcutta: The Asiatic Society.
- Matsuura, Fumiaki. 2017. "Recent Development in Khmer Epigraphy." *Asian Research Trends New Series* (12): 85-106.
- Maxwell, Thomas S. 2007a. "The Stele Inscription of Preah Khan, Angkor: Text with Translation and Commentary." *Udaya, Journal of Khmer Studies* (8): 42-45.
- _____. 2007b. "Religion at the Time of Jayavarman VII." In Joyce Clark (ed.), *Bayon: New Perspectives: 72-121*. Bangkok: River Books.
- _____. 2007c. "The Short Inscriptions of the Bayon and Contemporary Temples." In Joyce Clark (ed.), *Bayon: New Perspectives: 122-135*. Bangkok: River Books.
- _____. 2009. "A New Khmer and Sanskrit Inscription at Banteay Chmar." *Udaya, Journal of Khmer Studies* (10): 135-201.
- Pou, Saveros. 1978. "Inscription dite de Brai Svây (ou Bois des Manguiers) de Sukhoday." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (65-2): 333-359.
- _____. 1989. *Nouvelles inscriptions du Cambodge I*. Paris: École française d'Extrême-Orient.
- _____. 1992. *Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais*. 1^{ère} édition. Paris: L'Harmattan.
- _____. 2001. *Nouvelles inscriptions du Cambodge II & III*. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- _____. 2004. *Dictionnaire Vieux Khmer-Français-Anglais*. 2^e édition. Paris: L'Harmattan.
- _____. 2011. *Nouvelles inscriptions du Cambodge IV: avec la collaboration de Grégory Mikaelian*. Paris: L'Harmattan.
- Pou (Lewitz), Saveros. 1971. « L'inscription de Phimeanakas (K.484) (Étude linguistique). » *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (58): 91-103.
- Sotheavin, Nhim. 2018. "A Study of the Names of Monuments in Angkor (Cambodia)." 『カンボジアの文化復興 (Renaissance Culturelle du Cambodge) 』 (30): 13-68.
- Soutif, Dominique. 2009. *Organisation religieuse et profane du temple khmer du VIII^e au XIII^e siècle*. PhD Dissertation, Université Paris III, Sorbonne nouvelle.
- _____. 2010. « Le pendentif inscrit du musée national du Cambodge: une «bague de Rāma» datant du règne de Jayavarman VII (K.1277). » *Arts Asiatiques* (65): 121-132.
- Stern, Phillipe. 1965. *Les monuments khmers du style du Bâyon et Jayavarman VII*. Paris: Presses Universitaires de France.

Trouvé George. 1932. « Le Pràsàt Tor, description du monument et des vestiges avoisinants. »
Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient (32): 207-232.

カンボジア・アンコール地域 バンテアイ・クデイ出土の土器・陶磁器をめぐって —前柱殿(C09)一帯出土の資料から—

宮本 康治

大阪市教育委員会事務局 文化財保護課

はじめに

アンコール期の土器・陶磁器については、とりわけクメール陶器をめぐって生産地：窯跡調査における進展が見られる。灰釉陶器だけでなく黒褐釉陶器も含め生産される器種、変遷の把握や技術的な系譜など大きく理解が進められている（奈良文化財研究所 2005、杉山 2005、青柳・佐々木編 2007、田畑 2008 ほか）。また消費地の都城や寺院等においても調査例が増えつつあり、資料が蓄積されてきている。そのなかで貿易陶磁を中心に検討して在地陶器との関係等についても言及したものなど（田畑 2014）、さまざまな研究の進展が見られている。

そのような中、今回とりあげるバンテアイ・クデイ遺跡においては 1991 年以来小規模ながら調査を断続的に続け、成果を蓄積しつつある。その一部、2000 年までの調査成果について先年に報告書となった（上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022）。その対象となったのは寺院中央の東に位置する前柱殿(C09)と呼称する建造物の一帯である（図 1・2）。そこでは建造物の建替・廃絶等に伴い複数のまとまりのある土器・陶磁器等の遺物群を検出している。寺院内の一部のため、一定のかたよりも想定されるが、当該時期の土器・陶磁器の状況を示し、遺跡内や他遺跡等との比較等をすすめていくうえでの基礎作業を行えるとみている。それらについてアンコール期およびそれより後の時期もあわせ、その様相や変化の状況等について検討を加えることにしたい。

1. バンテアイ・クデイにおける発掘調査と出土資料

本稿で扱う資料の出土した遺構の状況についてまず見ておく。対象とするのは仏教寺院として成立したバンテアイ・クデイのなかで、寺院中心部の東に位置する前柱殿(C09)（註 1）の一帯での調査で出土した資料である。

そこでは対象となる前柱殿(C09)をはじめとする建造物や遺構の形成過程を整理し、寺院の建造物の築造時あるいはそれに先行する状況から近現代までを 4 つの段階に大別している（図 3・4）。なお、これは該当地点付近についての区分のため、今後遺跡全体で別の時期区分等の整理が必要ともなる。

前柱殿(C09)付近の遺構等の概況を見ておくと、1・2 段階（アンコール期）においては中央祠堂の東に隣接する地点であり、各建造物が断続的に築造された過程が明らかになっている。そこでは前柱殿(C09)、その南にあるラテライト積基壇建物(CU02)、その

上に築かれた外回廊東南列柱殿(C03)などが調査されている。中央祠堂の南東にあって付属する建物が位置する一角で、土器類等もある程度出土するなど、人々の活動が一定あったことが推測される地点である。ついで第3段階：ポスト・アンコール期にはこれらの東側等で前柱殿東南小堂(C10)などの施設が築かれた。前柱殿東南小堂(C10)は上座仏教のテラス施設であり、寺院が上座仏教の空間へと変質をとげていったことが明らかになり、また基壇近辺には蔵骨器が納められ、葬送の場でもあったことも確認されている。

これらの各段階の建造物に伴う整地層や機能、廃絶時の堆積等から遺物がある程度出土しており、検討を加えていく。遺構をもとにした段階の区分ともある程度対応させながら、以下のように段階を分けて把握できる概況と傾向等を記していくことにする(註2)。

第1段階：11～9層出土遺物

砂地業層第8層より下の包含層第11層、前柱殿(C09)南東の包含層第10層など、下位の地層からの出土遺物

第2a段階：第8～6層出土遺物

開渠状遺構(CU05)、ラテライト積基壇建物(CU02)構築・機能時の地層からの出土遺物

第2b段階：第4・5層出土遺物

前柱殿(C09)の整地および外回廊東南列柱殿(C03)の構築に伴う地層からの出土遺物

第2c段階：第3層出土遺物

(外回廊東南列柱殿(C03)の機能および廃絶期の地層からの遺物)

第3段階：第2層遺物

(ラテライト構築物(CU03)、前柱殿東南小堂(C10)等に関係の遺物)

2. 各段階の土器・陶磁器類の状況

(1) 第1段階(図5)

ここでは前柱殿(C09)等の建造物に先行する包含層等である第11・10層から出土した例をもとに概況を見ておく。(第15次、26・29次ほか)土器(1)・クメールの無釉の焼締陶器、灰釉陶器(2・3)、黒褐釉陶器(4～6)、貿易陶磁の中国産磁器(7)等からなる。

土器では口縁端部が玉縁状に肥厚する壺(1)があり、これは以降の段階にも継続して見られる。それに無釉の焼締陶、黒褐釉陶器(4～6)があつて、いずれも壺類である。それに加え灰釉陶器の合子蓋(2)・身底部(3)などがある。貿易陶磁器では中国産の白磁合子の身底部(7)が見られる。

(2) 第2a段階 (図5)

ここではラテライト積基壇建物(CU02)に伴う第6層(第26・29次出土例)からの資料を主に提示する。土器(8～13)、無釉の焼締陶器(14)、灰釉陶器(15)、黒褐釉陶器(16・17)、中国産陶磁器(18・19)等から構成されている。

土器では口縁が玉縁状等に肥厚する壺類(8～12)がある。頸部が外反し、ミガキ状の調整が見られ、頸部の基部に沈線・凹線あるいは突帯がめぐるのが主体である。丸底の器形の可能性がある。法量の分化があり、主体は口径13～14cmのもの(9・10)と20cmを超えるものである(11・12)。それ以外にさらに小型の口径10cm前後で口縁端部が折り曲げられるものがある(8)。他の器種として高杯状で台のつく器種もある(13)。

無釉の焼締陶器では壺類の頸部(14)が見られ、灰釉陶器では合子蓋(15)、黒褐釉陶器では壺(16・17)や甕が見られる。

貿易陶磁器では中国産の白磁合子身(19)があり、口径8.5cmほどのもので、おおよび蓋とみられるものがあつた(18)。

(3) 第2b段階 (図5)

前柱殿(C09)周囲の整地および外回廊東南列柱殿(C03)の建造時の地層である第5層、第4層(第26・29次出土例、第16次等)からのものを取り上げる。土器(20～25)、無釉焼締陶器(26～28)、黒褐釉陶器(29～34)、中国産磁器(35・36)等からなる。

土器では壺・甕類で口縁を肥厚させるものがあり、法量に口径10cmほどの(20)、12～14cmほどの(21・22)と20cmを超えるもの(23・24)が見られる。全形は不明なもの平底の器形の底部(25)などもある。

無釉の焼締陶器では壺あるいは甕類がある(26～28)。黒褐釉陶器では壺類があり(29～34)、いわゆるバラスターとみられるものの体部(34)や、体部に波状文のある広口のもの32などが見られる。貿易陶磁器では中国産の白磁あるいは青白磁があり、合子身(35)および壺とみられる(36)などがある。合子身は口径約9cmのものである。

(4) 第2c段階 (図6)

外回廊東南列柱殿(C03)の機能から廃絶時を示すとみられる第3層(第16、26・29次ほか)の遺物を代表として示す。土器(37～52)、無釉焼締陶器(53～55)、灰釉陶器(56)、黒褐釉陶器(57～62)、中国産磁器等の貿易陶磁器(63～75)からなる。

土器では口縁が肥厚する壺(41～49)が主体で、それにつまみのつく蓋類(37)他、長頸壺とみられる(40)、短頸壺とみられる(51)、全形は不明ながら平底の器形(52)、などがある。口縁が肥厚する壺類では口縁部の形態と口径等で区分が可能である。端部が玉縁状になるものでは13～14cmほどのもの(41～43)と20cmを超えるもの(47～49)の2種以上の法量があるようである。また41～43は外面にミガキを施し、頸部に突帯がめぐり色調が灰白色を呈してやや明るい、44～46はそれとは異なり、ゆるやかに肥厚し色調がやや赤みをおびるなど異なる点があるもので、口径は15～16cm程である。

頸部から体部の破片には凹線等で段を設けその間に鋸歯状の原体等で装飾を行っているものが見られる (50)。

無釉の焼締陶器では体部に波状文をもつものなど壺類が複数種あるようである (53～55)。灰釉陶器がわずかに見られる (56)。黒褐釉陶器では壺蓋 (57) および壺類 (58～60)、甕類 (61・62) などが含まれる。

貿易陶磁器では中国産磁器があつて白磁・青磁等が含まれる。器種では合子、壺、盤等が見られる。白磁あるいは青白磁に合子があり、蓋・身では口径 9～10 cmほどのもの (63・64、68) と、ひとまわり大きく身で口径 15 cmを越えるものなどがある (65・67、69・70)。胎土が精緻で貫入が少ない一群と貫入が見られるなど異なるものがあり、景德鎮産および徳化などの複数の産地のものが見られるとみている。青磁では碗等の底部の可能性もある (71・72) や、小型の壺 (73)、盤 (75) があり、龍泉窯産の可能性もある。さらに青磁小壺ではスワンカロック産の可能性もあるものが見られる (74)。

(5) 第3段階 (図7)

前柱殿東南小堂(C10)の基壇周囲・上面等や関連施設付近等での調査に伴う資料を代表として示す (第 19・21 次ほか)。含まれる土器・陶磁器は年代においては幅があり、今後細分が必要であろう。土器 (76,) 土器あるいは無釉の陶器 (77～79)、褐釉等の施釉陶器 (80～83)、貿易陶磁器 (84～95) 等からなる。

土器には丸底の壺あるいは甕類がある (76)。

無釉の陶器あるいは土器類に壺類 (77～79) が見られるが、現状では産地を特定できていないものがある。無釉でやや軟質ではあるが、無釉陶器の範疇でとらえられるものかもしれない。施釉陶器では黒褐釉～褐釉のものがある (80・81)。施釉陶器の蓋付碗 (82・83) もあり、非常に軟質な焼成の一群である。黒褐釉に類似したものもあるが中国産の可能性等もあり、産地や時期は明らかではない点が多く、今後の検討が必要である。

貿易陶磁器とみられるものでは中国産、およびタイ、ベトナム産の可能性もあるものがある。まず中国産のものでは白磁、青磁、青花、色絵磁器等があり、景德鎮産、漳州窯系等とみられるものがある。景德鎮産とみられるものに白磁の合子 (84)、青花小型壺 (85)、色絵の小型壺 (86) 等がある。漳州窯産等と推測されるものでは青花の小型壺 (88・89) や碗 (90)、白磁 (91) 等がある。他に褐釉陶器の小型壺 (94) 等もある。詳細は不詳ながら中国産の可能性もある青花 (92) などの小型の壺類が含まれる。

以上の資料には蔵骨器に用いられた壺類があり、器種に一定の傾向があるといえよう。

(6) 時期をめぐって

ここで各段階の年代についてふれておこう。まずバンテアイ・クデイそのものの成立については碑文等で創建年代を直接示すものは知られていないが、建築・美術的史観点からジャヤヴァルマン 7 世の時期に造営された寺院であるとみられている。

本稿での区分で第1段階についてはどこまでさかのぼるか手がかりが少ない。灰釉陶器がある一方で黒褐釉陶器も含まれ、第2a段階以降と概況は類似しているようで、本地点で検討を加えたものについていえば、調査地点の建物の造営から大きくさかのぼることはないのではとみている。今後さかのぼる遺構・遺物が検出される可能性はむしろあるだろう。第2a～2c段階については寺院が造営された時期にあたと推測し（12世紀末から13世紀にかけて）、第2c段階の下限については龍泉窯製品等の状況から14世紀代～まで含む可能性があり、やや幅があるとみている。

第3段階については中国産磁器等で16～17世紀代のものを含むが、今回扱っているものではそれ以降の時期の資料も含む可能性があり、現状ではかなり年代幅があると推測している。今後良好な資料で細分等位置づけを検討していく必要がある。

3. 土器・陶磁器の変遷

(1) 全体的な推移と数量 (図8・9)

次にその変遷、推移について種類ごとの状況をまとめ、その傾向等を見ておくことにしよう。まず全体的な推移からみると(図8)、第1～2c段階にかけては土器・灰釉陶器、無釉の焼締陶器、黒褐釉陶器、そして貿易陶磁器からなっていて、小さな変化はあるものの類似した構成が継続しており、それが第3段階で変化を示していた。第2c段階まで見られた在地産のクメール陶器の焼締陶や黒褐釉陶器等が継続してはいない状況である。第3段階が蔵骨器を多く含むという点もあるが、変化が認められるといえよう。

ここで数量的な傾向に簡単にふれておこう(図9)。層位によっては出土量が少なく、傾向を確認するのが難しいところもあるが、ある程度まとまりのある群を破片数をもとに示す(註3)。第1、第3段階ではあまりまとまりのある資料がないが、第2a～2c段階ではあげることができる。

第1段階では第15次調査の事例で、40%あまりが土器で、黒褐釉、無釉陶などが残りを構成する。第2a段階では第7層、6層のもので80～90%が土器で残りを無釉・黒褐釉陶等が占める。第2b段階では第29次調査の第5層の例で80%あまりが土器で、残りが黒褐釉、焼締陶器などである。第2c段階では同じく第29次調査の第3層、第16次調査の外回廊東南列柱殿(C03)建物内の第3層では、土器・陶磁器類のうち90%以上が土器で、残りを無釉・黒褐色釉陶器などが占めている。第3段階ではC10周囲の第2層の状況で、包含層からの資料であるが、土器が多くて貿易陶磁器類がそれに次ぎ、残りをそれ以外が占めている。

破片数からの確認で、第1段階はやや資料数が少ないが、第2a～2c段階にかけては土器が80～90%以上と主体となっており、無釉焼締・灰釉・黒褐釉陶器は数%～程度あってそれにつぎ、貿易陶磁器はさらに少ない状況である。第3段階(第2層)では貿易陶磁器が多くなっていることがうかがわれた。

(2) 遺物種ごとの動向

土器類

個別の状況を見ていくと、無釉軟質の土器では第1段階より第2c段階までは継続して見ることができるが、第3段階ではまだ良好な資料がなく、どのように継続するかなどの調査地点では跡付けることができていない。

第1～2c段階にかけては口縁が肥厚する壺類があつて、主要な器種として継続して見られる。端部は玉縁状で、頸部の基部に突線・帯などがめぐるのが主体である。法量で2種以上ある可能性がある。主体は口径13～14 cm、20 cmを超えるもので、さらに小型のものなども見られる。口径13～14 cm程度のものでは頸部にミガキ状の仕上げのあるものが主体となっている。第2c段階にはそれに加えて口縁端部の形状が異なり、ミガキが施されないなど別の一群が含まれ、区分が可能である。壺状の器形では現状では底部まで形状がわかるものが少ないが、今後良好な資料もふまえ形態や製作手法および胎土等で区分をより明確化できるだろう。

上記以外に壺類に伴う蓋類、全形が不詳ながら台のつく器形や長頸壺類があるようである。また、第1～2a段階など、器形の詳細が不明確ながら胎土に小礫～粗粒砂を多く含み粗放な胎土の破片が出土しており、そうした一群が区分される可能性がある。

第3段階には丸底の壺類等が出土しているが、第1～2c段階からどのように継続するか、今後資料を補完して推移を検討していく必要がある(註4)。

無釉焼締陶器・灰釉陶器・黒褐釉陶器

ついで在地産の無釉の焼締陶器、灰釉陶器、黒褐釉陶器については、第1～2c段階まで継続して見ることができる。

無釉の焼締陶器は第1～2c段階まであり、器種としては壺類が継続して主体となっていることがみてとれるが、細かな変遷の把握は十分ではない。

灰釉陶器では第1～2cにかけて合子があり、第1段階では筒形の合子と蓋が、第2a～2cにかけても合子身等が見られる。少ない資料の内ではあるが、第1～2a段階でむしろ多い印象はあり、先行する時期の状況をうかがわせる可能性もあろう(註5)。

黒褐釉陶器では第1段階より認められ、壺類の体～底部片が見られる。第2a～2c段階でも各種の壺類やそれに伴う蓋、甕等の器形が認められる。壺類ではいわゆるバラスター形の長頸壺、短頸のものなど多様なものがある。

これらのクメール陶器としてまとめることのできる一群については、第3段階では小片等で二次的に含まれるものはあるもののほとんど見られない。また無釉あるいは褐釉等の陶器が出土しており産地が不詳なものがあるが、その産地や系譜関係等は今後の課題であろう。

貿易陶磁器類

中国産をはじめとする貿易陶磁器では、第1～2b段階にかけては中国産のみである。

白磁・青白磁があり、多くを合子が占め、壺等が少量ある状況である。合子では身で口径が 10 cm 以下の小型のものが主体である。平形のものはあるが、壺形の見られないようである。それが変化するのが第 2c 段階で、中国産磁器では、合子の中でも蓋・身とも 15 cm を超えるようなものが一定含まれること、産地が複数推測されることなどが指摘できる。産地では景德鎮産に加え徳化窯等も含まれるようである。それに加え、龍泉窯産とみられる青磁の盤や小型の壺等が現れている。それとともにタイ・スワンカロックとみられる青磁の小型壺もあり、産地・器形ともに多様化が認められている。

第 3 段階には器種で変化が見られ、産地等という面でも多様化が進展するといえよう。器種では小型の壺が主体で、それに碗・皿等の食膳具が少量加わる。これはこの段階の資料は蔵骨器がかなり含まれていて壺類が多く、器種に一定の傾向があることによるものであろう。碗等の他器種も加わっていて、第 2c 段階までの合子に他の器種が少量組み合わさる状況とは異なっているといえる。中国産のものでは景德鎮産および漳州窯産のものがある（註 6）。さらに中国産の施釉陶器もあるようだが詳細は不明確である。それに加えタイ・ベトナム産とみられる資料もみられる。大局的には器種、産地等、多様化へと向かう変化は既指摘とも沿う点である（田畑 2014）。

また年代の上では 16～17 世紀代のものに加え、さらに後の時期のものも含まれる可能性が高く、その詳細は今後の課題である（註 7）。

（3）器種・機能と関連の状況

上述のように推移の概要について整理してきたが、次に含まれる器種の機能等や関連遺跡等、ふれることのできなかつた点についていくつか指摘を行っておく。

まず含まれる器種について見ていくと、土器・陶磁器を通じて食膳で銘々器あるいは共用器等（註 8）として用いられることが多い碗・皿等の器形がほとんど含まれないという点が指摘される（註 9）。特に第 1～2b 段階にかけてはそうで、第 2c 段階でわずかに中国産磁器に含まれる。次いで第 3 段階でも碗等が含まれるが、やはり少数であることは指摘される。

またそれとともに土器や無釉焼締・黒褐釉陶器等ともに、壺・甕等といった保管・貯蔵等にかかわる器形が主であることが指摘される。土器類では壺類が大半で、それ以外の器種がほとんど見られないことも指摘される。またその土器類においては被熱したことが明瞭な破片は少なく、調理・煮炊の道具として加熱がともなう作業はあまり顕著ではなかつた可能性もあろう。

なお貿易陶磁器においては第 1～2c 段階にかけて合子類が継続して主体となっており、第 2c 段階に多様化する状況も認められている。合子の出土が多いことはこれまでいくつかの地点で言われていたところでもある（田畑 2014、奈良文化財研究所 2011 ほか）。なおバンテアイ・クデイ内においては、本稿で取り上げた前柱殿（C09）に近接した地点で遺物を採集した事例がある。本来的な地層から遊離した二次次的な状況ではあるが、白磁合子に金属片等の内容物が納められた状態で確認され、埋納等されたこと

が推測されるものがあって（荒樋・丸井・隅田 1999）、儀式・儀礼等の要素も伴っていた可能性がある。

さらに、第3段階においては貿易陶磁類が割合において増加し、多様化が認められる状況であった。当該の遺物が出土した付近にある前柱殿東南小堂（C10）について見ると、上座仏教に伴うテラス施設で葬送の場ともなっていたものである。またその規模や遺構の状況から、その造営等にあたってはより地域的な、ローカルな性格が読み取られると考えられる（宮本 2003・2010 ほか）。そうした状況のなかで、貿易陶磁類においては多様な産地のものが含まれ蔵骨器等に用いられており、それだけ当地域においてこれらの陶磁器類が流通し、よりローカルな人々によっても入手されうる状況であったことを示唆するといえよう。また背景として当地域が活況を迎えていたことをうかがわせるともいえるかもしれない（Thompson 2004 など）。

また、他遺跡においても資料が蓄積されてきているが、まず第1～2c 段階に近い年代のもの、ジャヤヴァルマン7世の時期あるいは近い時期の資料としてはプリア・カン、チャウ・サイ・テボダ等の出土資料が知られる（Chhan 2000, Qiao & Li 2000 ほか）。また先述の西トップ寺院のものなどもあげることができる。その中には無釉の土器類で玉縁状の口縁をもつ壺類が確認でき、本遺跡ともあわせて共通する器種であることが確認できる。またその一方で本遺跡では見られていない器種もあることが注意される点で、器種の把握等をすすめる必要があるだろう。また、アンコール遺跡ではポスト・アンコール期等も含めての調査が増えつつあるほか（Nhim 2021 ほか）、出土遺物と遺構の変遷をあわせて整理するような検討も見られる。例えばプラサット・スープラのテラス施設の調査（コウ・ベツト、中川 2006 ほか）や西トップ遺跡（奈良文化財研究所 2011）など、細かな変遷の検討等も行われてきており、今後対比作業も可能となつてこよう。

おわりに

以上のようにバンテアイ・クデイの前柱殿（C09）一帯の出土土器・陶磁器について段階を区分、それぞれの様相や変化の状況など基礎的な検討を行った。年代上では寺院が造営されたとみられる12世紀から13世紀を含み、それ以降ということになる。最後に簡単にまとめておくことにしよう。

まず第1～第3段階として記したが、なかでも第2c段階までから第3段階への変化が顕著であった。第1～2c段階では土器、クメール陶器の焼締陶器・黒褐釉陶器等、貿易陶磁器である中国産陶磁器から主に構成されており、第2c段階にむけ一部で多様化が見られるものの、概況としては継続性がうかがわれている。第3段階では在地のクメール陶器が消え、他の施釉陶器や陶磁器が加わっていく状況が確認された。これは遺構の変遷の上においても、今回取り上げたバンテアイ・クデイにおける地点が当初のアンコール期に造営された寺院の一角から上座仏教の施設等が営まれる地点・空間へと変質をとげていく時期にもあたり、土器・陶磁器でも大きく変化していく状況を見ることができるといえよう。

段階ごとの動向においては、第1～2c段階では土器・陶磁器類を通じて食膳、供膳具で用いられることの多い碗・皿等が非常に少なく、貯蔵・保管等に伴う形態が主体であることなどが認められた。個別の検討では土器類については壺等で継続して見られる器種があり、複数の法量が見られる。器種のバリエーション等が不明のところも多く、基本的な把握が今後も求められよう。器種構成の特色については必ずしも本地点特有の状況ではないようだが、今後他の遺跡等との比較もすすめ、その背景を検討していくことが求められよう。貿易陶磁器では合子が継続して見られ、その後他器種が加わること、産地においても龍泉窯産等の資料が加わっていくことなども確認された。

第3段階では土器や複数種の施釉陶器があるものの、前段階まで主体となっていたクメール陶器の黒褐釉陶器などがなく、大きな変化が認められた。貿易陶磁器では景德鎮産等に加え漳州窯産などが加わり、さらに他地域産のものも加わっている。蔵骨器資料が含まれることから壺型の器形等が多くを占めるため、器種等にかたよりのあるものの、第2c段階までと変質しながらも産地等が多様化していることが概況としていえよう。当初の寺院から変質をとげながら当地域において貿易陶磁器類が入手・利用されたことを示している。またそれは本地域を含んで広域的に陶磁器を含む物資が行き交う時期を迎えるとともに、アンコール地域がポスト・アンコール期に改めて活況を呈していたことと対応するものであろう。

本稿では遺跡内の一地点における基礎的な作業を行ったが、おおまかな変遷等を把握するにとどまっている。土器の製作技法などの要素や、焼締陶器・黒褐釉陶器などにおける器種の分類や変遷等あまりふれることができなかった点も多く、改めて検討していくことにしたい。またバンテアイ・クデイ内では今回取り上げた地点以外でも資料が得られてきている（上智大学1991～、丸井2005ほか）。他地点もあわせ同様の作業をすすめ、比較等をすすめていくことで、地点・地域差あるいは階層差など、遺物群の特質を明らかにしていくとともに、機能的な側面や背景となる生活様式、社会的な動向とのかかわりなど、より明らかにしていくことができるであろう。

謝辞

本稿は前柱殿(C09)一帯における調査報告作成に伴う検討をもとに作成したもので、報告の詳細については（上智大学アンコール遺跡国際調査団2022）を参照されたい。またその調査や整理作業等の際には上智大学アジア人材養成研究センターにご配慮をいただき、関係の多くの機関や方々よりご助力やご教示等をいただいている。個別ではお名前をあげないが感謝申し上げたい。

(註)

1) 遺構の名称については調査団で用いてきた名称にインベントリー番号を加えて示す。インベントリーについては上智大学アンコール遺跡国際調査団1997を参照。

2) 本遺跡資料も含む貿易陶磁をめぐって時期区分や他陶磁器等との検討も行われている(田畑 2014)。本稿では対象とする地点の遺構・遺物の状況から区分や記述を行っている。

3) 土器や陶磁器の数量的な検討については破片、個体識別、口縁部あるいは底部による計測、重量等いくつかの手法があるが、状況の異なる各地点の状況を通してみるため、ここでは把握しやすい破片数で示した。

4) 土器については先史時代からもあわせ概況をみるものがある(Stark 2003)。近年プレ・アンコール期も含め検討例が増加しつつあり、型式変遷等の把握も可能となつてこよう。

5) 本地点では灰釉陶器が含まれ、先行する状況を反映している可能性もあるが、時期の状況は現状では不詳である。今後バンテアイ・クデイ建造に先行する時期の包含層についても明確な状況で確認される可能性はあり、今後の課題である。

6) 例えばポニャ・ルー遺跡のポスト・アンコール期の状況においては、景德鎮系に加えて福建系が現れる状況が確認されているが、その増加が18世紀以降とみられている(佐藤 2010 など)。

7) 本稿で第3段階とした時期については徐々に例が増加してきており、近年の状況についてはニム・ソティーヴンによるものなどを参照(Nhim 2021)。

8) 食膳具の「銘々器」等の呼称については佐原によるものをもとにした(佐原 1983)。

9) たとえば本稿で扱った時期に関連する資料としては周達観による記述等が想起される(周達観著・和田訳注 1989)。食器についてはあまり言及がない点について周達観の記述もふまえて指摘がおこなわれているが(田畑 2014)、食膳の状況という点では課題として残されているといえよう。

引用・参考文献

荒樋久雄・丸井雅子・隅田登紀 1999 「バンテアイ・クデイ側柱殿北表面採集調査報告」『カンボジアの文化復興』(16) : 180-195.

青柳洋治・佐々木達夫編 2007 『タニ窯跡の研究』、雄山閣出版.

コウ・ベツト、中川武 2006 「アンコール・トムにおけるプラサート・スープレテラスの構築年代の編年と変遷過程に関する考察 クメール建築におけるテラスに関する研究その1」『日本建築学会計画系論文集』(608) : 157-164.

佐藤由似 2010 「ポスト・アンコール期における陶磁器の流通に関する考察」『世界に輸出された肥前陶磁 —九州近世陶磁学会20周年記念』、九州近世陶磁学会 : 204-111.

佐原眞 1983 「食器における共用器・銘々器・属人器」『文化財論叢—奈良国立文化財研究所創立三十周年記念論文集』、奈良国立文化財研究所 : 1143-1162.

- 周達観著、和田久徳訳注 1989『真臘風土記 アンコール期のカンボジア』、平凡社。
- 上智大学アジア文化研究所/アジア人材養成研究センター 1991～2021『カンボジアの文化復興』5～32。
- 上智大学アンコール遺跡国際調査団 1997『バンテアイ・クデイ建物一覧(案)』。
- 上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022『バンテアイ・クデイ I』。
- 杉山洋 2005「クメール陶器研究史」『タニ窯跡 A6 号窯発掘調査報告』: 71-84。
- 田畑幸嗣 2008『クメール陶器の研究』、雄山閣出版。
- 田畑幸嗣 2014「カンボジア、アンコール時代からポスト・アンコール時代にかけての貿易陶磁編年試案」『新田栄治先生退職記念 東南アジア考古学論集』: 79-90。
- 田畑幸嗣 2019「祭儀の器としてのクメール陶器」『アジア仏教美術論集東南アジア』、中央公論美術出版: 495-530。
- 奈良文化財研究所 2005『タニ窯跡 A6 号窯発掘調査報告』、奈良文化財研究所学報 73 冊。
- 奈良文化財研究所 2011『西トップ遺跡調査報告』、奈良文化財研究所学報 88 冊
- 松尾信裕・宮本康治 2000「出土遺物の語ること」『アンコール遺跡の考古学』、連合出版: 177-194。
- 丸井雅子 2005「仏像埋納坑を読む」『アンコール・ワットを読む』、連合出版: 155-200
- 丸井雅子・ニム・ソテイーブン・宮本康治 2021「バンテアイ・クデイ第 60 次発掘調査概報」『カンボジアの文化復興』(31): 149-166。
- 宮本康治 2003「アンコール期以後のバンテアイ・クデイ」『アンコール遺跡を科学する』(10): 37-51。
- 宮本康治 2010「アンコールは何を継承してきたのか」『グローバル／ローカル: 文化遺産』、上智大学出版・ぎょうせい: 135-160。
- 宮本康治 2022「土器・陶磁器類」『バンテアイ・クデイ I』、上智大学アンコール遺跡国際調査団: 187-209。
- Chhan Chamroeun. 2000. "The Ceramics Collection at Preah Khan Temple, Angkor." *UDAYA, Journal of Khmer Studies* 1: 295-303.
- Groslier, Bernard Philippe. 1981. "Introduction to the Ceramics Wares of Angkor." In D. Stock (ed.), *Khmer Ceramics: 9th-14th Century*: 9-39. Singapore: Oriental Ceramic Society.
- Nhim Sotheavin. 2021. "Continuity of Angkorian Sacred Space: An Example from Banteay Kdei Archaeological Excavation." *Renaissance Culturelle du Cambodge* 31: 85-106.
- Qiao Liang & Li Yu-Qun. 2000. "Report of Archaeological Research at Chausay Tevoda Temple, Angkor." *UDAYA, Journal of Khmer Studies* 1: 255-294.
- Rooney, Dawn. 1984. *Khmer Ceramics*. Singapore: Oxford University Press.
- Stark, Miriam. 2003. "The Chronology, Technology, and Contexts of Earthenware in Cambodia." In John Miksic (ed.), *The Earthenware in Southeast Asia*: 208-229. Singapore University Press.
- Thompson, Ashley. 2004. "Pilgrims to Angkor: A Buddhist Cosmopolis in Southeast Asia."

挿図出典等

図 1～4 については（上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022）第 2・3 章の図 19・20、51・55 をもとに加筆・修正して作成。

図 5～8 のそれぞれの遺物については（上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022）第 4 章の図 77～96 より加筆・修正等して構成。（ ）内の数字は原報告の番号を示している。

図 9 は筆者作成。

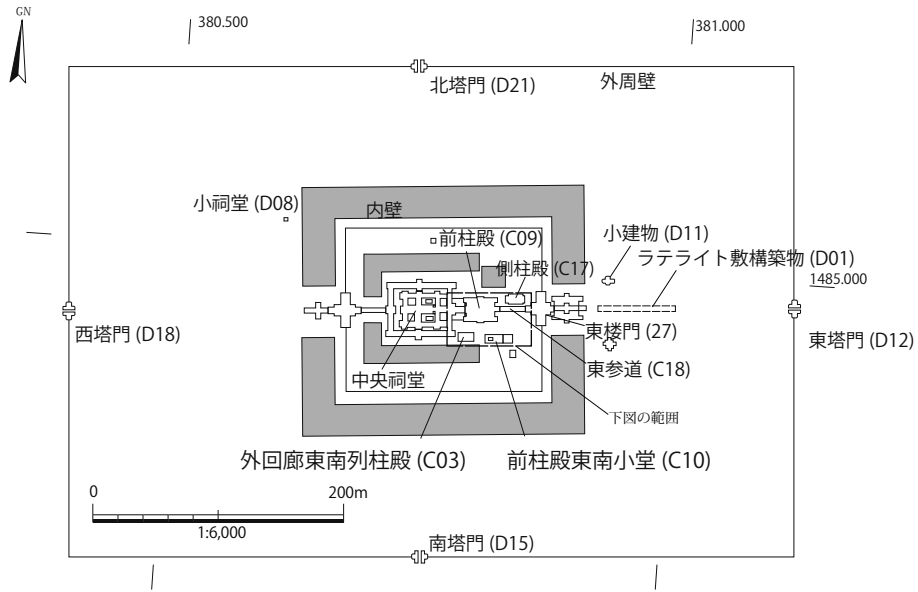


図1 バンテアイ・クデイの平面配置と調査地

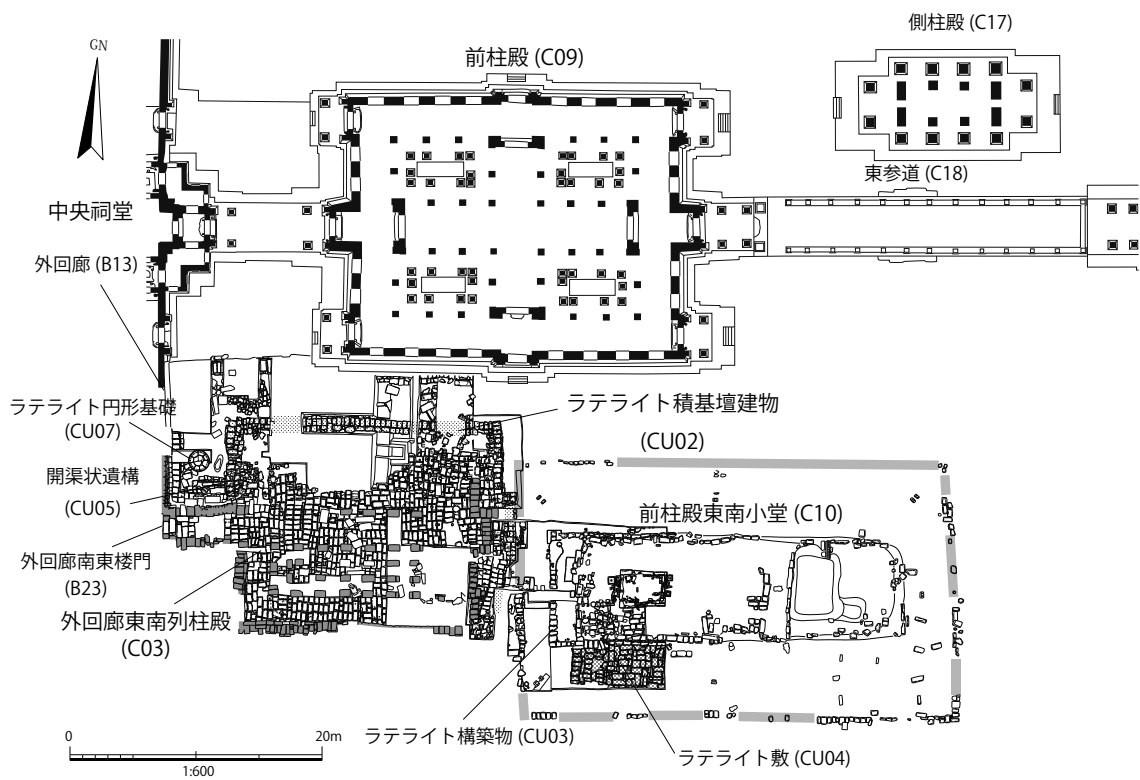
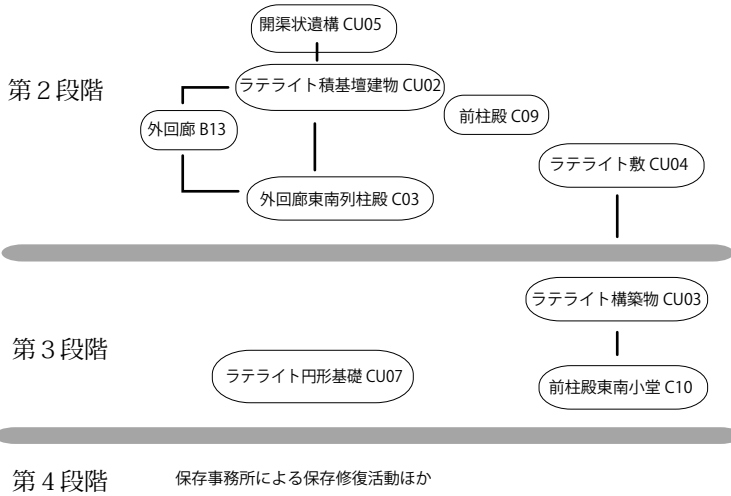


図2 前柱殿 (C09) 一帯での検出遺構

<遺構からの段階>

第1段階

第15次調査第11層、
第13・23次第10層など



<遺物での段階>

第1段階

第2a段階

第2b段階

第2c段階

第3段階

図3 遺構と遺物からの段階区分

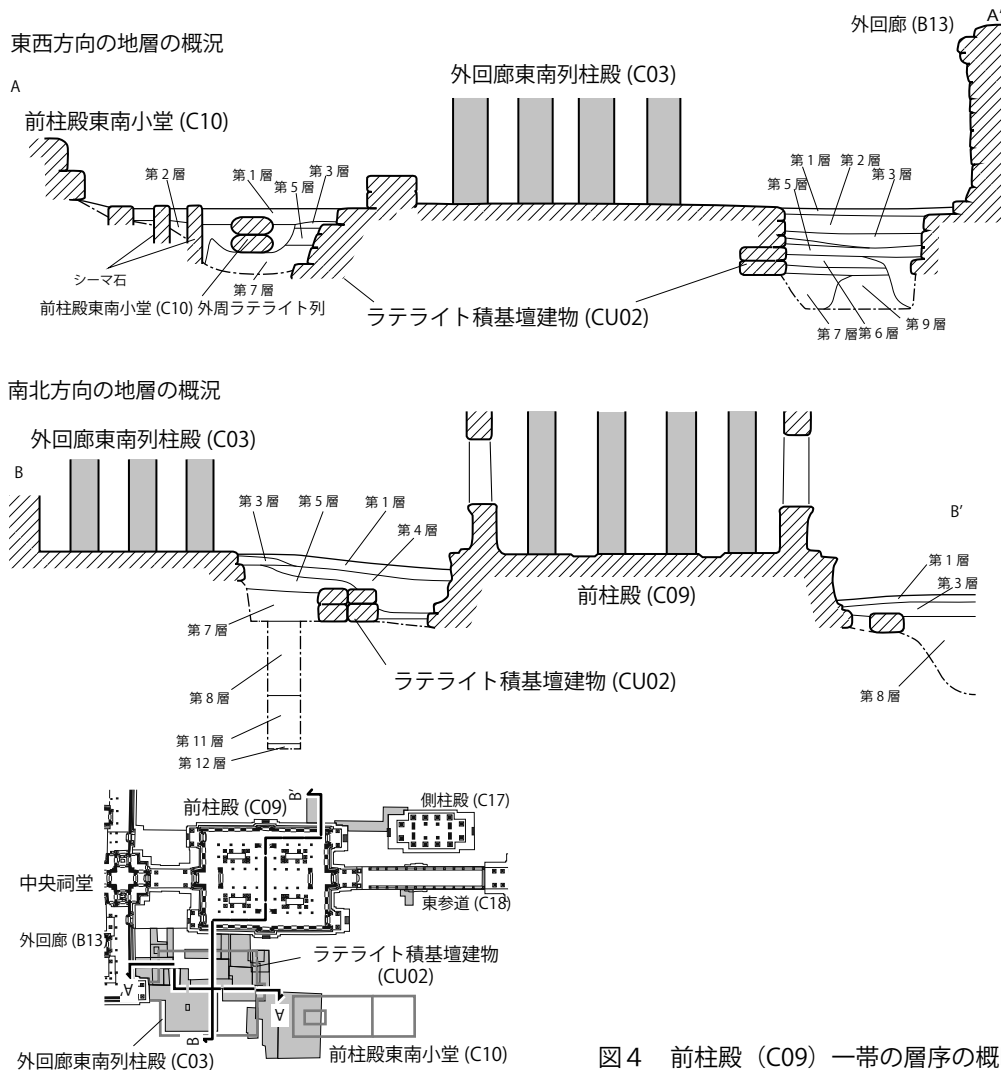
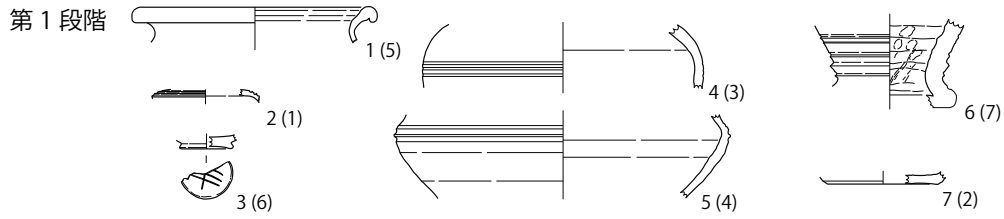
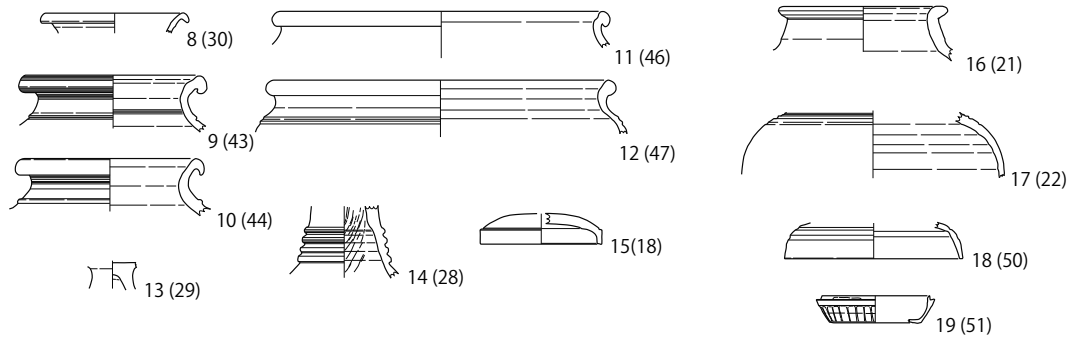


図4 前柱殿 (C09) 一帯の層序の概略



第2a段階



第2b段階

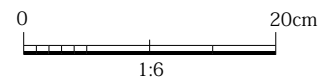
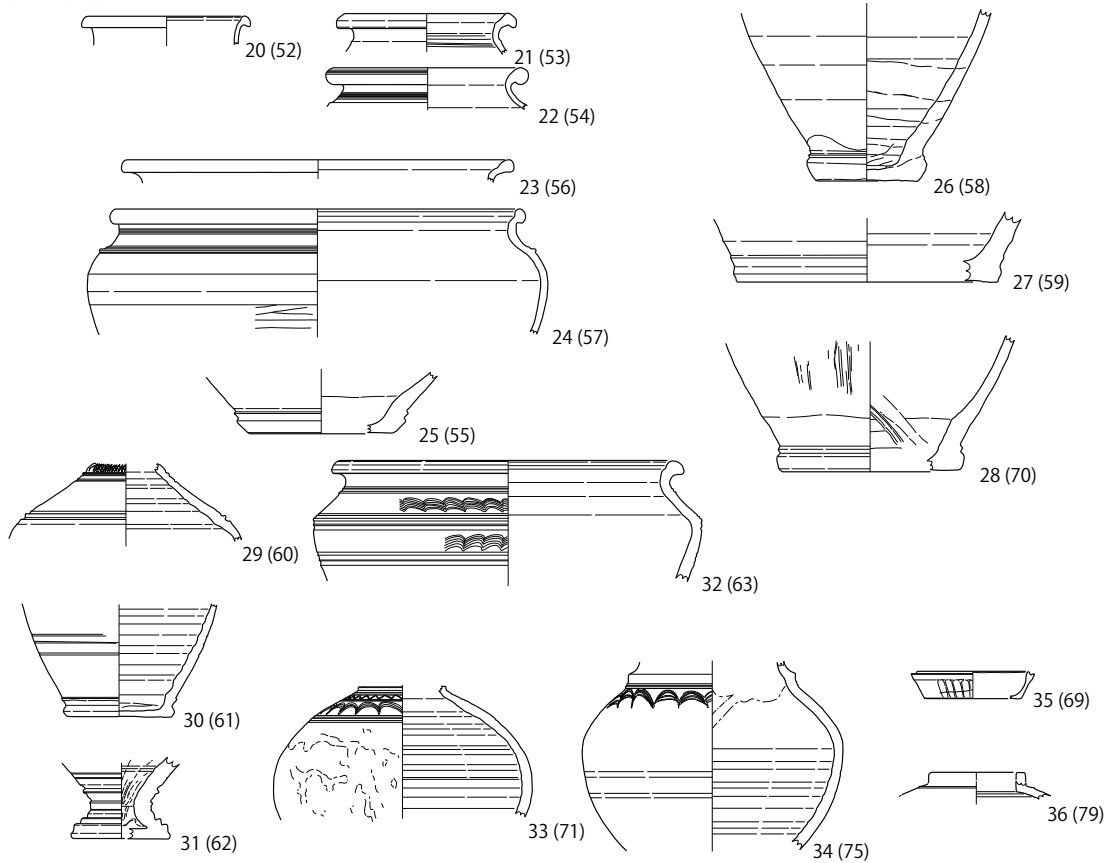


図5 各段階の土器・陶磁器 (1) 第1～2b段階

第2c段階

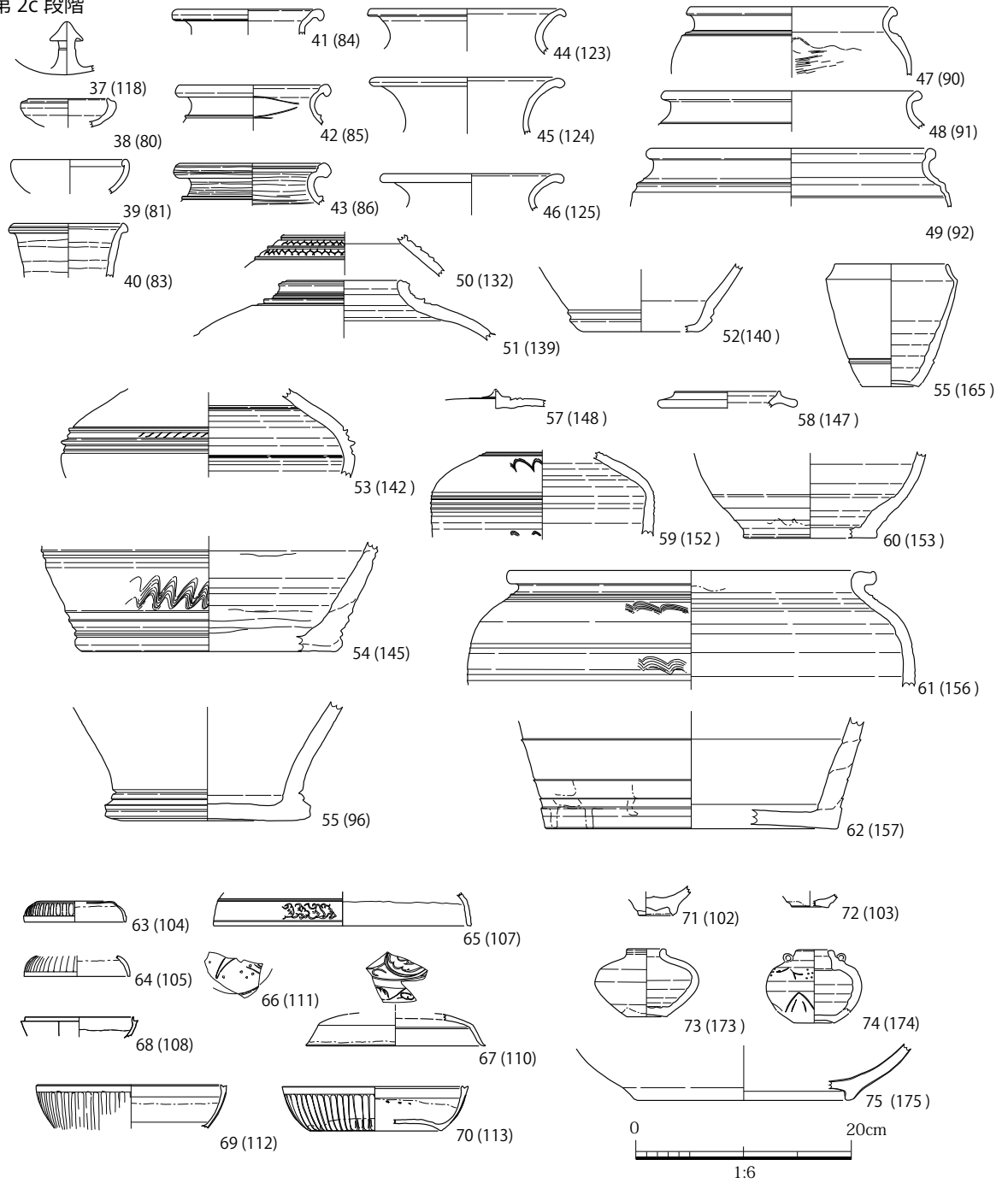


図6 各段階の土器・陶磁器（2） 第2c段階

第3段階

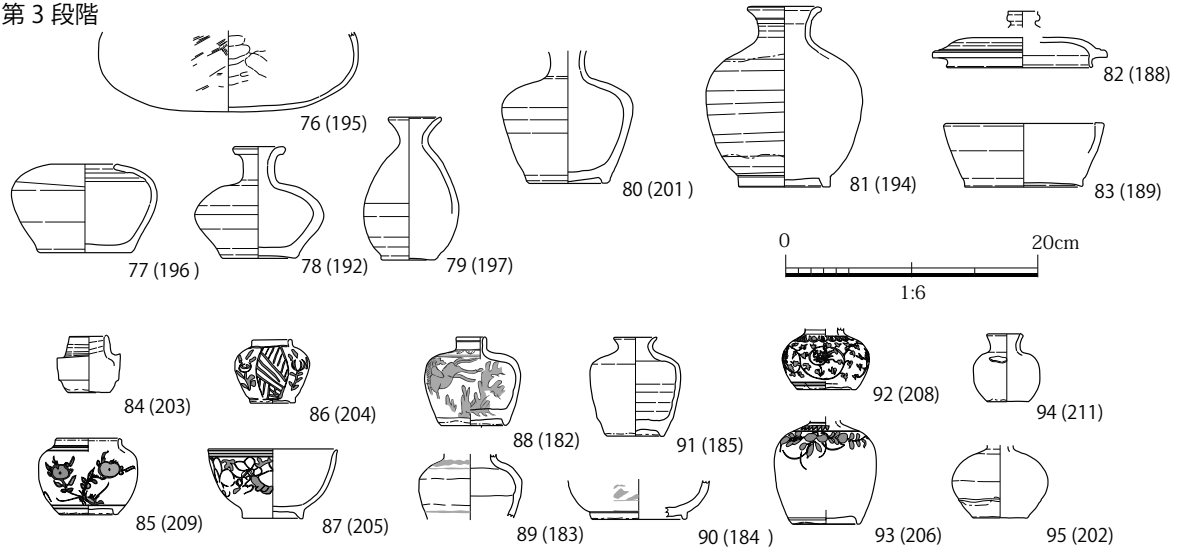


図7 各段階の土器・陶磁器 (3) 第3段階

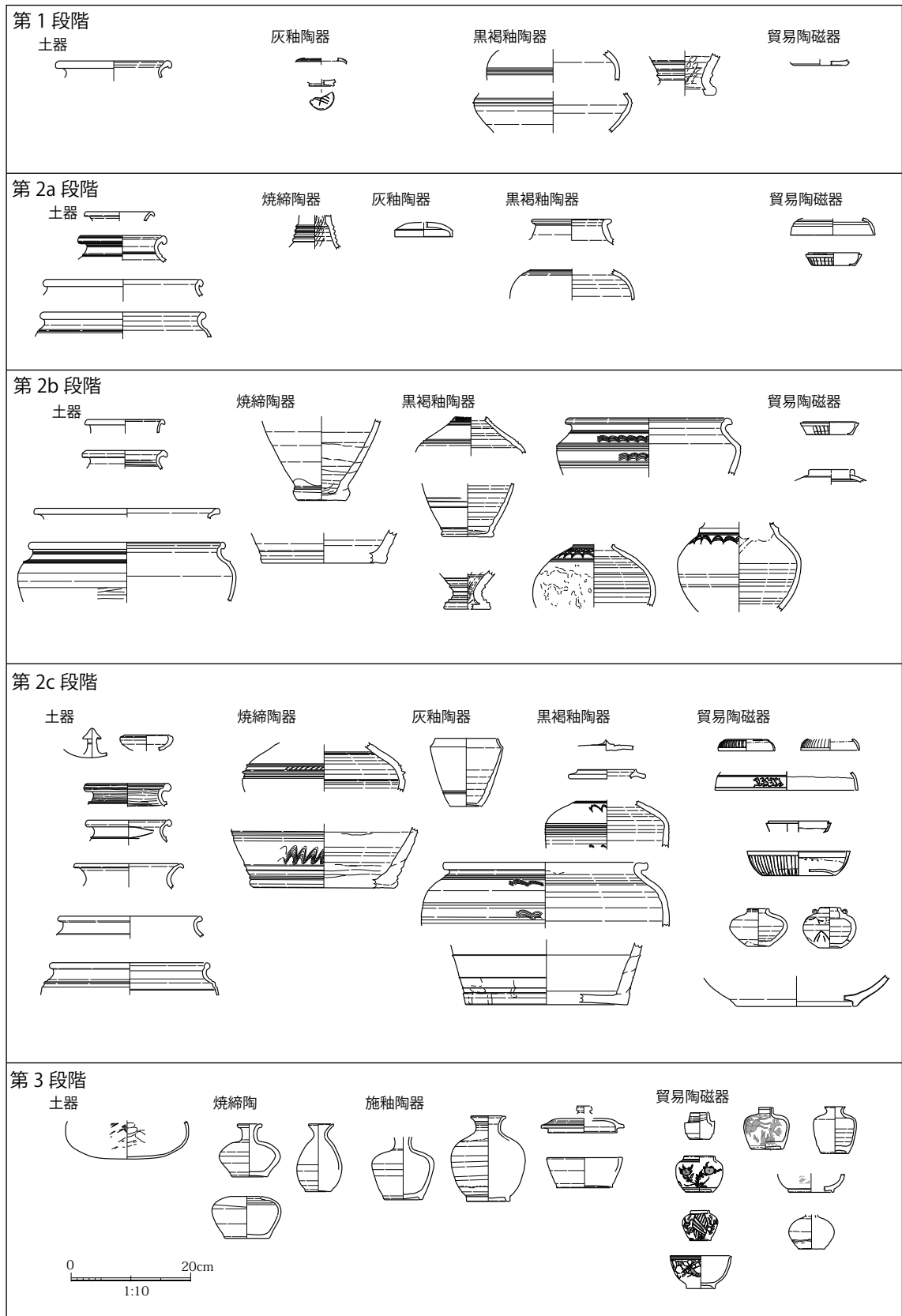


図8 前柱殿（C09）付近での土器・陶磁器の推移

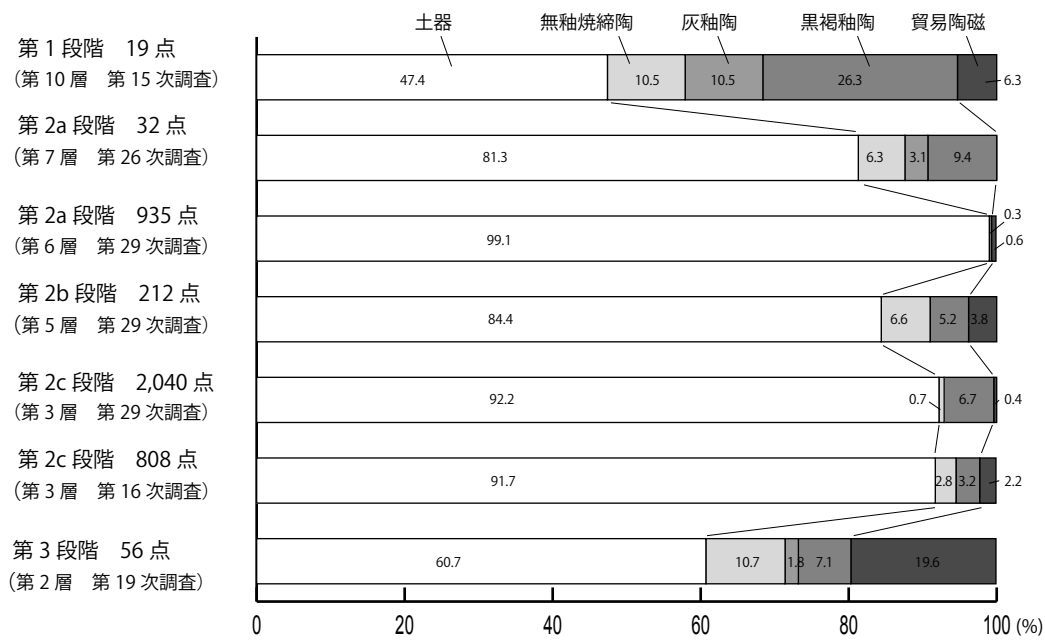


図9 土器・陶磁器の数量比

研 究 ノ ー ト

王の不当人事介入に敢然と抗議 —元宗務官サーダーシヴァは前国王を告発—

上智大学アジア人材養成研究センター
所長 石澤良昭 (教授)

1. スドック・カク・トム (Sdôk Kâk Thom) 碑刻文と博物館の火事騒ぎ

この碑刻文は、スールヤ・ヴァルマン 1 世 (1002～1050 年) 治下で在職し、王の即位式を担当してきた元世襲宗務家系継承者サーダーシヴァ (Sadāśiva) が、菩提寺のストック・カク・トム寺院へ奉納した石柱碑刻文である。筆者の元宗務官サーダーシヴァは、スーリヤヴァルマン 1 世 (1002～1050) 治下で、宗務系官職から外され、閑職に任命されてきた。それ故にこのサーダーシヴァはこの前国王が逝去するのを待って、2 年かかって自分は、伝統ある世襲家系の正当な継承者であり、その歴史的背景を明らかにすると同時に、前王を告発する慟哭の書でもある。(註 1)

このストック・カク・トム碑刻文 (K. 235) は、元世襲宗務家系を引き継いできた元宗務官サーダーシヴァが、1052 年に一族が眠る菩提寺ストック・カク・トムに、その一族の栄光を石柱碑文に刻み、奉納された長文の碑刻文である。その碑文はサンスクリット語および古クメール語で書かれている。ストック・カク・トム寺院は、シソフォン市の北 25 キロの所に在り、現在はちょうどタイ国との国境線のタイ国側に建立されている、アランヤ・プラテート国境検問所からタイ国内に入り、国境線に沿って数キロのところにある中型の石造伽藍造りの寺院である。ここは、アンコール王朝時代にはカンボジア領であった。

この高官サーダーシヴァは、約 250 年前から続く家系の世襲宗務官を継承する当主であり、その正当な継承者にあたる。この世襲宗務家系は 802 年にジャヤヴァルマン 2 世治下 (802 - 834) で高位バラモンのヒランヤ・ダーマ師から「王の即位」の儀式を執り行う世襲の執行官家系に指名され、それ以来 12 代約 250 年にわたり、歴代の王の即位式をこの世襲家系宗務官たちが執り行ってきた。ところが、当時のスーリヤヴァルマン 1 世 (1002 - 1050) の即位では別の宗務高官がこの即位式を執り行ったのであった。

それに加えて、サーダーシヴァは、スーリヤヴァルマン 1 世の治世下では、本来の世襲宗務官の役職から外され、普通の高官に格下げされ、別の職務を命じられ、さらにスーリヤヴァルマン 1 世の娘と結婚させられていたのである。しかし、時の王の命令により閑職に降格され、疎んじられてきた。王の命令には従わざるを得なかった。

しかしながら、その「デヴァラージャ (神なる王) で現人神」であるこのスーリヤヴァルマン 1 世王には、逆らうことが許されず、王の命令とその指示に従い、恭順の意を表し従ってきたのであった。

1050 年にスーリヤヴァルマン 1 世が逝去し、その縛りがなくなり、自由の身分となったサーダーシヴァは、これまでの不本意な人事のことをご先祖様たちが眠る菩提寺に赴き、その顛末を報告するに及んだのが、この碑文であった。この碑文の製作年は、前

王が逝去した2年後の1052年であった。

サーダーシヴァは、こうした250年前からの栄光一族の来歴を語り、世襲家系なる存在を説明し、伝えられているこの時点(1052年)までの13代にわたる王の来歴を詳しく作成して書き残し、その主張の根拠を、再確認すると同時にその顛末を報告したのであった。サーダーシヴァの作成したこの碑刻文の年表の史料は、はからずも1940年代当時まだ不明のままであった13代にわたる王の正確な在位年代を初めて識るところとなり、歴史構築の作業中のフランス人歴史学者たちを喜ばせたのであった。

ところが、ここで予期しない火事騒ぎが起きたのであった。タイ王室は、アンコール王朝初期の唯一の史実を記載したこの重要な碑文を、特別文化財に登録し、専門家にしか公開せず、バンコック国立博物館内の特別室に鍵をかけ、保存されていたのであった。

ところが、この特別室の近くの展示場が火事となり、その結果、この碑刻文石柱が持ち出され、一時行方不明と報じられていた。

その碑文の行方を心配していたバンコック在住の日本人報道官カメラマン宇崎真氏から、この最重要碑刻文石柱が無事であることが伝えられ、報告され、わざわざ保存展示中のプラチンブリ博物館まで出かけ、確認いただいたのである。本誌(『カンボジア文化復興』34号)に掲載の報道記録を、ここに収録し、ご高覧いただきたい(本誌に掲載の宇崎氏報告 pp. 139 参照ください)。

2. スドック・カク・トム碑刻文にもとづくアンコー津王朝の新年表

この碑文は、1901年に最初にE.エイモニエが、現地の菩提寺スドック・カク・トムで発見し、報告している。エイモニエは、フランス保護国下の植民地官吏職にあった。彼は、アンコール王朝の歴史に興味を抱き、19世紀末から現在の東北タイ(イサーン)地方の関係遺跡の現場に出かけ、詳しく踏査し記録し、現場に残された碑文史料を拓本に撮り、フランス本国へ送付していた。しかし、残念ながらE・エイモニエには、古クメール語やサンスクリット語を解する語学力が十分ではなかった。それ故にエイモニエは本国フランスの梵語・梵文学者たちの求めに応じて、各地の遺跡の壁や石柱に彫られていた碑文を拓本に撮り、送付していた。エイモニエは1898年の段階で380個の拓本を、1915年までに480個の拓本を本国の梵語学者の許に送達していた。

さらにエイモニエは19世紀末に、その当時タイ領であった現在のカンボジア西北部3州地域が(1907年にカンボジアへ返還された)を中心に、内陸部各地の現地の遺跡を調査し、その貴重な踏査記録が3冊にまとめられ、刊行された。現在ではカンボジア研究者の必読書となっている(註2)。

次に、このスドック・カク・トム碑文は古クメール語とサンスクリット語の両語で刻まれている。そのサンスクリット語部分を最初に解説し、解題したのは梵文語学者のL.フィノー(フランス極東学院長)であり、1915年に『フランス極東学院報(BEFEO)』に発表した。この時点(1915年)において、古クメール語の解説が待たれていた(Finot 1915: 1-135)。

1930年代後半に若い言語学の天才といわれる学者G.セデスが古クメール語碑文の解説に成功した。そのセデスは16歳の時に既に初論文を投稿していた(カンボジアのシャンポリオンと言われている)(註3)そして、このスドック・カク・トム碑文が1943年に、碑文原本の古クメール語とサンスクリット語両語のテキスト付でそのフランス語

訳稿が、フランス極東学院から学術研究報告書として刊行された（註1参照）。

この碑文は、その掲載内容からそれまで不明であったアンコール王朝初期の王朝の編年を初めて伝える重要な碑刻文史料である。それ故に、タイ王宮からは篤く丁重な保護を受け、これまで国立博物館内の特別室に別置され、非公開とされてきた。そして、今回の火事騒ぎとなったのであった。

この碑文は前述のとおり、サンスクリット語と古クメール語の両語で記載されており、これまで不明であったアンコール王朝創設期の歴史的展開を碑文に記載し、多少の誇張もあるが、8世紀から1050年頃までに実在した王名とその在位年代を詳しく記載している。そこには、802年から1050年までに約250年にわたる14名の王たちが登位し、その即位式等の諸儀礼を執り行ってきた史実を伝えている。最も重要な即位式に802年からの特別の王朝祭儀担当の世襲家族がどのようにして誕生したか、その関わりを詳しく記述し、祭儀執行の独占権が明記されている。

この碑文の発見により、何よりの朗報は、これまで不明で断片的であった14代続いた王の在位年代がはっきり世襲家系の宗務官たちが明記され、それに建立した寺院を位置づけ、この碑刻文の報告によりアンコール王朝初期（802年～1050年まで）の王たちの活動記録が明らかとなった。その中には、「デヴァラーシャ信仰（神なる王、現人神）」の成立過程やプノンクレーン高丘内の最初の小さな祭儀場のロンチェンのことが詳解されており、立国に向けて彷彿とした活動記録である。そこには、14名の王たちは、王位継承権を目指し、他の王位を目指す競争者たちと争い、最強者が王位に就くのである。覇権を争いながら次々と登場し、王権を継承し、その政治展開を現人神として執行し、そうした政治背景を語る最も重要な碑刻文の一つである。

カンボジアの王位獲得は次のように決まるのである。スーリヤヴァルマン1世は中部カンボジアのコンボン・スヴァイのプリア・カーン出身で、王位を目指し、名乗りを上げた。1000年ごろにはすでにウダヤーヴァルマン1世（1001～1002）が王位に就き、次にジャヤヴィーラヴァルマン1世（1002～1010頃）が王位に就いていたが、スールヤヴァルマン1世（1002～1050）がこの2人の王とその残党を打ちやぶり、公式王位（1002～1050）が遡って決まるのである。

3. 1431年に崩壊したアンコール王朝のその後から

アンコール王朝の遺跡とその研究は、16世紀に西欧からカトリック宣教活動のため、来航した宣教師たちは、滅亡後の現地に捨て置かれた破壊跡や部分的に残っている水路跡などが、ポルトガル人とイスパニア人の修道士たちから報告されている。特に、16世紀当時の旧アンコール都城地域に出かけた報告が伝えられている。そこではアンコール王朝時代の水利都市が部分的ながら機能していた史実が報告されている（Groslier 1958）。特に、来航者たちの関心を集めたのは、誰がこのアンコール王朝を建設をしていたかという疑問が呈せられていたことが記録されている。というのは、ポルトガル領インド政庁（ゴア地方）の記録書記官ディオゴット・コート（Diogoto de Couto（1543年頃-1616年））が、現地アンコール地方に住んでいた修道士たちから状況を聴いて詳しく報告している。「昔この地方（アンコール）は灌漑網のおかげで栄えていた」と伝え、その状況が現在の遺跡と合致する部分である。この16世紀のカンボジア現地報告がB. Ph. グロリエの1979年の論文（後述）作成のきっかけとなったのであることが判明している。

さらに今から約 260 年前の 1860 年にフランス人博物学者アンリ・ムオがアンコール遺跡群を踏査し、「大王朝が造営した」という仮説が予告された (Mouhot 1974)。カンボジアは 8163 年にフランス保護領となり、1887 年に仏領インドシナ連保に組み込まれ、1901 年にフランス極東学院の設立 (1901 年) につながる。1907 年にタイから西北部 3 州が返還され、アンコール遺跡の保存修復・復元・研究がはじまるのである。(註 4)

4. スドック・カック・トム寺院とは

スドック・カック・トム寺院は、その広さが、42 メートル×36 メートルの回廊に囲まれた小中型の寺院であり、東が入口正面である。この寺院内において発見された碑刻文は、高さ 1.5 メートルの高さの石柱四面 (宇崎真氏写真を参照) に刻まれており、A 面は 60 行サンスクリット語文、B 面は 77 行のサンスクリット語文、C 面は 55 行のサンスクリット語と 24 行の古クメール語碑文、さらに D 面では 4 行のサンスクリット文と 117 行の古クメール語碑文が記載されている。

世襲の宗務官サーダーシヴァは 13 代までの王たちの存在を明記して、以下、その正統な論拠を示したのであった。

【参考】元宗務官サーダーシヴァによるアンコール王朝初期の王の年譜

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
ジャヤヴァルマン 8 世	インドラヴァルマン 2 世	ジャヤヴァルマン 7 世	トリブヴァナーディティヤヴァルマン	ヤショヴァルマン 2 世	スールヤヴァルマン 2 世	ダラニンドラヴァルマン 1 世	ジャヤヴァルマン 6 世	ハルシヤヴァルマン 3 世	ウダヤーデーテヤヴァルマン 2 世	スールヤヴァルマン 1 世	ジャヤヴァーイーラヴァルマン 1 世	ウダヤーデーテヤヴァルマン 1 世	ラージェンドラヴァルマン 2 世	ハルシヤヴァルマン 2 世	ジャヤヴァルマン 4 世	イーシャーナヴァルマン 2 世	ハルシヤヴァルマン 1 世	ヤショヴァルマン 1 世	インドラヴァルマン 1 世	ジャヤヴァルマン 3 世	ジャヤヴァルマン 2 世	王統
1243 1295	1218 頃 1243	1181 頃 1177	1165 頃 1177	1150 頃 1165	1113 頃 1150 頃	1107 頃 1113	1080 頃 1107	1066 頃 1080	1050 頃 1066 頃	1002 頃 1050	1002 頃 1015 頃	1001 頃 1002	944 頃 968	941 頃 944	928 頃 941 頃	922 頃 928	910 頃 922	889 頃 910 頃	877 頃 889	834 頃 877	802 頃 834	治世年

5. アンコール地方にはインドと同じカンボジア版聖山・聖河・聖都があった

カンボジアでは雨水によって通常の農耕が順調に進み、乾季にはバライ（貯水池）に貯めた水により、2回目の耕作が実施されていた。だから、短期間のうちに、雨季の場合でも、寺院建設の作業員たちは畑仕事のために仕事を休むことをせずに、寺院造営に専念できた。だから、大寺院が幾つも短期間のうちに造営されたのであった。この2期作による粃米などは、王宮関係者、大寺院の修復や寺男と寺女、王の護衛兵が軍隊の兵士、王宮内の召使や手伝いと人たちまで支給を受けていたと推察される。たくさんの人達に富裕（食糧）が配給されていた。こうした農耕作業は宗教儀礼上からの説明では、神々（と王）と村人たちが宇宙世界を攪拌し、甘露（＝収穫物）を見つけ出したという主旨が碑刻文上に載っている。それを上品な説明文では、王と村人が天界から至福を引き出そうと願うものであったという。各地に在る人工の貯水池（バライ）とは「大乳海のごとく喜びをもたらす池」であり、「その腕（＝分流）を通じて乳海自ら邪魔な水を取り除き、甘露の湖に変え」と碑文（K. 826）は述べている。インドの乳海攪拌の神話が、カンボジア版に脚色され、蛇神（＝ナーガ）が本来の水の神であり、往時の王に仕える担当者たちが、村人や自分たちの水信仰を乳海攪拌の神話を浮彫にした絵図に託して、守護精霊も併せて折りこみ、篤信による農業耕作を浮彫絵図を描いていたのである。これこそ、「フォーク・ヒンドゥイズム（カンボジア版ヒンドゥ教）版」であった。

当時のカンボジアの人達は、このインド神話でいう神々が住む「須弥山」がアンコール地方に実在する「山」プノン・クレーン高丘と考えられていた。アンコール都城の北方に見えるプノン・クレーン丘陵（アンコールの北約 40 キロ、最高標高は 478 メートル）は、その「須弥山」になぞらえられた高丘であり、実際にはアンコールの大地に豊かな実りを約束する水源地でもあった。数万年かかって形成されたプノン・クレーン高丘からトンレ・サーブ湖岸までの大扇状地。例えば、秀麗な彫刻で有名なバンテアイ・スレイ寺院が海拔約 54 メートル、アンコール・ワットが海拔 37 メートルである。その直線距離で 31 キロ離れている。トンレ・サーブ湖は海拔 3 メートル、その緩やかな傾斜地に気付いた当時の人達は、上方に土砂の堤防で囲った貯水池（バライ）を造り、雨季の雨水を溜め、乾季になってその水を使用して 2 期作をやっていた。インディカの粃米は王室関係者や寺院の作業員たちに支給されて、雨季に畑作を手伝わぬで寺院造営作業を続けていた。だから、結果として約 32 年かかって大寺院アンコール・ワットが造営され、65m（8 階建てに相当）の高祠堂大アンコール王朝の栄華の証しであった。当時のアンコール地方の総人口は約 75 万人（フランス・フィガロ紙説）であったという。

インドのヒマラヤ霊峰と「聖河ガンガー」と同じ自然の 2 つの大装置と大道具が、それが、プノン・クレーン丘陵とシュムリアップ川にあたると碑文上に明記している。当時カンボジアの人達は、この丘陵「聖山」から続く、この広大な扇状地上のアンコール地方に大都城を次々と造営したのであった。同時に村人たちはその広大な傾斜地を利用して 2 期作の集約農業を実施していたのであった。

このアンコールの大地こそは、選ばれた神聖な特別の地域であり、約 600 年にわたって、諸王により次々と大都城が築かれ、水路が建設され、年に 2 回の収穫を得る集約農業をやっていたのであった。こうした史実こそを現地アンコールで実見した 1296 年の周達観の報告は、その後編纂された『明史』にカンボジアが「富貴真臘」という記載となったのであった。

6. デーヴァラージャ信仰と祭儀執行独占家系の成立過程考察 —新政治勢力と世襲宗教集団はヒンドゥー教と仏教の土着化(フォク・センドイー・イズム)—

紀元前後頃からカンボジアをはじめ東南アジア各地では、インド方面からヒンドゥー教と仏教の宗教家たちが来航し、地域住人に伝達された。またインド人商人たちは香辛料を求め来訪し、定住と通婚を通じ、カンボジアにはヒンドゥー教と仏教の諸儀礼が伝えられている。そして、たくさんの宗教や文物に関する断片が、各地に居住するカンボジア人の日常の生活文化を強く刺激し、彼ら有感奮させ、カンボジア版的発展を促す

にがり「苦渋」的役割を果たし、地域の土着儀礼を深化させてきた。例えば、インドから持ち込まれたヒンドゥー教や仏教等は、土着の諸精霊信仰を掘り起こし、儀礼を部分的に借用し、土着文化に新たな理論武装を与えていた。それら外来の文化要素の断片は、パッチ・ワークのごとく、各地において独自の解釈と実践をもって再生産され、活用され、地方化され、似ても似つかない形で新信仰が形成されていた。

とはいえ、各地の大小の政治勢力の「長」たちには、身分的な保証がないために、生き残りと存続をかけて、自分たちが神がかり的存在であることを主張し、その政治的立場を強化するために、ヒンドゥー教や仏教の一部の儀礼を借りて「Devarāja (デーヴァラージャ)」を「神々と人間たちの王」として演出していた。それに加えて、王は外来のヒンドゥー教の儀礼を借りて地上におけるインドラ神(雷霆神)を名乗り、デーヴァラージャとは「神々(と人間たち)の王」であることを宣言し、君臨してきたのである。

このデーヴァラージャ(Devarāja)信仰は、派手で人目を引く神秘的できらびやかさを祭儀を前面に掲げ、文化的に未成熟な村人たちを諸儀礼により圧倒し、神がかり的王の存在そのものを可視化してきた。世襲家系の一族が過剰で派手な祭儀を執り行いながら、結果として一連の諸祭祀は、王自身が「神なる王(現人神)」を演出する一つの道具立でもあった。それが結果として王の神格化そのものを深め、「神々(として)の王」に結びついていったようであった。

碑文では、「デーヴァラージャ(Devarāja=神々(と人間)の王の意味)」信仰を、サンスクリット語でいかにも業々しく表記し、神格化を深めている。外から見たところ通常のヒンドゥー教・仏教の神仏そのものにも見えるが、本来的には古クメール語碑文でいう土着の太守護精霊「Kamraten Jagat Ta Rāja(カムラテン・ジャガット・タ・ラージャ、以下「KJTR」と略す)」をも取り込み、それは重層した独特の祭祀でもあった。デーヴァラージャ問題の研究は、これまでに多くの研究者が専門分野を超えて議論してきた。アンコール時代の社会と宗教を識る研究題材でもある。そもそも「王」というのは、地上におけるインドラ神(雷神)の生まれ変わりであるといわれてきた。何故なら神は隱身を常とするため、人間の姿(王)となってこの世に出現するデーヴァラージャ(Devarāja)の語義は「神々(と人間たち)の王」を意味する「現人神」と言われてきた。この現人神が王であり、この世に現れた「神」として礼拝するのである。デーヴァラージャ信仰の前兆とその萌芽については、カンボジア人民族学者アン・チュリアン博士は、上座仏教恒例の砂山信仰は、精霊信仰の「粃米の山造り」が、到来した仏教と渾融し、重層したものであって、もともと仏教の儀礼ではないことを看破し、それを立証した。

プノンペン国立博物館には、インドの犁を携えたバララーマ神像が展示されており、当時、インドの農具でもってインディカ米の粃米を収穫していた。インド方面から来た

諸神仏は、各地の土着の精霊信仰と並列して礼拝され、時間と空間を限定して部分的に国風化され、それら神仏は焼き直しされて、カンボジア版ヒンドゥー教・仏教としての形を借りながら、新しい形でもって現地に定着し、古代カンボジアの新しい精神文化の形成に影響を与えてきた。国内各地の政治勢力の「長」たちは、自分自身の神がかり的存在を眼に見える形で演出するため、王たちはヒンドゥー教や仏教、それに精霊信仰などの諸礼拝形式を借りて、神秘的で派手な祭儀を執り行い、現人神として君臨してきたのであった。神がかり的存在から現人神への説明はわかりやすい。

7. デヴァラージャ信仰の原点の考察

考察するこのスドック・カック・トム碑文 (K. 235=1052 年) については、ジャヤヴァルマン 2 世 (802~834 年) が国内の諸勢力を糾合し、「神なる王 (Devarāja = Kamrateñ Jagat Ta Raja = KJTR)」信仰を創設したと報告している。ジャヤヴァルマン 2 世は強力な統一政権の確立に向けて、国家鎮護的シンボルとして、「神」と「王」が合体した特別の「リング」(liṅga 男根 = シヴァ神の形を借りたもの) を創設して、それを礼拝していたという。

「神々(と人間たち)の王」を意味するこの王のデーヴァラージャ(KJTR)信仰を精査することは、アンコール王朝の独自の政治と文化と歴史を解明するの一つの手がかりを探ることになる。それは、これまで知られておらなかったインド方面からの新しい宗教文化と、その国内の文化の融合と土着化過程を探ることにより、さらにここでは、このデーヴァラージャ信仰の背景にある民族固有の文化の価値基準を精査することができる。さらに、この祭式儀礼を取り仕切る特権的な世襲の祭儀宗務家系の成立過程が明らかになる。同時に、王もしくは王権を取り巻く高位職の祭儀官や実務官たちが、国風化された国家鎮護の祭儀礼をさらにより深化させ、そして、そこに新しいカンボジア版価値観を塗布し、構築し、その結果として、カンボジア版新価値観に立脚して大伽藍が次々と建立されていくことになったのである。

古代カンボジアにおいては、インド方面からの諸文物が伝達され、そこには同時にヒンドゥー教や仏教も到来していた。土着(地方)の大小の政治勢力は、これら諸神・仏を政治支配の道具の一部として使い、村人たちを巻き込みながら大小の祭儀を執り行ってきた。インド人来航者は、現地の村人にインドの稲作や生活習慣、それに自分たちが護持している信仰などを伝えると同時に、その信仰を具体的にその実践的な祭祀を地方の有力者たちにも伝授し、五穀豊穰を願ったのであった。

8. カンボジア版デーヴァラージャ信仰の前例「デーヴァラージャ神(男根)」がシャムブプラ都城で祀られていた

716年の碑文(K. 121)では、当時地方の大政治勢力であったシャムブプラ都城(所在地不明)の王プシュカラが、王名を冠した「リング・プシュカレーシャ(liṅga puskareśa)」神のご神体を創設したと碑文が報じている。このリングこそは、王と神が合体した「特別の(現人神の)リング」であり、デーヴァラージャ(神なる王)信仰の萌芽というべき地方神のリングであった。ここでもやはりインド人のバラモン(= dvija)がこのデーヴァラージャ(神なる王)祭事を手伝っていた。

また、同じシャムブプラから出た781年の碑文では(K. 134)、ジャヤヴァルマン2世

について言及し、「大洋に囲まれたこの大地は、シュリー・ジャヤヴァルマン (Śrī Jayavarman) 2 世王によって統治されていた」と言及している。

2 世王は、シャムププラ滞在時にこの地方デーヴァラージャ神の祭祀を実体験したらしく、デーヴァラージャ信仰とは何かを既に知っていたと思われる。この信仰はおそらく、アンコール王朝の統治開始にあたって、2 世王は特別の「シヴァ・リング」の礼拝を強力に演出するため付け加えたかもしれない。

王が地上におけるインドラ神の生まれ変わりであることを定着させ、祭儀を深化させていく段階で、2 世王は現人神となっていくのであった。そして、「カムテン・ジャガット・タ・ラージャ (Kamraten Jagat Ta Rāja)」は、サンスクリット碑文では、「デーヴァラージャ (Devarāja)」と記されていた。王の神格を現人神として可視化するため諸儀礼を付け加え、神なる王の存在を理論武装し、王の神格化を執り行う特別の祭儀であった。

9. 2 世王はロン・チェン (プノン・クレーン高丘内) 祭儀場において現人神となった

「ジャヤヴァルマン 2 世 (Vrah Pāda Parameśvara)」はマヘンドラパルバタ (=プノン・クレーン丘陵) 内のロン・チェンにおいてこのデーヴァラージャ (Devarāja 信仰) の特別の祭祀を執り行った。(中略) ヴラ・パーダ・パラメーシュヴァラ (2 世王) は、インドラプラ (所在地不明) の統治者となるためにジャヴァー (ジャワ) 方面より帰還した」とある。2 世王はインドラプラから始まってシャムププラ (所在地不明)、そして、クティ、(バルテアイ・クデイ隣接地)、ハリハララヤ (ロリュオス)、アマレーンドラプラと北漸し、聖山のマヘンドラパルヴァタ (Phnom Kulên) に戻り、802 年に新政権の樹立宣言を行ったことが言及されている。2 世王の数次におよぶ居所の移転には、多数の兵員や担当者たちが同行し、この大移動は一つの掃討作戦であって、群雄割拠していた当時の地方政治勢力に対する軍事 (作戦) であり、具体的な行動であった。パッルハル (Pálhál) 碑文 (K. 449) によれば、2 世王はまずインドラプラ (不明) に帰還してから、国内各地へ征討を開始したという。

しかし、当時のカンボジアの政治情勢を伝える漢文史料には、「水真臘」から元和 8 年 (813 年) に中国へ入貢があったと伝え、開成 3 年 (838 年) に水真臘の王子が環王国 (チャンバ) を攻めたとある。しかし、当時カンボジアは陸真臘と水真臘に分裂し、国内は群雄割拠し、混乱していたと伝えている。

10. 2 世王は土着の守護精霊を併せた「新デーヴァラージャ信仰」を創始した

2 世王は、802 年に設立というこの新王朝では、土着の大守護精霊を含むシヴァ神の「特別な王のリング」を所持している現人神の王ジャヤヴァルマン 2 世となり、同時にリングも礼拝していた。それを「デーヴァラージャ信仰 (神々 (人間) の王)」と呼称したのかもしれない。2 世王は新しい国家鎮護の現人神であると同時に、俗世でいう政治の長でもあった。

祭事に熟知したバラモンたちがプノン・クレーン高丘に大集合していた。この奥義の枠組みを新しく創り上げた人物はバラモンであり、学識ある最高権威者といわれるこのヒランヤダーマ (Hiranyadāma) が、デーヴァラージャ信仰の基本となる新しい四経典 (タントラ系) を参考に、祭礼・儀典・修法の体系を新しく組み立てたものであった。

王は、カンボジア生まれで、博覧強記バラモンのヒランヤダーマに命じたのであった。「祭儀の経験とそれを熟知していたこのバラモン（ヒランヤダーマ）は、諸シャーストラ（śāstra）」の真髓を入念細心に抄録して、世の興隆増益を祈願し、「デーヴァラージャ（Devarāja）」という名前の秘法祭儀（= Siddhi）を創った」とサンスクリット語碑文は述べている。その祭儀はマヘンドラパルヴァタ（プノン・クレーン丘陵）のロン・チェン（寺院 Rong Cen）地域の祭場で執行されたものであろうと思われる。そこでは「デーヴァラージャ」の王の特別のリング（男根）も安置されて、祭儀が行われていたという。

「バラモンのヒランヤダーマはこのデーヴァラージャ（Kamrateñ Jagat Ta Rāja）神に関する祭儀（=vidhi）を完成して、ステン・アン・シヴァカイヴァリヤ（= Steñ Añ Śivakaivalya）」に伝授した。聖なる御足（= Vraṇ Pāda）の Parameśvara（ジャヤヴァルマン2世）およびバラモンのヒランヤダーマは祝福と呪詛（王と対立する人物に災いが起こるように神仏に祈願すること）を行い、シヴァカイヴァリヤ（Śivakaivalya）一族が、Deravāja（Kamrateñ Jagat Ta Rāja）についての祭式を執り行うことを厳命し、他の者がその祭式を執り行うことを禁じた。

祭司（= Purohita）のシヴァカイヴァリヤとその一族は、家族全員でその祭式を独占して執り行うことを指示した。」という。かなり誇張した厳命であった。これが世襲家系の誕生であった。

この重要な祭祀の最高執行長の祭司「プローヒタ = Purohita」に就任したシヴァカイヴァリヤは、2世王がインドラプラ（所在地不明）に居住していた時に、祭礼儀典担当者として登用された人物らしい。これ以後、シヴァカイヴァリヤは2世王の数次に及ぶ地方の掃討と帰順平定作戦を遂行していた。彼は王からの信頼が厚く、加えて祭礼に熟知していたし、評判の高位のバラモンであった。このデーヴァラージャの祭司「プローヒタ（Purohita）」として、彼にとって代わるバラモンはいなかった。ここに祭儀を執行する特権をもった世襲家族の一族を任命し、以後彼らが王の即位の儀式を執行することになるのであった。

11. 王師シヴァカイヴァリヤが得た特権とは何か 一新アンコール王朝では KJTR の祭儀執行権を独占し、即位式儀礼を含めて世襲する一族が王朝内に誕生し、認知されたのであった

シヴァカイヴァリヤが2世王から得た特権は、このデーヴァラージャ神の祭儀および王の即位式の祭儀執行権を彼とその一族に託し、それを世襲することを命じた。同時に、この祭儀を他の一族が執行することを禁止したとうのである。それはこの祭司（シヴァカイヴァリア）（プローヒタ）の指揮のもとに、一族全員が祭式の執行や王のリングの管理などデーヴァラージャ信仰に関係する宗務全般の仕事を独占するという結果になるのであった。

この初代プロヒタ（祭司）シヴァカイヴァリヤ師以後、約2世紀半にわたってサダーシヴァの前任者まで、8代の祭司（プローヒタ）がこの独占的職務を世襲し、伝統あるデーヴァラージャの祭儀宗務職を継承して遂行してきた旨、このスドック・カック・トム碑文は高らかに主張している。

歴代の世襲祭司（プローヒタ）は、KJTR 信仰の護持と拡大に努め、王たちに薦めて、

大伽藍の建設を推進してきたと、その輝かしい世襲家系一族の誉れを得々と碑文は語っているのである。その国家鎮護寺院には「王のリングと王の神像」を安置され、王を現人神とするデーヴァラージャ神の祭礼を、国家規模で盛大に挙げてきたと述べているのである。

もう一つの KJTR の特別なリングは、バラモンを介してシヴァ神から王に授けられた王国の守護神であると同時に、「リング」そのものの中に土着の守護霊をも含入し、神格化された王自身の自我を包摂しているとされているという。碑文がいうには、この神秘的なリングの中には「微細で目に見えぬ靈魂」(= *suksmāntarātman*) が宿っているとされている。だから、王はもはや単なる人間ではなく、「シヴァ神 (Amśa)」であり、「神なる王」である「現人神」となるのであった。

碑文によれば、祭司シヴァカイヴァリヤが執行する秘法祭儀の中で、2 世王とシヴァ神のリングとが合体する密教的奥義の神事が、カンボジア版須弥山を象徴していたマヘンドラパルヴァ丘陵 (プノンクーレン高丘) 内のロン・チェン祭場において挙行されたという。この祭儀は、その後もシヴァカイヴァリヤとその血縁者一族により継承され、継続されてきたという。それがどうして、8 代目にあたるスドック・トム碑文を綴った世襲家系の宗務官サーダシヴァが、どうしてスールヤ・ヴァルマン 1 世からその高位の職位から外されたのか？サーダシヴァは、不満のままスールヤ・ヴァルマン 1 世の逝去を待っていたのであった。

12. 神聖な王権の確立に向けて一現人神の秘法祭祀を別の祭祀 (プロヒタ) は指南する

実務に関して強力な権限をもつこの KJTR 祭儀宗務の世襲家系は、これまでに即位式などの国家の重要な祭儀に関与してきた。しかし、日常の祭儀が儀典関係には、別の祭司 (= *hotr*) が執り行っていたという。この KJTR 職の世襲専従者は、神聖で侵すことのできない王位の神授的背景を創り出す特別な秘法祭儀を執り行い、祭儀参加者が実際眼に見える形で、できるだけ盛大に、そして派手に演出し、それをもって人々を畏敬させ、威圧していたようであった。KJTR の祭儀に対してその神秘的祭礼に多くの人々が共感と共鳴を寄せていたようである。なぜなら、そこには土地の守護精霊も併され、礼拝されていたからである。こうした「現人神なる王」の威力は、やがてその巨大なモニュメントとして国家鎮護の大寺院を建立して見せつけ、結果として、神なる王そのものの神秘的な威令を国内外に誇示していた。

この世襲専従家系の人達は次々と神秘的な祭礼を執り行い、王が現人神となる現場に臨場感をもたせ、神が登場する儀式を見せてきた。そうしたシナリオを綴った 1052 年のスドック・カック・トム碑文の記述は、私達を驚かせると同時に、このカンボジアの神秘的伝統に疑問を抱く人もいたのである。

しかしながら、1052 年の碑文では、サダーシヴァ祭司世襲家系およびその一族にとって、有利な言説や誇張的表現が綴られており、史料批判がないわけではない。大げさに言えば、アンコール王朝の初期から約 250 年にわたり、歴代の王の登位の年代が明確に綴られている。1930 年代のアンコール王朝の解明作業が暗中模索中であったことを考えれば、歴史発見作業における一つの光明であった。14 人の王たちの編年が通観できる正確な史料の発見は何よりの朗報であった。

この現人神なるデーヴァラージャ信仰が、容易に各地域の人達に受け入れられた理由

は何であろうか。①地方の小王の名を冠した「リング・プシュカレーシャ」がシャムブプラ（場所不明）で礼拝され、すでに前例として地方版デーヴァラージャ信仰が存続していた。②地元の守護精霊（ネアク・タ信仰）は、これまでにヒンドゥー教・仏教の寺院内、もしくは隣接場所にその小祠が併設され、神仏と同格に拝まれ、日常生活の喜怒哀楽を助けていた。だから、デーヴァラージャ神を祭る寺院の境内に守護精霊を併設するのは、慣例的に納得していた。

私は各地の寺院調査の時によく見かけていた寺院の境内にはネアク・タ神の小祠が設置され、前を通りすぎる村人は必ず合掌していた。③守護精霊のご本尊は小さな自然石であった。王名を冠した石造りの「シヴァ神リング」が、同質の「石」であり、その礼拝は説明がなくとも、村人には容易に受け入れてきたと想像できる。

13. 王権の強化および神聖化に必要なデーヴァラージャ信仰の可視化をめぐって

このデーヴァラージャ信仰は、アンコール王朝時代において、王権の強化および神聖化をより明確に確立するために、神秘的・宗教的な背景を実質的に演出していたのであった。それは同時にアンコールの驚異、すなわち、「壮大な大伽藍」を次々と建造する民族エネルギーの源泉にもなっていたのであった。

アンコール時代には、これらの祭儀や世襲祭儀家系は、必ず現職の王権と結びつき、祭祀執行の高級官僚として要職に就き、王の即位式権などに関与してきた。各地の諸精霊「信仰」に優先するこのアンコールのデーヴァラージャ信仰の創設は、2世王の治下では、スドック・カック・トム碑文が伝えるような派手な形では執り行われなかったようである。

けれども、この信仰の創設と体系化と充実化の建設過程においては、同碑文が伝える通り、輝かしい政治的成果をもたらした。そして、アンコールの諸王は、デーヴァラージャ信仰の形式を借りながら、その神格の充実と深化に努め、神聖な王権の確立に邁進してきたのであった。

現存する大伽藍建立や大彫像というのは「デーヴァラージャ信仰」そのものに源泉があり、諸王たちは、儀典担当の祭司たちの介添により、寺院内において神秘的な王のリングの祭儀を執り行っていた。このデーヴァラージャ信仰の成立過程を検討することにより、9世紀からの古代カンボジア史の大きな政治的躍進と文化変容を、つまりカンボジア版新現人神信仰とそれに伴う文化像を再生産していく文化力に注目していくことが必要である。これを裏付ける当時の国内外の政治活動を考察し、この活動を可能にした年2回の収穫の集約農業とその経済活動を再考察する必要がある。

しかしながら、史料として使用できるほとんどの碑文が、宗教および寄進に関係のある内容を持っているところから、手元に残るこれらの碑文に綴られた宗教的背景の考察を抜きにしては、アンコール王朝の歴史を知ることはできない。同時に、どうしても碑文に書き伝え、残したいという気持ちが碑文作成の動機となっているが、同時に碑文には寄進など宗教活動が中心に伝えられており、その偏向性と断片性から、アンコール王朝の社会・経済分野の全容を知ることができない。なぜなら、碑文には寄進品の数量や原産地が記入されておらない。

しかし、これらの碑文は当時の ①最も貴重で価値の高い歴史情報の一つであり、②また篤信者のメッセージとして、大変重要ではあるが、③生の声の史料として、これら

碑文史料の内容には限界があり、社会経済の当時の史実の全貌を識ることができない、また ④宗教的精神的な背景の史実が中心であり、断片史料からは解明できない。これ以上のことは、しかし、⑤碑文は G. セデスの指摘どおり、社会・経済的情報が欠落し、その偏向性から本格的な歴史解明と社会経済活動をすりすることができない。

註

「Sdök Kâk Thom」の意味は「芦が欄干の生えた大きな池」の意味

(1) Cœdès, G. et Dupont, P. 1943. « Les stèles de Sdök Kâk Thom Phnom Sandak et Prâah Vihâr. »

Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient (43): 56-154.

(2) Aymonier, E. 1900-1904. *Le Cambodge*. 3 vols, Paris.

(3) Cœdès, G. 1937-1966. *Inscriptions du Cambodge*. Vols. I-VIII, Hanoi-Paris.

(4) 石澤良昭：「カンボジア（付チャンパー）」、『アジア歴史研究入門』第5巻（南アジア・東南アジア・世界史とアジア）pp. 369 - 395, 同朋舎, 1984

Exploring the Royal Road from Angkor to Wat Phu

Nhim Sotheavin

Sophia Asia Center for Research and Human Development,
Sophia University, Tokyo

Introduction

Angkorian temples, statuary, inscriptions, and external documents indicate that the Khmer expanded their influence to around Champa (present-day central Vietnam) in the east, to Burma in the northwest, and to the Malay Peninsula in the southwest. Khmer kings, especially Suryavarman I and Jayavarman VII, carried out a program of constructing royal roads that linked the political center of Angkor to the provincial centers in order to maintain political and economic stability and for religious purposes and brought these centers under Khmer autonomy.¹

Several structures such as temples, bridges, hospitals, rest houses, reservoirs, ponds, and so on were erected along the royal roads. As evidence of this certain ancient Khmer inscriptions mention such buildings, especially bridges, hospitals, and rest houses.² The inscriptions also mention that 23 great Buddha images named Jayabuddhamahānātha,³ were sent to 23 cities in order to affirm the authority and religious power of the king, and also that a total of 20,400 statues made of gold, silver, bronze and stone, were placed in all the provinces.⁴

In the early 20th century, French colonial scholars, Étienne Aymonier and Lunet de Lajonquière, conducted their pilot study of the road networks from Angkor to other regions by describing the archaeological and architectural remains and their

¹ This report uses the term “royal road” to refer to state-sponsored formal Angkorian roads (See for example, Ishizawa & Tamura 1999). The 10th century Khmer inscription (K. 175) employed the term ‘*vrah ganloñ*’ (Cœdès 1954: 175), while K. 353 used ‘*vrah phlu*’ (Cœdès 1953: 136), both can be translated as “sacred road,” or “royal road.”

² Cœdès 1906: 44-86, Cœdès 1941: 255-302, Cœdès 1940a: 344-349 and 1940b: 347-349. The inscription of Preah Khan (K. 908) mentions 121 rest houses, in Sanskrit ‘*vahnigrhā*, or house with fire’ (also referred to as *dharmasāla*, Finot 1925), erected along the royal roads from Angkor. The same inscription also provides detailed information about the royal road system. The inscription of Ta Prohm (K. 909) 102 hospitals were built all over the Khmer empire domain.

³ Some of the Buddha images were found at Angkor (Ta Prohm temple), Lopburi, Suphan, Ratchaburi, Petchaburi and Muang Sing (present-day Thailand).

⁴ Cœdès 1941: 265-266.

surrounding geographical features.⁵ Recently many researchers have begun to conduct their research on those road networks throughout mainland Southeast Asia, according to their fields and topics of interest. Concerning research on the road network connecting Angkor and other regions, this was notably mentioned by Prof. Yoshiaki Ishizawa in his book entitled, “Along the Royal Roads to Angkor,” that was published in 1999.⁶ He describes the roads linking Angkor to the great temples of Banteay Chhmar, Beng Mealea, Koh Ker, Preah Khan Kampong Svay (called by local people “Banteay Bakan”), and Sambor Prei Kuk, and also the roads that extended to other ancient cities of Sukhothai (present-day Thailand), Vat Phu (present-day Laos) and Champa (present-day Vietnam).

Research on trade networks from Myanmar, crossing Thailand, Cambodia, and linking southern Vietnam (Mekong Delta), the “East-West Corridor, was conducted by Prof. Ishii Yoneo.⁷ This term has been adopted and extended in the study undertaken by the research team called “East-West Cultural Corridor Project” or “EWCC Project.”⁸ The team conducted an archaeological investigation from Myanmar to Thailand and Cambodia, and created an inventory of archaeological sites by using GIS (Geographical Information System). Another team, a joint Thai-Khmer project, has conducted a long-term research project of the ancient road, entitled the “Living Angkor Road Project” (LARP).⁹ The team has conducted archaeological and ethnographic surveys along the royal roads from Angkor to present-day Thailand, Laos, and Vietnam, with emphasis on roads from Angkor to the northwestern region (in present-day Thailand).

The Sophia University team had also conducted a research project from 2013 to 2015 entitled, “Integrated Studies on a Historical Network with Angkor Wat.”¹⁰ The project was led by Prof. Yoshiaki Ishizawa, in order to explore the royal roads from Angkor to the far west and northwest region (Prasat Ta Muon Thom, Sdok Kak Thom, Phimai, Muang Sing, etc.); to the northeast region (Beng Mealea, Koh Ker, Banteay

⁵ Aymonier 1900-1904, Lajonquière 1902-1911.

⁶ Ishizawa and Tamura 1999: 177-193.

⁷ Ishii 2009.

⁸ Shibayama 2012, Moore 2013.

⁹ Im and Surat 2015. For detailed descriptions related to the condition of the royal roads, rest houses, and hospitals, see., Im 2005, 2021.

¹⁰ The Japan Society for the Promotion of Science, Grants-in-Aid for Scientific Research. The Team members are Prof. Ishizawa Yoshiaki, Prof. Marui Masako, Prof. Cyril Veliath, Prof. Tabata Yukitsugu, Mr. Miwa Satoru, Dr. Nhim Sotheavin, Dr. Matsuura Fumiaki, Dr. Sato Keiko, and Mr. Phin Phakdey.

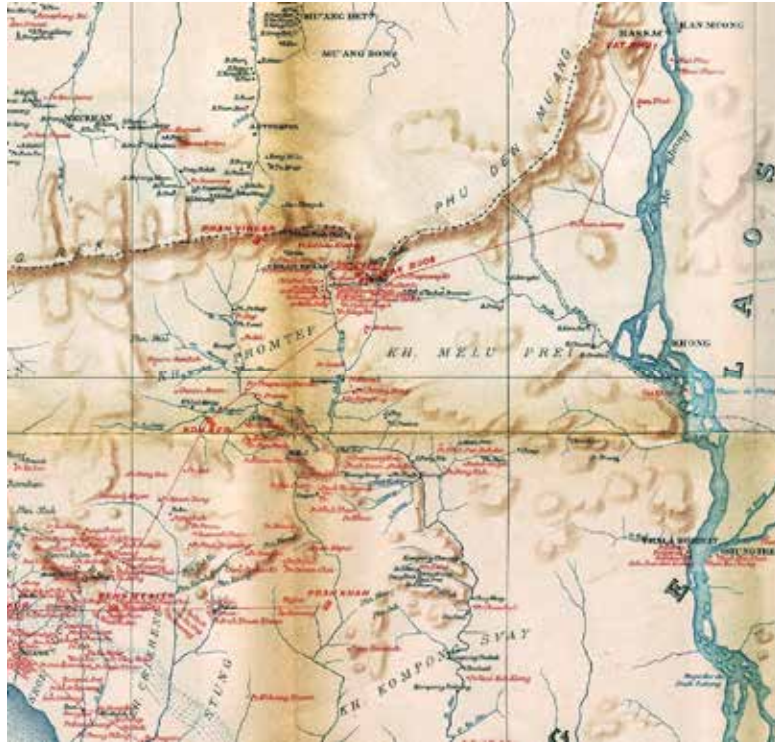
Bakan (Preah Khan Kampong Svay), Neak Buos, Vat Phu and its surrounding area, etc.); to the east (Sambor Prei Kuk); and to the south (Angkor Borei, Kampot, Oc-Eo, etc.). The project aimed to investigate and confirm the historical royal road network from Angkor to other regions, based on interdisciplinary studies of archaeological traces, inscriptions, iconographical artifacts, and architectural remains.

This report includes the results of the project when the author conducted ground surveys in 2015 (June 26-July 2) and in 2016 (February 22-27) along with other members, to explore the road networks from Angkor to Wat Phu, Champasak province, Laos.¹¹ The road that links Angkor to Wat Phu lies nears multiple temples such as Kravan, Bat Chum, Chau Srei Vibol, Beng Mealea, Koh Ker, Neak Buos, and present-day Laos, where there are remains of temples such as Nang Ing (or That Nang Ing), Ban Done (or That Ban Done), Don That, That Na Samlian, Ban That, Thao Tao, and Wat Phu. The first map of the connected road network from Angkor to Wat Phu was drawn by Lunet de Lajonquière in 1911 (**Map 1**). In this report, we describe the temples and archaeological traces explored along the royal road from Angkor to Wat Phu, Laos, along with photographs and maps. We also highlight the historical development of the connecting road between Angkor and Wat Phu.

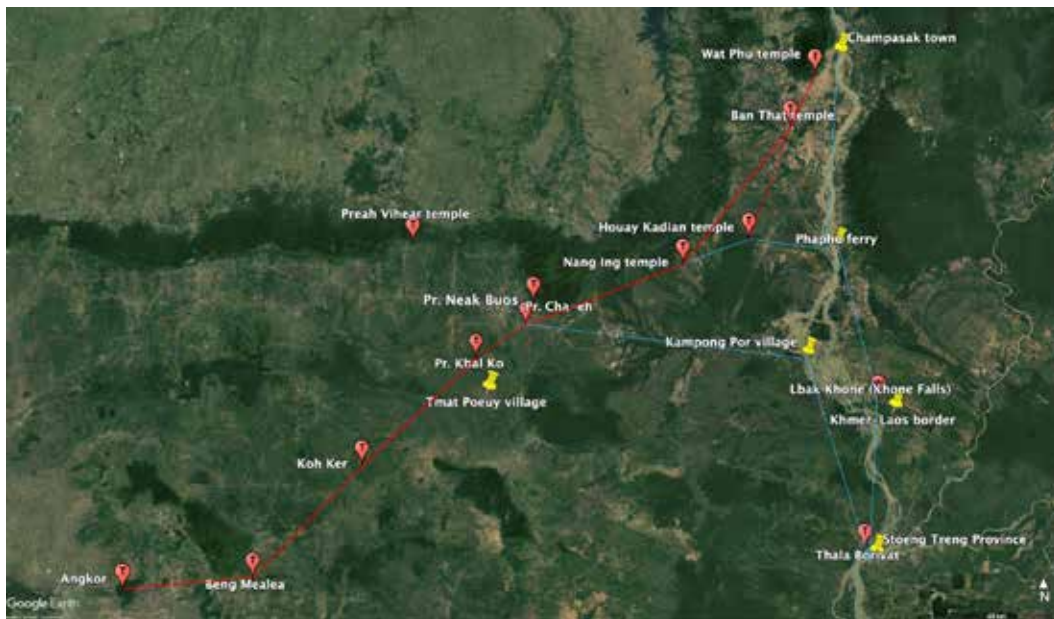
I. Archaeological Sites in the Preah Vihear Province in Cambodia

For our field archaeological investigation, we confirmed some temples and ancient sites located along the royal road from Angkor to Wat Phu, Laos (**Map 2**). We took a road from Siem Reap town to the Stoeng Treng province, Khmer-Laos border, and through Preah Vihear province. Then, we crossed the Mekong River to Laos and went up to Champasak town. Along the way we explored the ancient archaeological sites that are described as follows.

¹¹ A survey in 2015 was conducted by Nhim Sotheavin and Mr. Satoru Miwa, and the members in 2016 were Prof. Marui Masako, Mr. Miwa Satoru, Dr. Sato Keiko, Mr. Phin Phakdey, and Nhim Sotheavin.



Map 1. Lunet de Lajonquière 1911 (EFEO, extracted from angkordatabase.asia)

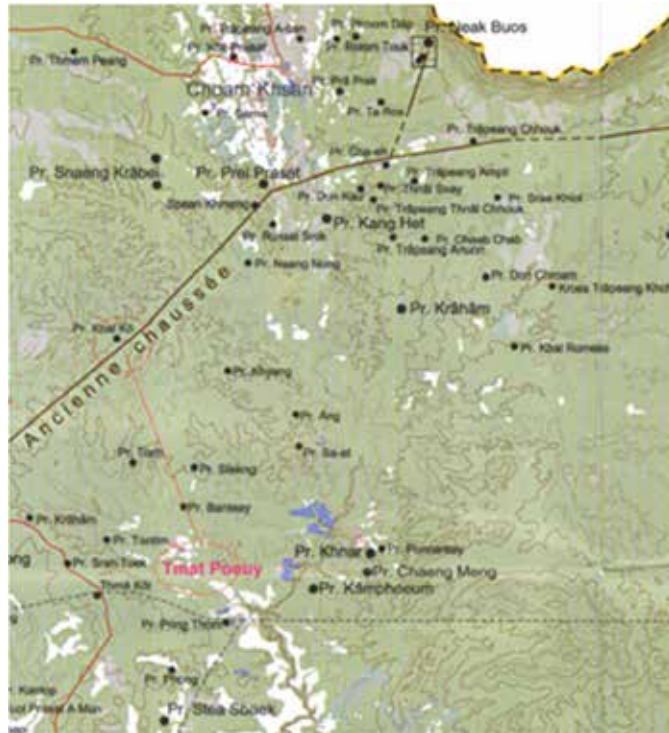


Map 2. The red line shows the connected Royal Road from Angkor to Wat Phu. The Green line depicts our paths from the Preah Vihear province (connected to the road at Prasat Cha-eh) to Chamapasak, Laos (GPS points, Google Earth).

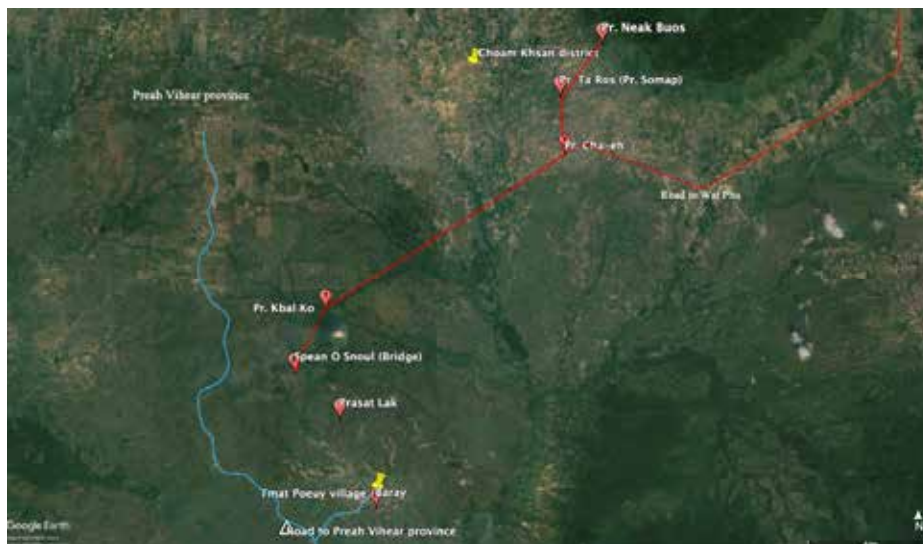
1. Tmat Poey Village and Related Sites

Located in the Preah Vihear province, Tmat Poey is an archaeological site surrounded by ancient small temples, ponds, and embankments, and it is situated

around 10km from the royal road to Wat Phu (Map 3, 4). According to the villagers, there are still remains of the ancient roads and a long embankment. Due to the road conditions, time constraints, and the area itself still having land mines, we could not reach all the archaeological sites in the area.



Map 3. Archaeological map of the Preah Vihear province (MCFA & EFEO)



Map 4. Connecting road from the Tmat Poeyu site to Prasat Neak Buos
(GPS points, Google Earth)

1.1. The Embankment

We found an embankment located to the south of Tmat Poeuy village, which is probably an embankment of a water tank (**Fig. 1**). The size is about 200m x 500m. It is now used as a rice field.



Fig. 1. Embankment of a water tank



Fig. 2. A tractor, called Ko Yan in Khmer



Fig. 3 & 4. Prasat Lak, the scattered blocks of laterite and its foundation

1.2. Prasat Lak

There is a small ruin located about 5km in the forest to the north of Tmat Poeuy village, and with the guidance of villagers we accessed the ruin with a small tractor (**Fig. 2**). It is called Prasat Lak by the villagers. It is registered as Prasat Toch in the map of the Preah Vihear province created by the Ministry of Culture and Fine Arts (MCFA) and the l'École Française d'Extrême Orient (EFEO).

Since this temple is located far from the village in the forest and it was difficult to access, it had been illegally looted in order to find art objects. Hence, it is in a state of complete ruin on the ground, and it is difficult to identify its shape. There remain blocks of laterite of the temple's foundation and some scattered around the site, and a large sandstone pedestal (**Fig. 3, 4**). This ruin was not mentioned or registered in the classical books of E. Aymonier's "Le Cambodge," nor in L. de Lajonguière's "Inventaire Descriptif des Monuments du Cambodge." Even the new guidebook on the

archaeological sites of the Preah Vihear province that was written by Bruno Bruguier did not have any note on this ruins.¹²

1.3. Spean O Snuol

Spean O Snuol is an ancient bridge made of laterite and situated about 8 km to the north of Tmat Poeuy. It is located on the ancient road from Angkor leading to Prasat Cha-eh and Prasat Neak Buos, in the Preah Vihear province. It is referred to by the villagers as Spean O Snuol, where Spean means ‘bridge’, O is a ‘small stream,’ and Snuol is the name of a tree.

This ancient laterite bridge has not yet been registered in any map, nor is there any description of it. Because of the present location of the bridge, there is no road access, and so we just walked in the forest to the place, along with the villagers. This laterite bridge consists of 3 small water gates that are no longer functioning (**Fig. 5**). There were traces of a stream, but it was completely dried up (**Fig. 6**). We found it difficult to identify the connecting road between this small laterite bridge with another site, but it was probably connected to the main royal road.



Fig. 5 & 6. An ancient laterite bridge and a dried-up water stream

1.4. Prasat Kbal Ko

Prasat Kbal Ko is located about 5km from Spean O Snuol to the northeast, and is situated close to the royal road linked to Prasat Cha-eh and Prasat Neak Buos in the Preah Vihear province, and to the northeast area of Wat Phu temple. It is about 30 km to Prasat Neak Buos. The name Kbal Ko means ‘head of a bull.’ It is registered in the map of the MCFA and EFEO. However, it is not mentioned in the books of L. de

¹² Bruguier and Lacroix 2013.

Lajonguière and B. Bruguier. It consists of 3 towers made of bricks. Since the towers are badly ruined, and all lintels, pediments and columns had collapsed, it was difficult to identify its period of construction. (Fig. 7, 8). There remain parts of the architectural structure, and the temple was probably built in the 10th century. Close to Prasat Kbal Ko we found a mound in which there remained a lot of block of stones. It was probably a place to produce something (Fig. 9, 10).



Fig. 7 & 8. A ruined structure of Prasat Kbal Ko

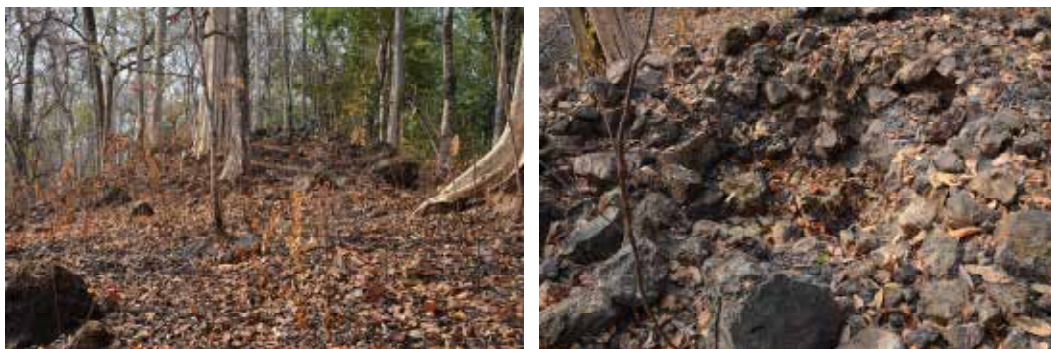


Fig. 9 & 10. An identified mound with blocks of stone, kiln?

2. Temple Groups in the Choam Khsan District

The area is located in the Choam Khsan district of the Preah Vihear province and situated just at the foot of the Dangrek mountains, where lies the border between Cambodia and Thailand. According to the inscriptions and architectural style of the temples, the area itself has been occupied since the pre-Angkorian period. Based on the map of L. de Lajonguière and the MCFA and EFEO, there are numerous temples in this area. However, when we visited the area, we could reach just a few temples.¹³

¹³ I thank H. E. Pheng Sam Ourn (Deputy Director General of the Preah Vihear National Authority) and his team, for guiding us on our visit to the site.

2.1. Prasat Cha-eh

Prasat Cha-eh is located close to the royal road along the way to Wat Phu (Map 3, 4). There is also a pond nearby. The name of this temple appears in the map of the MCFA and EFEO. This temple was made of bricks but had completely collapsed, and there remain only the doorframes (Fig. 11). We found inscriptions on the collapsed doorframes.

In his publication of a guide's book, Bruguier just mentioned the name of the temple but did not describe any details, and he probably did not know that in this temple there remained inscriptions.¹⁴ Recently, however, those inscriptions were registered in the inventory as number K. 1485 in CIK (Corpus des Inscriptions Khmères), by the EFEO.¹⁵

According to Hun Chhnteng, who is a specialist on Khmer inscriptions, around 40% of the scripts have disappeared, and the parts that remained mention the fact that there is an official named Śivācārya, who donated land to the temple by obeying the order of the king. It also mentions the curse that those who destroy this meritorious act will go to hell, and those who protect it will go the heaven. (Fig. 12, 13).



Fig. 11 & 12. Remained doorframes of Prasat Cha-eh and ruined structure



Fig. 13. Inscription of Prasat Cha-eh, K. 1485 (Courtesy: Ol Sam An, 2015)

¹⁴ Bruguier and Lacroix 2013: 450.

¹⁵ <https://cik.efeo.fr>. See also., <https://dharma.hypotheses.org>.

2.2. Prasat Ta Ros

This temple is located about 3 km to the north of Prasat Cha-eh. Since it is in the forest, the accessible road was very bad, and hence we found it difficult to explore this temple. The name Ta Ros can mean ‘ancestor of Ros,’ and it is also referred to by the local inhabitants as Somap.¹⁶

This temple was constructed of bricks and its doorframes were made of sandstone. It remains as a very ruined enclosure with the main entrance from the east. There are three towers in a row and one library. When we visited the temple it was covered by vegetation and trees, and so we were unable to take proper photographs (**Fig. 14, 15**). L. de Lajonguière was the first to describe this temple in detail, in his classical book about the inventory of Khmer temples.¹⁷



Fig. 14. General view of the temple, face east Fig. 15. Sandstone doorframes of central tower

There are two inscriptions remaining on the doorframes that were registered as K. 348 and K. 349 (**Fig. 16, 17**).¹⁸ According to inscription K. 349 (dated 954 CE), this temple was built in the middle of the 10th century in the reign of King Rajendravarman II and dedicated to the god Śiva. The inscription (K. 349) mentions the fact that King Rajendravarman II ordered an official named Śivācārya (Steñ Śivācārya is mentioned in many inscriptions. For example, the name also appears in the inscription of Prasat Cha-eh.), to conduct certain work in the cell (vraḥ kuti) of Srī Yaśodharaśrama at Śivapāda (Prasat Neak Buos). The inscription also mentions the fact that Śivācārya received two plots of land from the people living in Śivapāda, and that he offered one

¹⁶ According to Bruguier, the name Somap refers to the name of the forest in that area (Bruguier and Lacroix 2013: 450).

¹⁷ Lajonguière 1907: 27-29.

¹⁸ Cœdès 1953: 108-113. K. 349 was inscribed on the doorframe of the main tower.

plot of land back to the temple. Then, he bought that land from the same group of people who were there.¹⁹

For inscription K. 348, the content continues from the incomplete inscription of K. 349. This inscription speaks about a land controversy in the area, and the fact that the judge decided that a person named Vrah Thnal had won the case. After that Śivācārya bought those lands and gave them to the temple.²⁰



Fig. 16. Inscription K. 348



Fig. 17. Inscription K. 349

(The photos of these two inscriptions were provided by Pheng Sam Ourn)

¹⁹ *Ibid.*, 108. In 2023, Hun Chhnteng also presented a detailed description of this inscription written in the Khmer language, which was posted in an online page of the AMS Khmer civilization. (<https://ams.com.kh/khmercivilization>).

²⁰ Cœdès 1953: 112-113. Hun Chhnteng 2023. (<https://ams.com.kh/khmercivilization>).

2.3. Prasat Neak Buos

Prasat Neak Buos²¹ is located about 4 km from Prasat Taros and about 8 km to the northeast of Choam Khsan district. Also, it is about 6 km to the north of the royal road from Angkor to Vat Phu. Prasat Neak Buos is generally complex, since it consists of many brick towers that were built in different periods.²² The base direction of the main temple compound is tilted 15 degrees south-west. A tilting base line axis of 15 degrees south-west is very rare, and it is a special direction for a Khmer temple.

The main temple compound is surrounded by a laterite wall enclosure, which is now in a poor condition (**Fig. 18, 19**). According to the inscription on the temple doorframe (K. 342) and architectural style, the central tower was erected at the beginning of the 11th century in the reign of King Suryavarman I (**Fig. 20, 21**).



Fig. 18 & 19. Aerial view of the main compound (Drone photo, Phin Phakdey, 2023)



Fig. 20 & 21. Central tower of Prasat Neak Buos

²¹ Neak Buos means 'monk' or 'priest.'

²² Parmentier 1939: 118.

Prasat Neak Buos was mentioned by E. Aymonier in his classical book, “Le Cambodge,” as Prasat Preah Neak Buos,²³ and by L. de Lajonguière as Prasat Neak Buos.²⁴ There is a reservoir that E. Aymonier named ‘Lboek,’²⁵ while other researchers called it ‘Baray’ (**Fig. 22**). The reservoir inclines to the north-west and south-east parallels, to comply with the accessed road to the main temple compound. It measures approximately 750ms in length and 220ms in width. Two small temples are located near the Lboek, along the road accessing the main compound of Prasat Neak Buos. One is referred to by local people as Pr. Kuk (south-east corner), and it was suggested as having been a hospital that was constructed during the late 12th and early 13th century during the reign of King Jayavarman VII, and the other is a palace (**Map 5**).²⁶



Map 5. Group of Neak Buos temple

There are 9 inscriptions that were found in Prasat Neak Buos, namely K. 341, K. 342, K. 343, K. 344, K. 345, K. 346, K. 580, K. 1248, and K. 1252.²⁷ Based on these inscriptions and architectural structure of the temples, Prasat Neak Buos can be traced back to the pre-Angkorian period (K. 341), then in the 9th century (K. 346), and most of the architectural structures were built between the 10th and middle of the 11th century.



Fig. 22. Views of Lboek and Dangrek Range

²³ Aymonier 1901: 230-239.

²⁴ Lajonguière 1907: 11-12.

²⁵ Lboek is derived from the verb ‘Loek’ meaning ‘to erect, to build, to lift, to dig up’. Lboek is a generic term indicating a manmade reservoir or large pond. There are many Lboeks in the Angkor area. It is similar to Baray, but the size is rather smaller than Baray.

²⁶ For a detailed description of the hospital and palace, see Bruguier and Lacroix, 2013.

²⁷ Aymonier 1901, Cœdès 1954: 22-26, Bruguier and Lacroix 2013: 454-455.

Also, the construction of the hospital was done in the reign of King Jayavarman VII. Hence it reveals that this area, which is located just at the foot of the Dangrek mountains, was continuously occupied by the communities of that time. The site was a sacred space for communities as well as a relay point for connections between the central power of Angkor and the northeastern region, such as Wat Phu.

- ... K. 341: This consists of two inscriptions. One of these is 3 lines in Sanskrit and 12 lines in Khmer, and the other is 12 lines written in Khmer and dated to the pre-Angkorian period. The twelve-line Khmer inscription dated to 622 çaka (700 CE), mentions the order of the king concerning donation of land to the temple of Śivapāda (Prasat Neak Buos), and of providing servants and others such as slaves and animals, as donations to serve the temple.
- ... K. 342: According to E. Aymonier this is an incomplete inscription. It is in the Khmer language and dated to 1008 CE, and it mentions various donations from an official named Kavīśvaravarman to King Suryavarman I, and to the temples of Śivapāda and Liṅgapura.²⁸
- ... K. 343: This is dated to 974 CE in the reign of King Jayavarman V, and it mentions issues related to the family of Īśānaśiva, who bought land at the temple of Śivapāda. It also mentions the establishment of a village and āśrama (hermitage or temple), offered to the temple of Śivapāda (**Fig. 23, 24**).²⁹



Fig. 23 & 24. Tower with sandstone doorframe consists of the inscription K. 343

²⁸ Aymonier 1901: 233, Cœdès 1954: 236-237.

²⁹ Cœdès 1954: 156-157, Aymonier, *op. cit.*, 234-235.

... K. 344: This is dated to 985 CE in the reign of King Jayavarman V (Fig. 25, 26). It consists of 38 lines in the Khmer language and 4 lines in Sanskrit. It mentions issues related to the report of Vraḥ Guru that were submitted to the king, through an official named Tannot.³⁰



Fig. 25 & 26. Tower with sandstone doorframe consists of the inscription K. 344

... K. 345: This is very fragmented. Based on the character of the writing, G. Cœdès suggested that it was written in the 10th century.³¹

... K. 346: This is a lost inscription, which according to G. Cœdès was found by E. Aymonier. However, it was studied and published by A. Barth.³² It mentions one hermitage among others (Yaśodharāśrama).

... K. 580: This is an inscription that was brought by H. Parmentier to be kept at the Phnom Penh National Museum, and it was transferred to the Angkor Conservation in Siem Reap.³³ The inscription was inscribed in the 10th century, and mentions the restrictions imposed by King Rajendravarman and

³⁰ Cœdès 1954: 160.

³¹ *Ibid.*, 156.

³² *Ibid.*, 22.

³³ Bruguier and Lacroix 2013: 468.

addressed to Vrah Guru, and prescribes the erection of the god Aṣṭamūrti (the 8 forms of god Śiva).³⁴

... K. 1248: This inscription was not registered by G. Cœdès in his 8 volumes of *Inscriptions du Cambodge*. It was documented in the CIK by Christophe Pottier in the year 2007, and a detailed study of it was done by Dominique Soutif for a Ph.D dissertation in 2009.³⁵ The inscription consists of two parts inscribing different dates. The first part is dated to 961 śaka (1039 CE) and second part is dated to 1060 śaka (1138 CE), which was in the reign of King Suryavarman II. D. Soutif suggested that the characters used in the two parts are homogenous, and that the engraving dates entirely from the reign of King Suryavarman II. The first part mentions the royal order to a professor (Guru) to keep the property of a village (sruk maheśānapura) with an official's family of Prasat Neak Buos (Śivapāda), and the second part declares that the ancient (original) sanctuary (prāsāda dem) had collapsed, and this was sent in a letter to the king, and (the king) ordered them to copy (rewrite) it (the inscription) (**Fig 27, 28**).³⁶

... K. 1252: This is very much ruined.



Fig. 27 & 28. Sandstone doorframe consists of the inscription K. 1248

II. Archaeological Sites in Wat Phu, Champasak, Laos

From Preah Vihear province at Prasat Cha-eh (Prasat Neak Buos), the direct road connecting Nang Ing temple in Laos is visible on aerial photography. However, on the ground the road is hard to use. Hence in order to reach the archaeological site of Wat Phu in the Champasak province, we took a route from the Preah Vihear province via the Stoeng Treng province. On our way from the Preah Vihear province to the

³⁴ Cœdès, *op cit.*, 154.

³⁵ Soutif 2009: 607-611.

³⁶ *Ibid.*, 611. See also., Hun Chunteng. (<https://hunchhuenteng.wordpress.com>).

Stoeng Treng province, we stopped by to explore some temples in the Choam Khsan district, as described above. Later we took a road from Prasat Cha-eh via Kampong Por village³⁷ (Kampong Sralao) which is located just at the mouth of the Mekong River, at the border of Khmer and Laos (**Map 1**), and then we followed the road along the Mekong River down to the Stoeng Treng province. We made a short visit to some ruins at Thala Borivat,³⁸ in Stoeng Treng town.



Map 6. Wat Phu and related sites (Google Earth)

According to the inscription of Wat Luong Kao K. 365 (**Fig. 29**)³⁹ which was studied by G. Cœdès,⁴⁰ there was an ancient city named Kuruksetra.⁴¹ Based on the characters of the inscription, G. Cœdès assumed it was written at the end of the 5th century. The inscription, which consists of 16 lines in Sanskrit on each face, mentions that King Mahārājādhirāja Śrīmāñ Śrī Devānīka came to establish a *mahātīrtha* (city or

³⁷ Most of the villagers in the Kampong Por village spoke the Lao language more fluently than the Khmer language. Children in the village normally go to school in Laos, by using boats to cross the Mekong River.

³⁸ In this report, we do not describe this site since we have focused on the ancient temples and archaeological sites along the royal road from Angkor to Wat Phu. The detailed study of Thala Borivat site was conducted by Heng Piphāl. From his researched data, Heng suggests that the Thala Borivat site was one of great pre-Angkorian centers which had developed between 300 CE and 500 CE into a larger one (Heng 2016, 2018). For the site description, see also., Bruguier and Lacroix 2017.

³⁹ The inscription (K. 365) is now exhibited in the Wat Phu museum.

⁴⁰ Cœdès 1953: 9, Cœdès 1956: 209-220. Wat Luong Kao is located at the banks of the Mekong River in the compound of the ancient city settlement, near Wat Phu temple.

⁴¹ The city of Kuruksetra was later also known as Sresthapura. For a detailed study on the inscription of Wat Luong Kao, especially the discussion on Kuruksetra, see., Chhom 2005.

town) and named the place Kurukṣetra, at the foot of the Liṅgaparvata (present-day Phu Kao Mountain). Based on his studies in 1953, 1956, and 1968 on inscriptions and Chinese sources, G. Cœdès hypothesized that the area around Wat Phu was the ancient city settlement of the Khmer ancestors (**Map 6, 7**).⁴²



Fig. 29. Inscription K. 365 Map. 7. Ancient city settlement, Wat Phu site (Google Earth) (Wat Phu Museum)

The inscription K. 363 written in Sanskrit that was found at Phu Lakhon in Champasak, mentions the name of King Mahendravarman, and that after his conquest of the country he was on the mountain and erected a Linga as a representation of his victory. The inscription was suggested to date to the 6th century.⁴³ The inscription K. 1059, found at the mountain of Wat Phu and recently studied by Dominic Goodall, was engraved in the 7th century in the reign of King Jayavarman I.⁴⁴ The inscription K. 1201, found at the Houay Kadian temple (to be described below) is dated to the 7th century, to the reign of King Jayavarman I. Other pre-Angkorian inscriptions were also discovered in the area, such as inscriptions K. 723 & K. 724 of Tham Lekh, which is situated to the north of Wat Phu.⁴⁵

Furthermore, in the Champasak province, and especially along both banks of the Mekong River, around 24 pre-Angkorian sites have so far been found.⁴⁶ For example, in the ancient city settlement located to the east of the Wat Phu temple complex and on the banks of the Mekong, many pre-Angkorian vestiges were discovered through archaeological excavation in the 1990s, by the French

⁴² Cœdès 1953: 9-11, Cœdès 1956: 209-220, Cœdès 1968: 65-69.

⁴³ Cœdès 1966: 138-39, Barth 1903: 442-446.

⁴⁴ Goodall 2020.

⁴⁵ Cœdès 1953: 12.

⁴⁶ Lorrillard 2014: 186-215.

Archaeological Mission.⁴⁷ In the collections of the Wat Phu museum, a number of pre-Angkorian and Angkorian pieces are displayed, such as lintels, Brahmanic and Buddhist statues, and architectural ornaments, etc (Fig. 30, 31, 32).



Fig. 30. Head of Buddha statue, late 7th - early 8th centuries (Wat Lakhone, Champasak)



Fig. 31. Seated Buddha in meditation late 7th – early 8th centuries (Champasak)



Fig. 32. Lintel of Sambor Prei Kuk style, 7th century

Based on these inscriptions, archaeological evidence, and architectural remains, we know that the site was established in the 5th century and became one of the political centers in the 6th and 7th centuries of the pre-Angkorian period capital, before major political power became centralized in Sambor Prei Kuk. Since then, the site of Champasak (Wat Phu's archaeological site) had been continuously viewed by the Khmers as a religious sacred space, until the 13th century.

Although the major existing temple construction at Wat Phu site was largely conducted in the 11th century, traces of direct involvement from Angkor into the area were located from the 9th century onwards. The digraphic stele K. 362 discovered at the

⁴⁷ Santoni, Hawixbrock, and Souksavatdy 2017.

Houay Tomo temple by E. Aymonier, refers to the Yaśodharāsrama of King Yaśovarman I, in the late 9th century.⁴⁸ The Houay Tomo temple is located on the east bank of the Mekong River, on the opposite side of the Wat Phu complex (Fig. 33, 34).⁴⁹



Fig. 33 & 34. Houay Tomo temple views from the front and back side

According to the research of the French Archaeological Mission, there are 6 temples along the royal road in present-day Laos. They are 6 to 19 km apart from the Wat Phu temple, namely Nong Pham, That Nang Ing, That Ban Done, Don That, That Na Samlian and Ban That.⁵⁰ These temples were constructed in a similar architectural layout in the 10th century.

From an aerial view we see that there still are villages, and we can see many small ponds along the ancient road to Wat Phu. It seems as though there have been communities continuously living along the ancient road, associated with agriculture. For our investigation, since we had time constraints and the road condition was not good, we could not reach all those temples. The following descriptions are of temples we had access to during our field investigation.

1. Nang Ing Temple (That Nang Ing)

We crossed the bridge of the Mekong River at Stoeng Treng town to the Khmer-Lao border, and followed the road along the Mekong River up to the Lbak Khone (Khone Falls, Laos), then crossed the Mekong River at the Phapho ferry which is located in the Muonlapamok district of Champasak province.

The first temple we visited in the Champasak province was the Nang Ing temple, also called That Nang Ing by the local people. ‘That’ means ‘relic,’ which symbolically refers to Buddha’s relic, and directly indicates the ‘temple or stupa’ when replaced by

⁴⁸ Cœdès 1942: 77.

⁴⁹ For a detailed description of the Houay Tomo temple, see., Nalesini 1998.

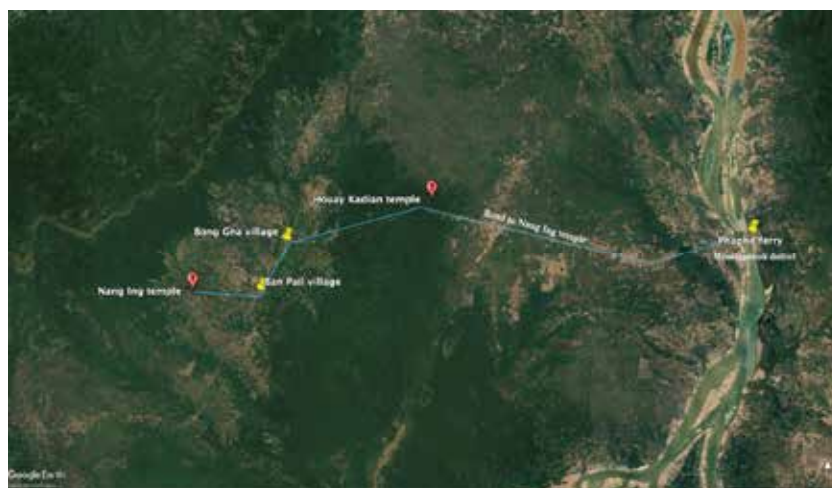
⁵⁰ *Ibid.*, 23.

the term ‘Prasat’ in the Theravada Buddhist context, and it is a common name for temples in Cambodia as well as Thailand. ‘Nang’ means ‘lady or woman,’ and ‘Ing’ is the name of a lady. The Nang Ing temple is located around 45 km from the Mekong River of Muonlapamok district, and around 48 km from Prasat Neak Buos (if we take a direct connected road).

Before exploring the Nang Ing temple, we stopped at two Khmer villages, namely Bong Gna and Ban Pail, which are located along the way to the Nang Ing temple (**Map 8, 9**). The people of these villages speak the Khmer language fluently. We interviewed some people in the villages and learned about the legend of Neang Sak Kra-op, which is a very popular legend in Cambodia and known in the Surin province of Thailand as well.⁵¹



Map 8. Royal Road from Nang Ing temple to Wat Phu (GPS points, Google Earth)



Map 9. Nang Ing temple, Khmer villages, and Houay Kadian temple (Google Earth)

⁵¹ Nhim 2018: 57-58.

In the map of L. de Lajonguière which was published in 1911, the location of Prasat Pram Lveng is exactly around the Nang Ing temple (see., **Map 1**). However, the description of E. Aymonier and L. de Lajonguière regarding the condition of the temple, differed from what we investigated.⁵² The name itself, Prasat Pram Lveng, which in Khmer meant “tower with five compartments,” does not match the actual form of the temple. The name Prasat Pram Lveng is now unknown in the area.

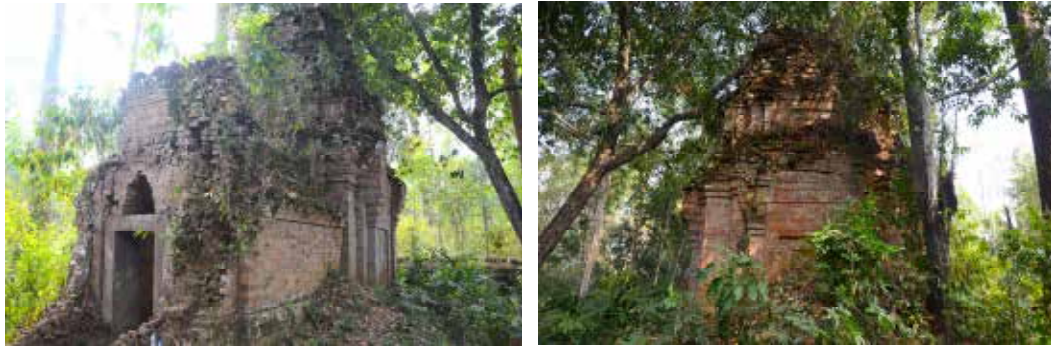


Fig. 35 & 36. Viewing from south-east corner and west side



Fig. 37. Main sanctum with unfinished lintel and pediment decorations



Fig. 38. Colonette in orthogonal shape with midribs and leaves decorations

⁵² Aymonier 1901: 181, Lajonguière 1907: 61.

The Nang Ing temple was made of bricks (**Fig. 35, 36**), with incomplete sandstone lintel and pediment decorations in the main sanctum (**Fig. 37**). The two colonettes of the main sanctum are made from sandstone with octagonal shapes (**Fig. 38**). The stylistic decoration of the colonettes is generally similar to Prasat Kraham of Koh Ker of the 10th century,⁵³ but it has more detail and richness of the midribs and leaves. It probably belonged to the Pre Rup style of the 10th century of the Angkorian period. There is a closed Mandapa made of brick with sandstone doorframes connected to the main sanctum, which was probably added on at a later period (**Fig. 39**). The main sanctuary is enclosed by a laterite wall and moat (**Fig. 40**).



Fig. 39. Structure of Nang Ing temple with a main sanctum and Mandapa



Fig. 40. A dried-up moat

2. Houay Kadian Temple

The Houay Kadian temple is located about 21 km from the Nang Ing temple and about 25 km from the Mekong River of Muonlapamok district. By using an aerial view of Google Earth, we can see traces of the ancient road connection between this temple and the Wat Phu area. This temple's name is written differently by foreign researchers, as Huei Kadien, Houay Kadienne, and Houay Kadien. In this report I use Houay Kadian, as it is close to the vernacular pronunciation. Houay is a Lao word meaning 'stream' and Kadian is a Suay ethnic word.⁵⁴

This temple is very fragmented, due to nature and mostly by looting (**Fig. 41**). It faces the east. It was built of small laterite blocks, but the method of assembly is similar to brick temples of the pre-Angkorian period (**Fig. 42**). There are remains of

⁵³ Boisselier 1966: 156-161.

⁵⁴ I thank Mr. Paxa Nyordsavanh, an academic staff of the World Heritage Site Management Division of the Department of Heritage in the Ministry of Information, Culture, and Tourism, of Lao PDR, for providing us with this information.

sandstone doorframes, sandstone divinity statues with lost head and arms, rather big blocks of sandstone, and a circular shaped sandstone with decorations (**Fig. 43, 44**). The style of the divinity statue probably belonged to the Angkorian period, and the site had probably been used in the Angkorian period as well. We did not find any lintels or colonettes in this temple site.



Fig. 41. Ruined structure of the main temple



Fig. 42. Remained laterite wall



Fig. 43 & 44. Remained objects at the temple site

On the two remaining sandstone doorframes are two separated parts of a long inscription in Sanskrit and Khmer, which are preserved in a good condition. The inscription was registered in the CIK as K. 1201. However, it is to be noted that this inscription has not been studied yet.⁵⁵ We made a rubbing of both inscriptions (**Fig. 45, 46**). This inscription is dated to the 7th century to the reign of King Jayavarman I. According to M. Santoni, who quoted Prof. Claude Jacques, the first part of the inscription provides both the date of the foundation of the temple which is 18 May, 654, and the name of the temple's founder who lived in Kuruksetra (the ancient city of Wat Phu from the 5th century CE).⁵⁶

⁵⁵ Goodall 2020: 4.

⁵⁶ Santoni, Hawixbrock, and Souksavatdy 2017: 21.

Continuing from the first part, the second part of the inscription generally mentions the list of donations. A list of donations of young and old servants consists of the names of the servants, and works out to a total of 124 servants donated to the temple. The text also mentions donated rice fields, beans, sesame plantations, and cattle to the temple of Śrī Sṭhāneśvara. In addition, they also contain a list of objects made of bronze, copper, and gold. At the end of the text, another list is mentioned of 25 servants at the temple and 17 workers at 3 rice fields, that were donated by Mratāñ Candrasvāmi to the temple of Śrī Prabhāsomesvara.⁵⁷

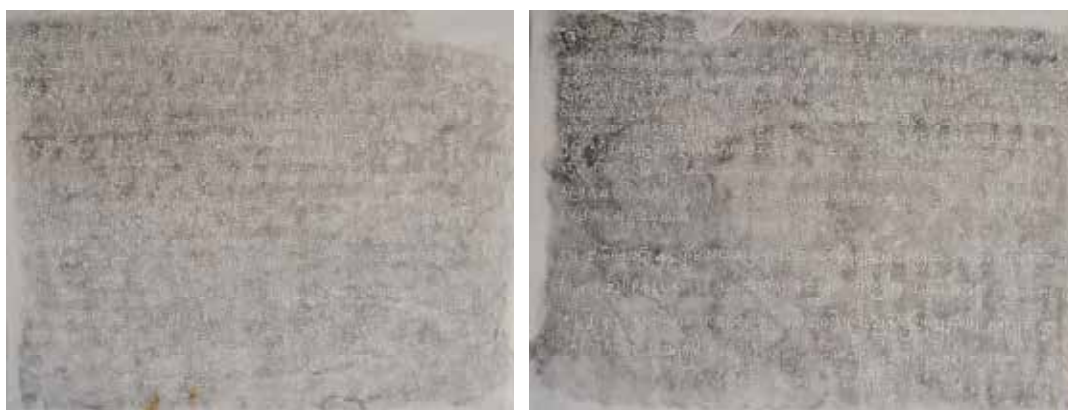


Fig. 45 & 46. The first part and the second part of the inscriptions K. 1201

3. Ban That Temple (Ban That Sampang)

The Ban⁵⁸ That temple is located in Ban That village, Soukhouma district, about 18 km to the south of Wat Phu temple. The location of this temple is geographically not far from a small river flowing from the top of the northern part of the Phu Kao Mountain (the ancient name was Lingaparvata), to the western part down to the southern part of the mountain into the Mekong River (**Map 10**). At the south of the Ban That temple the river separates into two streams, of which one flows down to the Mekong, and the other flows to the villages that are located along the ancient road between Wat Phu and Angkor. This river has aided the villagers with regard to agriculture and daily use. Furthermore, there is an ancient reservoir (we are not sure whether the local inhabitants call the reservoir ‘Baray’ as in Angkor) which is situated 32ms to the east of the Ban That temple. The reservoir measures east-west 60ms in length and north-south 24ms in width, and it still has plenty of water (**Fig. 47**).

⁵⁷ I thank Mr. Hun Chhuenteng for his help in reading this inscription. This inscription needs to be studied in detail.

⁵⁸ Ban means ‘village’ in the Lao language.



Map 10. Ban That temple and related sites



Fig. 47. Functioning reservoir of Ban That

Ban That is a sandstone temple consisting of three towers facing east. The central tower is a bit bigger than the others (Fig. 48, 49). The two towers generally remain in good condition; however, the north tower collapsed. There are no decorations on the lintels and colonettes. The stele foundation which was placed in front of the temple, and which was described by E. Aymonier,⁵⁹ remains at the place. It is unfortunate that the state of preservation of the inscription is very poor (Fig. 50). We did some rubbing of all four faces of the remaining parts of the inscription (Fig. 51, 52, 53).



Fig. 48 & 49. Three towers of Ban That view from the front and back side

The inscription is written in Sanskrit on the four faces of a 1.6m column and consists of 70 lines and 140 verses. It was registered as K. 364 and was first translated by M. Kern, and later provided another conclusion by E. Aymonier and Louis Finot.⁶⁰ The inscription is dated to 1128 CE in the reign of King Suryavarman II. The content is interesting, as it mentions the clerical family who served in the reigns of the three kings, namely Jayavarman VI (1080-1107 CE), Dharanindravarman I (1107-1113 CE), and Suryavarman II (1113-1150 CE). The inscription also describes the war expeditions

⁵⁹ Aymonier 1901: 165-167.

⁶⁰ *Ibid.*, 170. Finot 1912: 1-28.

conducted by King Suryavarman II and the killing of his competitors so as to establish peace in the kingdom and narrates the story of the Brahmin Mūrdhaśiva who is the writer of this inscription.⁶¹



Fig. 50. Column with the inscription K. 364



Fig. 51. A rubbing fragmented inscription



Fig. 52 & 53. A rubbing fragmented inscription

4. Thao Tao temple

The Thao Tao temple is located about 3 km to the south of Wat Phu in Ban Sankheg village, of the Champasak district. It is also situated about 300m to the east of the ancient royal road from Wat Phu (**Map 6**).

The central sanctum with an annex of this temple was built using blocks of sandstone, surrounded by a laterite enclosure with a gopura made of sandstone (**Fig. 54**,

⁶¹ Finot 1912: 6-7. Finot noted that Mūrdhaśiva, who is the writer of this inscription, was misreading as Pūja Śiva by Aymonier.

55, 56, 57). There is small pond at the outside of the north-east enclosure. The characteristics of the temple construction is of the type of the hospital chapels in the reign of King Jayavarman VII, which were built between the end of the 12th and beginning of the 13th century. Generally speaking the construction of this temple is incomplete. There are no decorations on the lintels and pilasters. This temple is not mentioned in the books of E. Aymonier and L. de Lajonguière.



Fig. 54. Collapsed structures of sanctum and enclosure



Fig. 55. General views



Fig. 56. A remained Gopura structure



Fig. 57. Fallen apart of the temple structure

5. Nang Sida Temple (Hong Nang Sida)

The Nang Sida temple is located about 1km south of the Wat Phu complex and towards the southeastern slope of Phu Kao Mountain, but the temple itself was erected on flat land. The temple site was constructed just close to the ancient road that connected Wat Phu to Angkor. The surrounding areas are now used as rice fields by local inhabitants. The temple is called Hong Nang Sida by the local inhabitants. Hong means ‘room or chamber,’ Nang means ‘lady,’ and Sida is the name of ‘Princess Sītā (pronounced Sida),’ the wife of Rama in the Ramayana epic. Hence, Hong Nang Sida means the ‘chamber of Princess Sītā.’

The temple faces east. The core area of the temple site consists of the main sanctuary, library, and a long causeway (Fig. 58, 59, 60). The main sanctum was built

of sandstone and composed of a mandapa with a narrow semi-vault and short corridor. When we visited the place in 2015 and 2016, the main sanctuary, especially the upper structures, had totally collapsed. Blocks of sandstone were scattered around and piled up in the main hall, and it was hard to enter inside (**Fig. 61**). The library was made of bricks, and as usual it was located to the south of the main temple and oriented towards the west. The structures of the library had mostly collapsed. Since the main structures had almost collapsed we could not find lintels and colonettes, and hence it is difficult to know the period when it was built. However, based on the main temple structure, it is believed to have been built in the 12th century.

During our visit, a Korean specialist who oversaw the restoration project of the Nang Sida temple, kindly explained their project to us. The project, which is funded by the Korean Cultural Heritage Foundation in collaboration with the Laos government, was begun in 2013.



Fig. 58. A causeway to the main temple



Fig. 59. Main sanctuary of Nang Sida



Fig. 60. Ruined brick structure of library



Fig. 61. Collapsed structure of the main sanctum

6. Wat Phu Temple Complex

The Wat Phu complex and its ancient city are located between the Phu Kao Mountain and the west bank of the Mekong River in the Champasak province of Laos. It is about 260km to the northeast of the Angkor monuments, and about 485 km to the south of Vientiane, the capital of the Lao People's Democratic Republic. Wat Phu is

well known to specialists, however the information available to the public is still rather low. It is one of the most ancient historical sites linked to the origin of the Khmer Empire.

As mentioned above, the ancient settlement city of Wat Phu was established in the 5th century, and it developed until the 7th century. The temple complex of Wat Phu prospered between the 11th and 13th centuries, in the Khmer Empire domain. Within this ancient city and temple complex, there are hydraulic systems, agricultural areas, temples, local cultural traditions, etc. Since this cultural landscape is very important, it was inscribed in the UNESCO World Heritage List in 2001, with the justification for the inscription in criteria iii, iv, and vi.

- iii. The temple complex of Wat Phu bears exceptional testimony to the cultures of Southeast Asia, and in particular the Khmer Empire which dominated the region during the 10th to 14th centuries.
- iv. The Wat Phu complex is an outstanding example of the integration of symbolic landscape of great spiritual significance to its natural surroundings.
- vi. Contrived to express the Hindu version of the relationship between nature and humanity, Wat Phu exhibits a remarkable complex of monuments and other structures over an extensive area between river and mountain, some of outstanding architecture, many containing great works of art, and all expressing intense religious conviction and commitment.⁶²



Fig. 62. Views of Lingaparavata and Wat Phu temple



Fig. 63. The first assessed causeway to the main temple complex

The major sanctuaries of the Wat Phu temple were mainly built between the 11th and 12th centuries. However, pre-Angkorian traces have also been uncovered in the

⁶² UNESCO Website: <https://whc.unesco.org>.

temple complex, through the archaeological excavation conducted by the French Archaeological Mission in the 1990s.⁶³ The temple complex was built on the slope of the Phu Kao Mountain, which is also known as Lingaparavata (natural *linga* or *svayambhuna linga* in Sanskrit (**Fig. 62**), the ancient name that was engraved in the inscriptions, representing of the sacred worship of the mountain for the God Śiva) .

Opening to the east, this temple mountain consists of structures such as the first long-accessed causeway that was erected with flagstones, with both sides having sandstone posts (this characteristic was seen in the reign of King Suryavarman I in the 11th century, such as in the Preah Vihear temple) (**Fig. 63**). There are two rectangular reservoirs (Barays) which are believed to have been built in the first half of the 12th century, in the reign of King Jayavarman II (**Fig. 64**). After the causeways there is a wall, but it had completely collapsed, and then there are two quadrangle sanctuaries (also called, palaces) made of laterite, which were built in the 11th and 12th century (**Fig. 65, 66**). There is a second causeway granting access to the main compound (**Fig. 67**). At the southern side of the second causeway there is a small sanctuary, called ‘Nandin temple, a sacred bull temple’ (**Fig. 68**). After the causeway, there is a step, and a short terrace. Then, there is the stairway with seven sandstone steps to climb up to the main sanctuary, along with seven retaining walls made of laterite blocks (**Fig. 69, 70**).



Fig. 64. Two Barays, first and second causeways, two quadrangle sanctuaries, and Nandin temple view from the terrace of the main sanctuary

⁶³ The detail descriptions, please see., Santoni, Hawixbrock, and Souksavatdy 2017.



Fig. 65, 66. Northern quadrangle: Pediment depicts the god Śiva and his Satī Uma on his vehicle Nandin, and on the upper part of the lintel depicts the god Yama (god of death) and on the lower part decorates the Rāhu (Kāla).



Fig. 67. The second causeway



Fig. 68. Nandin temple



Fig. 69. Seven laterite retaining wall



Fig. 70. Stairway to the main sanctuary



Fig. 71, 72. The main sanctuary at the upper terrace with sandstone and brick structures

The main sandstone sanctuary was built in the 11th century, and behind the sandstone structure there is a laterite structure that was probably reconstructed in the

11th century, from the old structure of the pre-Angkorian period (Fig. 71, 72). This main sanctuary was built in dedication to the god Śiva. On this main upper terrace, there are other buildings such as traces of the library, which is located to the south of the main sanctuary, a sculpture of the Hindu trinity which is located to the north of the sanctuary (Fig. 73), and the so-called ‘sacred spring’ is situated behind the sanctuary (Fig. 74).



Fig. 73. Hindu trinity (Śiva in the middle, Viṣṇu on the left and Brahma on the right)



Fig. 74. The so-called ‘sacred spring’

Concluding Remarks

The northeast road connecting Angkor to Wat Phu was formalized during the 11th century and allowed the Khmer Empire to maintain communication between the central power of Angkor and Wat Phu, where ancient Khmer cities had been established since the 5th century. Our investigations conducted along the royal road from Angkor to Wat Phu based on archaeological evidence and inscriptions, confirm that parts of these connected areas were built since the pre-Angkorian period. These areas continued to be developed during the 9th to 13th century when the Khmer kings expanded their economic and political control and religious propagation. Prasat Neak Buos, a relay point connecting Angkor to Wat Phu, is one example of such continuity. Evidence from the inscriptions and temple constructions show that the site had been continuously used as a sacred space for royalty and community in that area, since the pre-Angkorian period up to the reign of King Jayavarman VII.

In the present-day Champasak province of Laos, a number of pre-Angkorian and Angkorian sites were recently discovered. However, more ruins, ancient water tanks, small ponds, dikes, and other ancient objects of infrastructure still lie asleep in the dense forest. More scientific research is needed to understand the role and chronology of this region, particularly the area in the southern part of the Wat Phu complex up to the Khmer border, which is situated along the royal road.

Acknowledgments

For this report, I would like to express my sincere gratitude to Professor Yoshiaki Ishizawa and Professor Masako Marui for giving me the opportunity to participate in the research project on the ancient road from Angkor. I also wish to thank Dr. Heng Piphah and Dr. Fumiaki Matsuura for their comments.

References

- Aymonier, Étienne. 1900-1904. *Le Cambodge*. Ernest Leroux, 3 vols, Paris.
- Barth, Auguste Marie-Eugène. 1903. "Inscription Sanskrit du Phou Lakhon (Laos)." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (3): 442-446.
- Boisselier, Jean. 1966. *Le Cambodge*. Asie du Sud-Est, Tome I, Paris.
- Bruguier, Bruno & Lacroix, Juliette. 2013. *Preah Khan, Koh Ker et Preah Vihear: Les provinces septentrionales*, guide archéologique du Cambodge, Tome V, Phnom Penh.
- _____. 2017. *De Thala Borivat à Srei Santhor: Le bassin du Mékong*. Guide archéologique du Cambodge, Tome IV, Phnom Penh.
- Cœdès, George. 1906. "La stèle de Ta Prohm." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (6): 44-86.
- _____. 1940a. "Les hôpitaux de Jayavarman VII." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (40): 344-347.
- _____. 1940b. "Les gîtes d'étape à la fin du XII^e siècle." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (40): 347-349.
- _____. 1941. "La stèle du Prah Khan d'Angkor." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (41): 255-302.
- _____. 1942. *Inscriptions du Cambodge*. Vol. 2, Paris.
- _____. 1953. *Inscriptions du Cambodge*. Vol. 5, Paris.
- _____. 1954. *Inscriptions du Cambodge*. Vol. 6, Paris.
- _____. 1956. "Nouvelles données sur les origines du royaume khmère: la stèle de Vāt Luong Kāu près de Vāt P'hu." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (48-1): 209-220.
- _____. 1966. *Inscriptions du Cambodge*. Vol. 8, Paris.
- _____. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. Edited by Walter F. Vella, translated by Susan Brown Cowing. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Chhom, Kunthea. 2005. "The Inscription of Vāt Luong Lău viewed from Kurukṣetra, India." *Sikṣācakr* (7): 46-52.
- Finot, Louis. 1912. "Notes d'épigraphie: XIII. L'inscription de Ban That." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (12): 1-28.

- _____. 1925. "Dharmaçalas du Cambodge." *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* (25): 417-422.
- Goodall, Dominic. 2020. "Two Inscriptions from Lingaparvata (Vat Phu): One Dating to Jayavarman I's Reign (K. 1059) and the Other to Jayavarman II's (K. 1060), along with a Re-Edition of K. 762." *UDAYA, Journal of Khmer Studies* (15): 3-38.
- Heng, Piphah. 2016. "Transition to the Pre-Angkorian period (300-500 CE): Thala Borivat and a Regional Perspective." *Journal of Southeast Asian Studies* (47): 484-505.
- _____. 2018. *Organizational Change in Political Economy and Ideology: Transition from the Early Historic to pre-Angkorian Period Cambodia, viewed from Thala Borivat*. Doctoral Philosophy in Anthropology, The University of Hawaii at Manoa.
- Im, Sokrithy. 2005. "Paṅḍāñ phlōv samai Angkor niñ racanā sambandh bāk'ban' (Angkorian Communication Routes and Associated Structures)." *UDAYA, Journal of Khmer Studies* (5): 39-80. (In Khmer)
- Im, Sokrithy & Surat, Lertlum. 2015. "The Living Angkor Road Project: Connectivity within Ancient Mainland Southeast Asia." *Center for Southeast Asian Studies Kyoto University, Newsletter* (71): 4-8.
- Im, Sokrithy et al. 2021. "Paṅḍāñ gamanāgam nai cakrbhab khmer: karanī phlōv borāñ pī Angkor dōv Phimai (Route Networks of Khmer Empire: Case Studies of the Ancient Roads from Angkor to Phimai)." *Preah Nokor, Journal of Angkor Studies* (3): 129-158. (In Khmer)
- Ishii, Yoneo. 2009. "A Note on the East-West Corridor Passing Through Sukhothai." *Southeast Asia: History and Culture* (38): 5-12. (In Japanese)
- Ishizawa, Yoshiaki & Tamura Hitoshi. 1999. *Along the Royal Roads to Angkor*. New York & Tokyo: Weatherhill, Inc.
- Lajonquière, Lunet de. 1902-1911. *Inventaire descriptif des monuments du Cambodge*. Ernest Leroux, 3 vols, Paris.
- Lorrillard, Michel. 2014. "Pre-Angkorian Communities in the Middle Mekong Valley (Laos and Adjacent Area)." in Nicolas Riviere (ed.), *Before Siam: Essays in Art and Archaeology*: 186-215, Bangkok: River Book (9786187338412. Halshs-023721683).
- Moore, Elizabeth Howard. 2013. "Exploring the East-West Cultural Corridor: Historic and Modern Archaeology of Bago and Dawei, Myanmar." *Center for Southeast Asian Studies Kyoto University, Newsletter* (38): 21-24.
- Nalesini, Oscar. 1998. "The Sanctuary of Huei Thamo, and the Historical Problems Raised by its Survey." In Wibke Lobo and Stephanie Reimann (eds.), *Proceeding of the 7th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists*, Berlin.
- Nhim, Sotheavin. 2018. "A Study of the Names of Monuments in Angkor (Cambodia)."

Renaissance Culturelle du Cambodge (30): 13-68.

Parmentier, Henri. 1939. *L'art khmère classique: monuments du quadrant nord-est*. Paris: *l'Ecole française d'Extrême-Orient*.

Santoni, Marielle, Hawixbrock Christine and Souksavatdy, Viengkeo. 2017. "The French Archaeological Mission and Vat Phou: Research on an Exceptional Historic Site in Laos." hal-03144441 (<https://hal.science/hal-03144441>).

Shibayama, Mamoru. 2012. Medieval Cultural Networks of Continental Southeast Asia – East-West Corridor and its GIS based Historical Studies –. Paper submitted to the 1st International Conference of Asian Network for GIS-based Historical Studies at Tokyo University, 8 pages.

Soutif, Dominique. 2009. *Organisation religieuse et profane du temple Khmer du VII^e – VIII^e Siècle*. Volume II: Recueil d'inscriptions Khmères, Thèse de Doctorat: Langues, civilisations et sociétés orientales, Université Sorbonne Nouvelle – Paris 3.

Websites:

EFEO. Corpus des inscriptions khmère. <https://cik.efeo.fr>. (Retrieved, 4th April 2023)

Dharma Project. <https://dharma.hypotheses.org>. (Retrieved, 4th April 2023)

Hun, Chhunteng. <https://ams.com.kh/khmercivilization>. (Retrieved, 15th April 2023)

Hun, Chhunteng. <https://hunchhunteng.wordpress.com>. (Retrieved, 15th April 2023)

UNESCO. <https://whc.unesco.org>. (Retrieved, 15th June 2023)

調查報告

バンコク国立博物館の火事から スドック・カク・トム碑刻文石柱を救出

宇崎 真
Nihon Denpa News
Bangkok

1) NDN (Nihon Denpa News) ベトナム戦争特派員 (1971-74) としてハノイ滞在、その後バンコク支局長 (1974-76) としてカンボジアも担当。73.4にはハノイでシアヌーク殿下インタビュー、1980.8月ポルポト政権によるジェノサイド後初の本格的なアンコール遺跡群の現地調査を石澤良昭 (鹿児島大学助教授当時) に同行しドキュメンタリーをNTV (日本テレビ) の番組「木曜スペシャル」で制作放送した。

それ以降石澤教授 (上智大学) の監修で「世界遺産」(TBS Tokyo Broadcasting Service) NHK スペシャル「カンボジア密林の五大遺跡」「アジアの巨大遺跡—密林に消えた謎の大都市」はじめ十に近いアンコール遺跡群関連のドキュメンタリー番組を発表してきた。

2022年になってNHK-BS特集で特にアンコール王朝崩壊の謎をテーマにした番組制作のコーディネートをやることになった。一般にアンコール王朝は1431年にアユタヤ王朝の攻撃で崩壊したとなっている。その史実を記録した文献、碑文はタイ国立図書館所蔵の「アユタヤ王朝記」のなかに散見されるという。ではアンコール王朝の成立を記録した文献、碑文はあるのか。それはスドック・カク・トム寺院 (11世紀のヒンドゥー寺院で現在はカンボジア国境沿いのサケーオ県にある) で発見された碑文 (K. 235) だという。

その Sdók Kák Thom (スドック・カク・トム) 碑刻文 (以下 SKT と表記) は最盛期には世界最大規模の都会 (推定人口 70 万から 100 万) を誇ったアンコール時代創建の史実を裏付ける最重要なものといわれる。アジアの歴史をたどるなら決して欠かせない史料である。それなら何としてもその石碑と当該碑文を接写したいと考えた。

ところが、調べていくとこの石碑は実に数奇な運命をたどっており、この在処が知れないものだということが分かった。何人かの研究者からも「自分の目で確かめたことはない。あるとしたらバンコクの国立博物館の倉庫ではないか」という助言がきた。

バンコクの国立博物館の古代クメール展示室の学芸員に尋ねると「われわれも見たことがない。少なくともこの博物館で展示されたことはありません」との答えが返ってくるばかりだった。そこでタイの歴史学者、研究者、考古学者らに当該石碑の消息を知らないかと尋ねていくことにした。

幸運なことに既知の考古学者 (定年退職) が「確か何年か前にバンコクからどこか地方に移された筈だ」と教えてくれ、親切にも後輩の研究者、博物館幹部らに問い合わせしてくれた。その結果「プラチンブリ国立博物館に移したと聞いたので、自分で確かめに行ってください」との連絡が入った。

翌朝勇んでプラチンブリに向かった。バンコクから東へ車で約3時間、こじんまりとしたたたずまいだが国立博物館と指定されるに十分な展示内容である。イサーン（タイ東北部）の考古学関連展示物の一センターでもある。コロナパンデミックの影響がまだ強く残っており見学に訪れるひともし極めて少ない。入場者が書き込むリストにも外国人の名前は皆無とあってよかった。

SKTの石碑は一番奥の展示室にあった。「10-13世紀のタイ東部はとりわけアンコール時代の文化の影響を濃厚に受けたが、そのなかでも国境沿いのサケーオ県 SKT 寺院で発見された二つの石碑は歴史的に重要である。一つはレンドラバルマン王によるもので、もう一つはクメール帝国を創建したジャヤバルマン二世（802-834）について記述しており、極めて重要な石碑である」（抄訳）という説明パネルが添えられている。これは George Coedès ジョルジュ・セデス説を踏まえた解説とわかる。

身の丈を上回る高さで堂々と周囲を従えるような威厳をもった石柱の石碑である。至近距離目を凝らしてみると、無数の継ぎ目が合わさり細かいサンスクリット語の刻字（ブラーフミー系文字）と古代クメール語の刻字が四面にびっしり書かれている。初めて直接目にした歴史的な石柱石碑は荘厳さをたたえ身震いさえ覚えるものであった。

プラチンブリー国立博物館の館長らによると、この石碑がバンコクから送られてきたのは四年程前だという。では何故そのことが世界に知られていなかったのか、それはこの石碑石柱がたどった数々の数奇な運命と大いに関係あるということが分かってきた。

1883年1-2月フランス植民地官吏で探検家で言語学者のエチエンヌ・エーモニエ（Etienne Aymonier）が、ジャングルに半ば埋もれて、部分的に崩壊が進む SKT 寺院を発見し、調査の結果この石碑は極めて重要な歴史遺産であると確信し石碑四面に記されたサンスクリット語の部分と古代クメール語の部分全てを記録する。1883年はフランスがベトナムを保護国とした時期であり、エーモニエはサイゴンを拠点としてベトナム、ラオス、カンボジア、タイ（イサーン）各地の歴史、言語、遺跡の調査を展開していた。

アンリ・ムオーが1860年アンコール遺跡に三週間滞在し、日記にその見聞を報告書や地図や描画を残した。アンリ・ムオーは翌年ラオス領で病死したが、遺品は母国に届けられ、1863年に書籍等で公開され、センセーションを起こす。1869年に海軍中尉としてベトナムに赴いた若きエーモニエは言語学徒と探検家として精力的にフランス保護領土を踏査していく。アンリ・ムオーの遺志を汲み、またそれ以上の到達点を望む野心もあったに違いない。（カンボジアの保護国化は1863年、仏領インドシナは1887年）だが不思議なことにエーモニエはこの石碑の詳細を広く公にすることを十数年の間しなかったようだ。彼の遺族と親交のあった米国人ジャーナリストのジョン・バーゲス（John Burgess）（東南アジアに造詣の深い元ワシントンポスト記者）によれば、20世紀になって出版された著書「カンボジア」（全三巻）のなかに SKT 石碑と碑刻文について記述されている。東南アジアの歴史、碑文解説の泰斗ジョルジュ・セデスはエーモニエの死（1929）を受けて「彼はインドシナ研究の先駆者として賞賛されるべきだが、その史論には同意出来ないものがある」と評したという。

こうした経過があったからだろうか、SKT 石碑発見は決してセンセーショナルなニュースにはならず、その歴史的な位置づけや重要性は後の研究と解明を待つこととなった。

この石碑が次にタイ社会で脚光を浴びることになるのは 1920 年のことである。ある日 SKT 寺院近くを歩いていたタイの地元の警察官ルアンチャーン・ニコムが生い茂る草むらから大きな石の彫像を見つけ、読解不能な文字がびっしり彫られていて、なにやら神聖なものではないかという騒ぎになった。コークスーン村の住民のなかに「そういえば昔フランス人が象まで使って運んでいこうとしたけど重すぎて断念していった」と証言する者もでた。こうした報告が上司に上がり、王室にまで届くことになる。ラーマ 6 世（1910—1925）の時代である。

「タイ近代化の父」ラーマ 5 世の成果を踏まえ国際社会での地位向上を図っていたと時期である。その反面仏植民地のカンボジアとの関係は微妙かつ重大であった。カンボジア国境に近いクメール由来の寺院、そこからの重要石碑となるとタイ国としてその取扱いは慎重にならざるを得ない。「帰属問題再燃」の可能性も考慮しなければならない。そこでタイ王室と政府はその石碑を秘密裏に首都バンコクに運ぶことにした。

バンコク国立博物館の倉庫に移送された石碑は展示公開をされないまま「門外不出」の保管となった。その当時ジョルジュ・セデスはシャム国立図書館長（1918-）でシャム王立研究所事務局長（1927-）であった。当然タイ国としてどこかのタイミングでジョルジュ・セデスにこの石碑の碑刻文解読、歴史的な位置づけ等の調査研究や監修を依頼したに違いない。その時期にジョルジュ・セデスがバンコクで重責にあったということは、タイにとってまた世界の考古学、東南アジア歴史学にとって実に幸いであったというしかない。

1960 年 11 月 9 日深夜バンコクの国立博物館は火災に見舞われる。当日は芸術劇場で伝統舞踊の公演があり外国人の観客で賑わっていた。夜十時に公演は終了し、真夜中に火の手が上がった。炎は劇場を瞬く間に覆いそして近くの国立博物館の一角の建物に飛び火した。そこは人形芝居の衣服、道具、楽器、古書等とともに、骨董品、そして不運にもスドック・カク・トム石碑の保管場所でもあった。急を知ったボーイスカウト 50 人が懸命に建物内の品々を運び出す。だがその石碑は余りの重量で火の手が迫る中動かすことも叶わなかった。

一晩続いた炎に包まれ石碑は高熱で膨張し破裂し無数の破片となって散ってしまった。（タイの代表的英字紙バンコクポストの報道）これはタイ国にとっても全く予期せぬ大惨事であり、クメール帝国創建を伝える石碑は完全にその姿を消してしまうかに思われた。

だがタイの考古学、歴史学、碑文学関係者、建築、石工関係者らは、どれだけ時間と労力をかけても石碑復旧を成し遂げようと驚異的な尽力をしたと思われる。外部には口外無用とされたのだろう。火災の事件を知るものは「完璧に消失した」と受け取っただろうし、それを知らないものは「行方不明」「所在不明」とだけ伝えられてきたのだろう。

復旧、再現、再生への取り組みがどのような経過をたどり、どのようなドラマが展開されたのか、これは筆者としても許されるならば是非取材し事実に向ってみたいと考えている。

1960 年以降もタイ・カンボジア国境沿いの状況は何度も動き、緊張した。とりわけ 1979 年ベトナム軍がカンボジアに侵攻し大量の難民があふれ出た。SKT 寺院にも何万ものカンボジア難民が押し寄せ、反越武力勢力の一拠点となった。一帯は荒れ放題となりとクメール建築遺跡の盗掘も進んだ。ベトナム軍のカンボジア撤退完了(1990)してから状況は落ち着きを見せ、タイ政府は芸術局を中心に SKT 寺院の復旧にとりかかった。だが 2003 年にカンボジア政府が SKT 寺院はカンボジア領内に存在するとして領有権を主張する。こうして SKT 寺院と石碑柱はその存在が知られることとなった。1883 年以来百数十年もの間表面下で紛争の種を抱え続けてきたのである。

タイ政府は隣国カンボジアとの関係を押し量りつつ、SKT 寺院を国で 11 番目の「歴史公園」と指定し整備をすすめる。バンコクに保管していた修復完了の SKT 石碑柱を東部の考古学センターであるプラチンブリーの国立博物館に輸送し展示することに決めた。それは関係当局者らの言によれば、シリントン王女のイニシアティブによって実現した。

2018 年、セレモニーも控えめで、静かな「お披露目」であった。その直後コロナパンデミックが押し寄せた。学术交流も途絶え、最大時 4 千万人に達した観光訪問客も、激減の一途を辿った。カンボジアとの国境の町アランヤプラテートから 34km、足の便もトゥクトゥックかバイクしか無い SKT 寺院を訪れるひとは皆無に近かった。SKT 石碑柱を展示したプラチンブリー国立博物館も長期間閉鎖となった。1053 年に建立されてから 970 年の歳月を殆ど埋もれた存在だったこの重要石碑は、実に数奇な運命を経て、いまようやく世に姿を現したといえる。

ただ付記しておきたいのは、SKT 寺院もまた歴史に翻弄され荒れ果てていたが、現在は歴史公園として見事に整備管理されているし、現地の村人の間では大事な宗教施設として守られてきた歴史がある。1950-60 年代にスリン出身の森林僧がやってきて数々の仏教の教え、瞑想を広め住民に親しまれたという。その僧侶の名ルアンポー・ブンタムはいまでも村人の口承伝説として残っている。(ジョン・バーガス著「Stories in Stone」) また SKT 石碑はタイ国の最重要の歴史的な位置づけがなされており、サケーオ県や周辺地域の学童の参観授業の一環ともなっている。SKT 歴史公園にもその石碑のレプリカを前に、研究員が学童の課外授業をおこなっているのを目にした。

(なおタイの文献によれば、SKT 石碑は高さ 191cm 幅 42cm 奥行 52cm 第一面はサンスクリット語 60 行、第二面はサンスクリット語 77 行、第三面はサンスクリット語 55 行 古代クメール語 29 行、第四面はサンスクリット語 4 行 古代クメール語 117 行計 342 行とあります)。



図1 スドック・カク・トム寺院の参道、11世紀



図2 スドック・カク・トム寺院中央塔



図3 寺院の図書館



図4 SKT 石碑柱 右側面から



図5 SKT 石碑全体



図6 プラチンブリ国立博物館 奥の展示室



図7 SKT 石碑右側面（第二面）

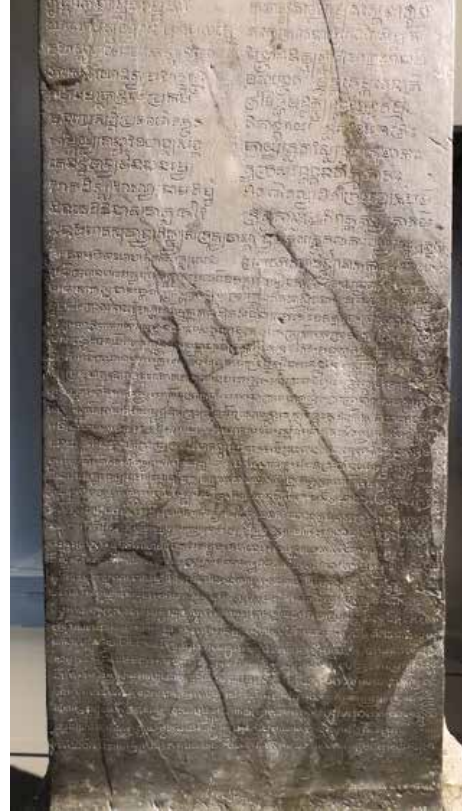


図8 SKT 石碑左側面（第三面）



図9 1920年 コクスーン村住民と SKT 石碑柱

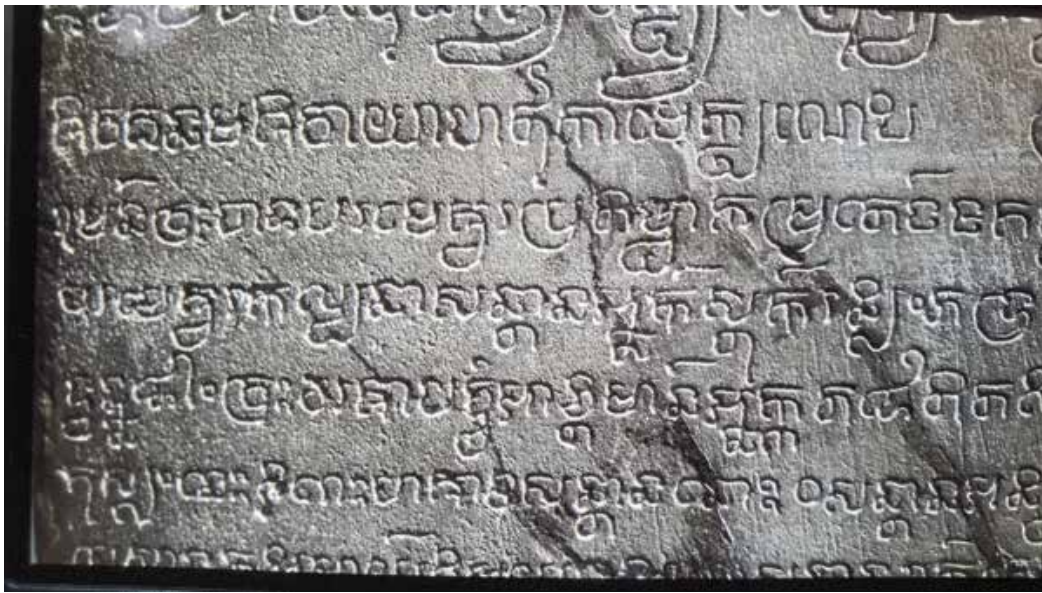


図10 SKT 石碑文の最重要箇所 アンコール帝国創建にふれている（左側面）

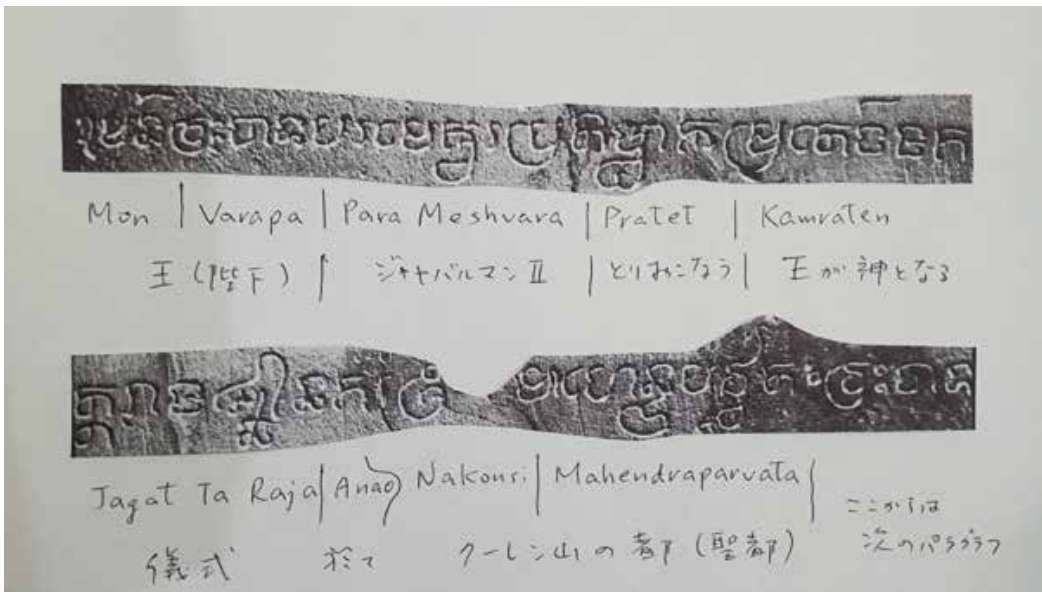


図11 SKT 石碑第三面の最重要部分 訳文

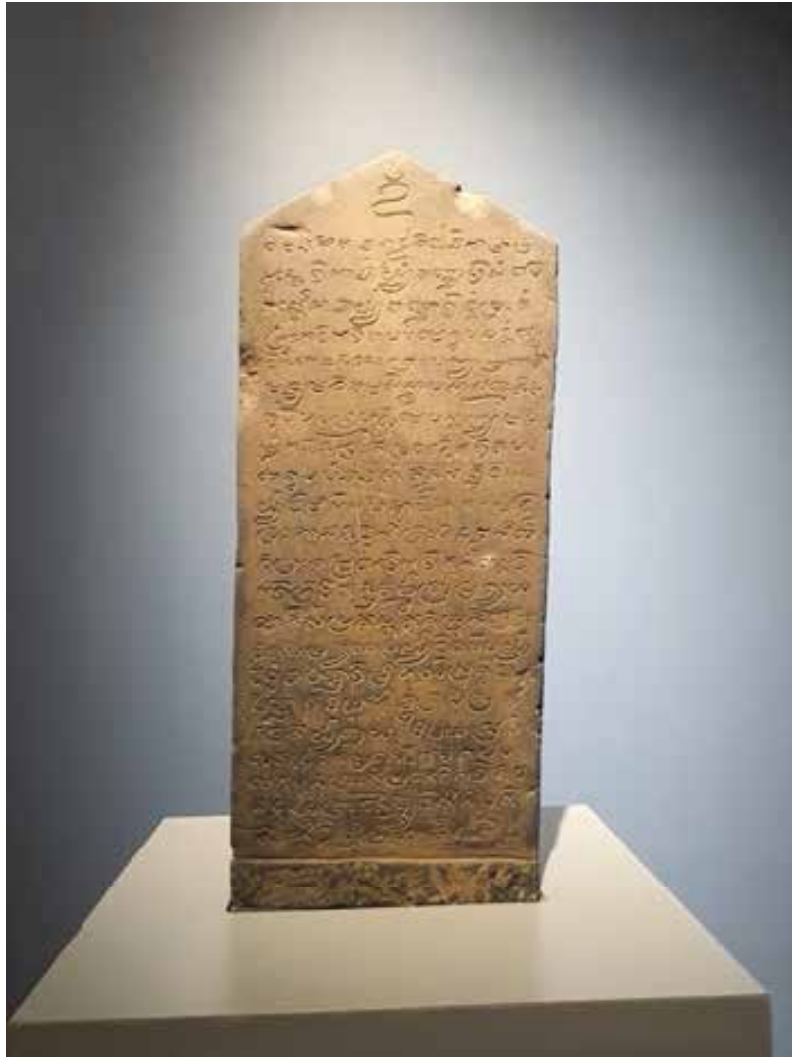


図 12 SKT 寺院で最初に見つかった小型石碑



図 13 SKT 歴史公園での学童の課外授業

バンテアイ・クデイ第 62 次、第 63 次発掘調査速報

ー外周壁東南地区における盛土遺構の発掘調査ー

上智大学アジア人材養成研究センター
アプサラ国立機構

1 調査に至る経緯と経過

(1) これまでのバンテアイ・クデイにおける調査経緯(図 1)

上智大学によるバンテアイ・クデイ発掘調査は、同遺跡の歴史的展開の考古学的解明を目的として 1991 年に始まり、これまで前柱殿 C09 一帯(1991-2001)、続いて東参道沿い小建物 D11 一帯(2001-2017)で実施されてきた。特に前柱殿 C09 南側一帯では、調査を通じて前柱殿 C09 の基礎地業が明らかにされたことに加え、建造時期が異なる複数の遺構を検出し、外回廊東南列柱殿 C03 と各遺構との築造に関わる前後関係を検証した(上智大学アンコール遺跡国際調査団 2022)。

これら一連の調査の中で、前柱殿 C09 南側に位置する東南小堂 C10 西辺では、アンコール期から近現代に至るまでの利用を類推させる遺構や遺物を層位的に確認した。東南小堂 C10 の遺構としての特徴は、所謂上座部仏教の「仏教テラス」と先行研究(MARCHAL1918)で指摘される構築物に分類され、アンコール・トム都城内では現在の上座部仏教信仰の布薩堂として機能している。バンテアイ・クデイの仏教テラス、即ち東南小堂 C10 については、調査成果及び先行研究を踏まえながら、バンテアイ・クデイの歴史的展開について考察が加えられてきた(宮本 2003,2010; 丸井 2005)。

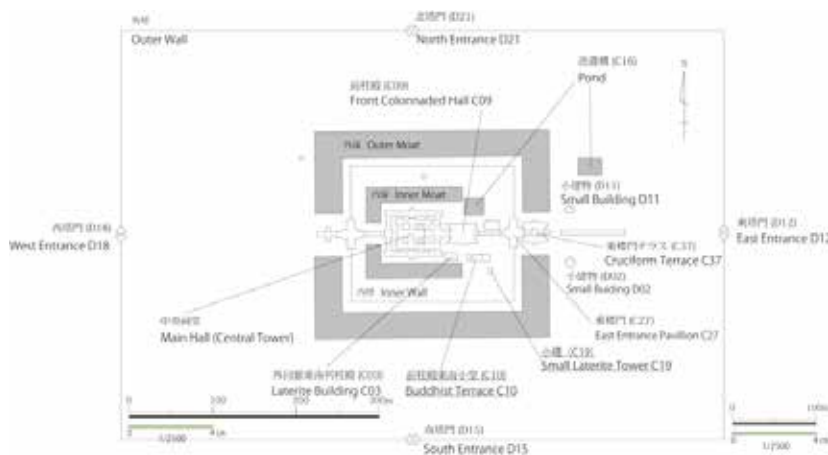


図1 バンテアイ・クデイ平面図

(2) 所謂「仏教テラス」(前柱殿東南小堂 C10) 発掘調査

以上のような経緯と問題意識に基づき、東南小堂 C10 の遺構全体像の解明、さらに大乘仏教以降のバンテアイ・クデイの歴史の変遷解明のため、同遺構東辺において 2019 年 8 月に第 60 次調査として、前柱殿東南小堂 C10(所謂上座部仏教の「仏教テラス」)及び小塔 C19 での発掘調査を実施した。同調査を通じて仏教テラス C10 と小塔 C19 の建造に関わる前後関係を考察する資料を得ることが出来た。さらに仏教テラス C10 東側から蔵骨器の埋納を確認したが、容器等の年代から現代の行為であることを判断した。バンテアイ・クデイの仏教テラスについては、これまでの上智大学の発掘調査、近代の史資料、そしてバンテアイ・クデイ北に位置するロハール村の住民からの聞き取りを踏まえた分野横断的な調査研究により、古代から現代に至るバンテアイ・クデイにおける信仰実践の多様性と埋葬空間としての傑出した特性を解明するに至った(丸井他 2021; Nhim2021; 丸井 2021)。仏教テラス周辺の調査は特に上座部仏教と結びついたバンテアイ・クデイの機能を実証的に証明し、同時に新たな課題も提示した。そのひとつがバンテアイ・クデイ境内(外周壁内)の空間利用についてである。外周壁内の東南地区には、規則的な配置で幾つかの微高地(マウンド)が確認されている。

アンコール地域の古代寺院建築外周壁内のマウンドについては、既にアンコール・ワットで考古学調査が実施されている。リモートセンシングによる測定と解析は(LiDAR)、アンコール・ワット内に多数のマウンドと小規模な池が碁盤目状に規則的に並ぶ様子を明らかにした。こうしたマウンドと池をセットと捉えて実施された考古学調査ではマウンド上から柱穴が確認され、マウンドがある時期の何らかの居住施設であったことを考察している(Carter, Alison et al. 2002)。バンテアイ・クデイにおいてもこうした微高地の特性を明らかにすることで、より包括的な同寺院内部の空間利用と機能の解明が可能になると考え、2023 年 8 月に第 62 次調査、次いで 2024 年 2 月から 3 月にかけて第 63 次を実施した。以下、2 回に渡って実施した調査の概要と成果を速報としてまとめる。

2 調査の目的・調査区・調査の概要(図 2~5)

先に述べたように、バンテアイ・クデイ外周壁と外環濠に挟まれた東南地区には複数のマウンドの並ぶ様子が確認されている。マウンドそばには窪地もあるが詳細は不明である。そのマウンドの一つを調査対象に選び、基本情報収集及び外周壁構築時期とマウンド形成時期の前後関係の把握を目的として掲げた。このマウンドは現状では東西約 20m、南北約 13~15m、周囲との比高

差約 2m の規模をもち、西側斜面に上部構造は既に失われた炭焼き窯の一部が残る。村人によればこの炭焼き窯は 1980～90 年代前半にかけて使われていたと説明があった。

調査はマウンドの西側を中心とした調査区一帯の地形測量の後、外周壁からマウンドの北西裾にかかる南北方向にトレンチを計 3 つ設定し、計 22 m²を調査した。

なお第 62 次(BK62)調査ではトレンチ 1,2,3 を設定し調査を実施した。残された課題を明らかにするための補足調査を第 63 次(BK63)として実施し、同トレンチ1と2を再発掘した。

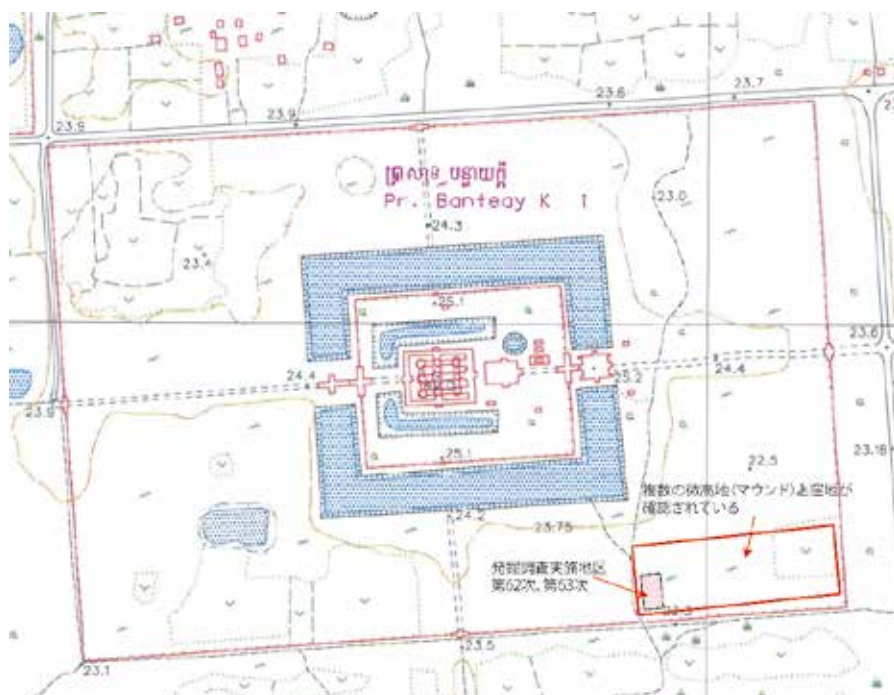


図2 バンテアイ・クデイ第 62 次、第 63 次調査区の位置

3 調査期間と組織

(1) 第 62 次調査(BK62)

期間 2023 年 7～9 月

7 月 31 日～ 調査区の草刈り等準備、測量調査(基準点確認作業)

8 月 9 日～21 日 発掘調査

8 月 22 日 文化遺産教育プログラム(現地説明会)

8 月 23 日～25 日 補足調査

8月26日～9月6日 埋め戻し作業

なお8月10日～22日に王立芸術大学考古学部学生3名を対象とした人材養成プログラム(現場実習)を実施した。

組織 丸井雅子(上智大学総合グローバル学部・教授)、松浦史明(同・日本学術振興会特別研究員 RPD)、Nhim Sotheavin(上智大学アジア人材養成研究センター・研究員)、Chhoeun Vuthy(同シアマリアプ・スタッフ)、宮本康治(大阪市教育委員会事務局・主任学芸員)、Chun Sambor(アプサラ国立機構・考古学専門家)、Vitou Phirom(同)、Phan Kunthanuk(王立芸術大学考古学部・3年)、Tao Marady(同)、Keo Chornlyly(同・2年)

(2)第63次調査(BK63)

期間 2024年2～3月

2月19日～ 調査区の草刈り等準備

2月23日～3月3日 発掘調査

3月4日～9日 埋め戻し作業

組織 丸井雅子(上智大学総合グローバル学部・教授)、松浦史明(同・日本学術振興会特別研究員 RPD)、Nhim Sotheavin(上智大学アジア人材養成研究センター・研究員)、Chhoeun Vuthy(同シアマリアプ・スタッフ)、宮本康治(大阪市教育委員会事務局・主任学芸員)、宮崎晶子(茨城キリスト教大学・教授)

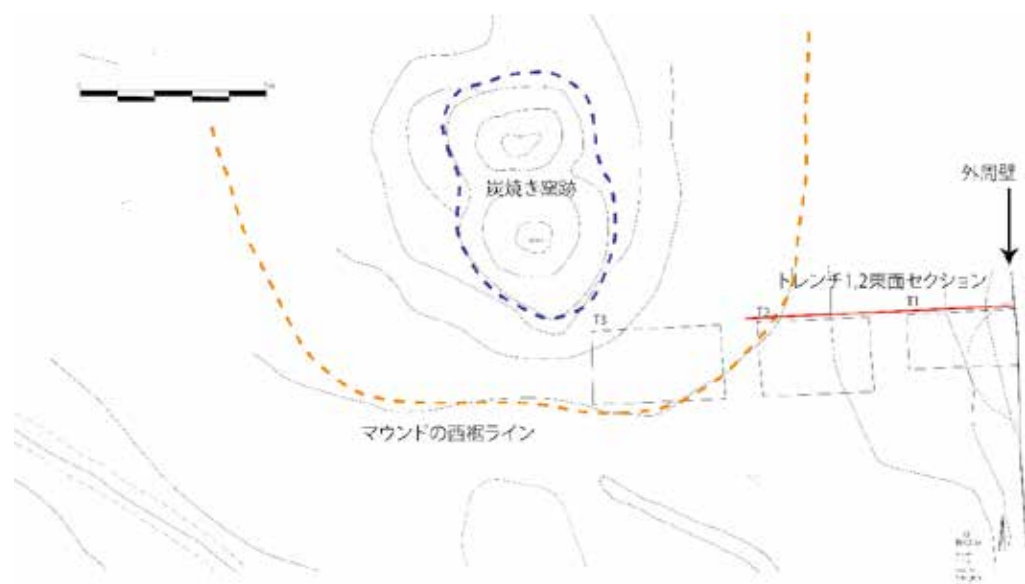


図3 第62次、第63次 外周壁、トレンチ、マウンドの位置



図4 トレンチ(北から撮影、2023年8月。奥が外周壁)



図5 調査区(南西から撮影、2023年8月。右が外周壁)

4 調査成果(図 6～12)

ここではトレンチ 1 と 2 において観察された基本層序(図 7～8)を中心に、検出された遺構(図 9～13)の概要をまとめる。

(1) 外周壁の基礎地業

大きな成果として外周壁の基礎地業とが観察できたことを指摘しておきたい。先ず外周壁構築以前の堆積(第 6 層と第 5 層)を確認した。第 6 層中及び第 6 層上面からは少なくとも今回の調査区内では遺物は出土していない。次に層厚約 50 cm の第 5 層が堆積する。これら第 6 層と第 5 層の一部を掘り込み、砂を充填する砂地業(第 5～6 層中の E 層と F 層)が観察された。砂地業の上ではラテライト粒や粘性の高い砂質土が固く叩き締められ(D 層)、その直上に外周壁のラテライト材が積まれている。ラテライトは先ず 4 段を階段状に積み上げて基壇部分を成す。最下段ラテライトの側面でも、ラテライト粒～塊や砂岩小片等が混ざり固く締まった層(C 層)が観察されている。

第 5 層は外周壁構築以前の堆積であり、おそらくはバンテアイ・クデイ全域に及ぶことが推定され伽藍等主要建築造営前の堆積もしくは人工的な整地と考えている。第 5 層中と第 5 層上面からは少量の遺物(土器、中国陶磁器等)が出土し、それらは寺院中心地区の調査からも出土するバイオン期の遺物と大差ない。第 5 層上面はある時期の生活面であったことが推察されている。

(2) マウンドの構築

B1～B2が外周壁構築後の堆積であることは確実で、その上に第 4 層を確認した。この第 4 層がマウンドを構築する盛土の一部であろう。ただし第 4 層南端の外周壁に接する辺りは、攪乱を受けて明確ではなく、次に挙げる炭化物や火を受けた粘土塊の集積との前後関係を断定するにはやや不安が残り今後の課題として残された。

(3) 外周壁そばの遺構:炭化物の集積と火を受けた粘土塊

外周壁そばでは第 5 層上に、外周壁に向かって傾斜するように B1 層と B2 層が堆積し、さらにその斜面に沿うように炭化物、灰、そして火を受けた粘土塊が観察された。明確な炉跡等遺構は確認できなかったため、別の場所で火を使った作業が行われ、そこから運ばれ廃棄された可能性もある。この炭化物の集積は第 4 層に一部覆われている部分もあるが攪乱されており、今回の調査ではマウンド盛土とこの遺構が形成された前後関係を断定する資料は確実ではない。

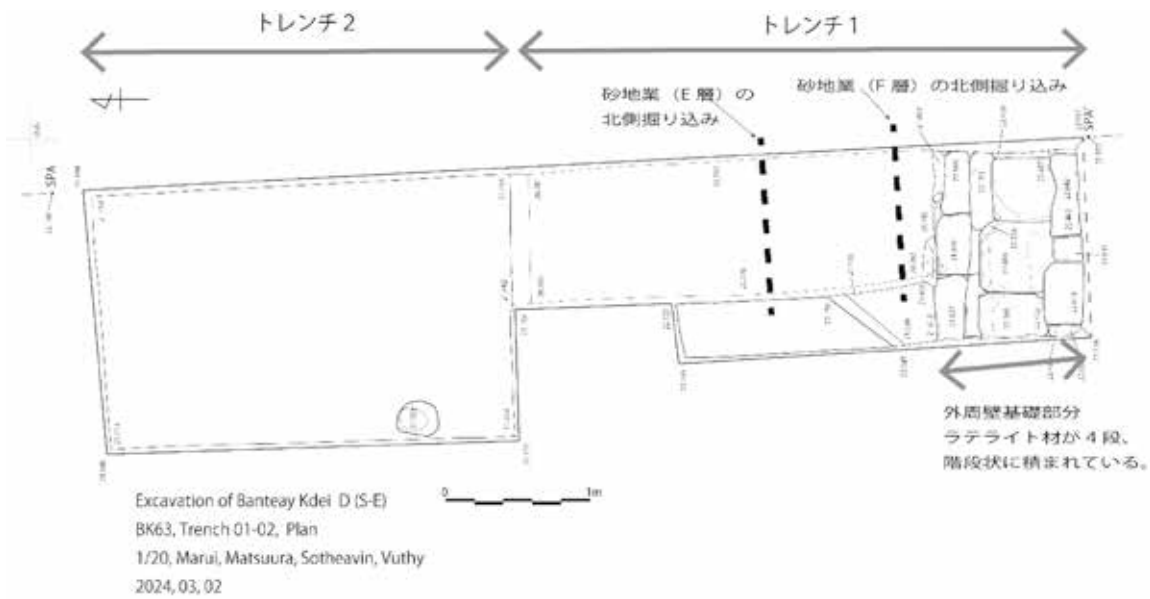


図6 トレンチ1、2平面

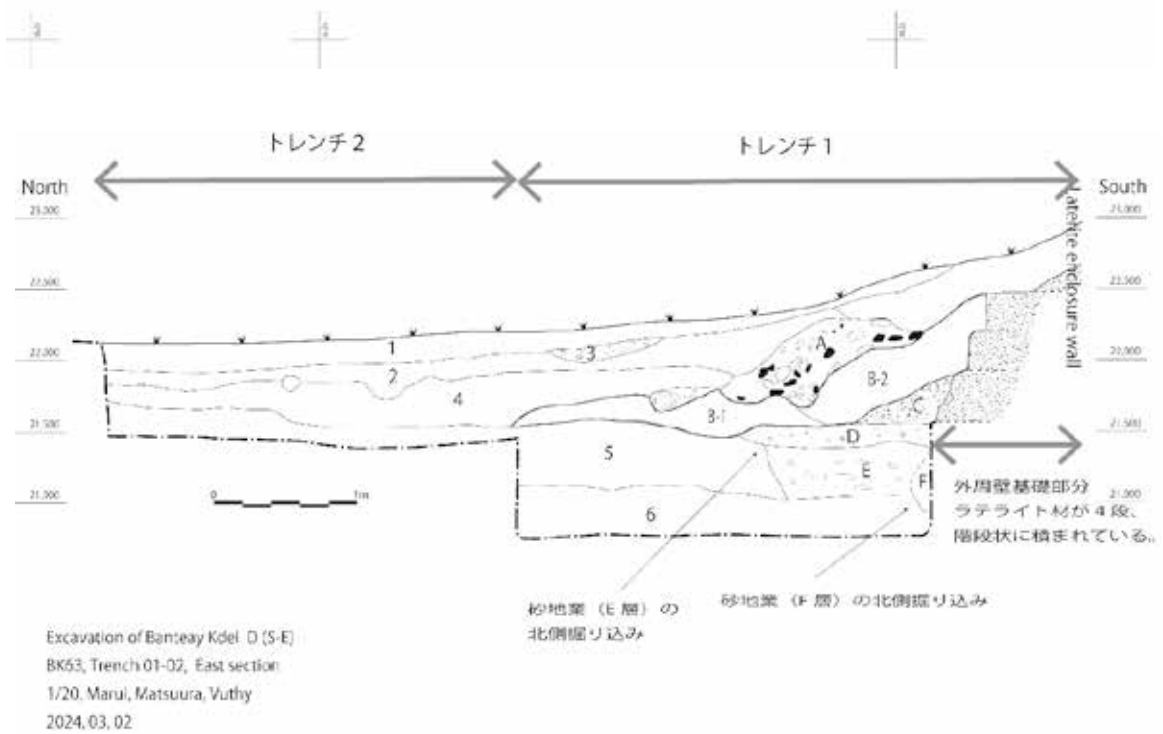


図7 トレンチ1、2東面セクション



図8 トレンチ1、2(北から撮影、2024年3月)



図9 トレンチ1、2(西から撮影、2024年3月)



図10 炭化物、灰、粘土塊の集積(トレンチ1、2024年3月)



図11 トレンチ1 東セクション (2024年3月)



図12 外周壁地業と砂地業(トレンチ1を北から撮影、2024年3月)

5 遺物の概略

出土遺物は第5層中及び第5層上面、さらに第4層中に集中し、小片を主とする土器、瓦、中国陶磁器等総数は72点だった。中央伽藍地区の同規模の発掘調査と比較すると、出土遺物の量はかなり少ない。

第5層上面から出土した白磁合子片は12～13世紀頃の徳化窯あたりの製品であろう。ほか第5層上面から第4層の下層(第5層との境目に近い層位)にかけて、瓦や棟装飾瓦片、鉄製品(カスガイのようなもの)が出土している。上層からは年代の決め手となる資料は見つかっていない。出土遺物については今後整理をすすめて詳細をあらためて報告する。

6 課題と今後の展望

繰り返しになるが今回の調査で外周壁の基礎地業と砂地業の実態、そして外周壁構築後の一定期間を経てマウンドが形成されたという構築の順序が解明された。バンテアイ・クデイ中心地区の伽藍とマウンドの構築時期を考察するための重要な資料も提示することができた。しかし当初の目的として掲げていたマウンド自体の性質を明らかにするには、まだ十分な資料を得ておらずこれは今後の課題として継続調査を続ける計画である。外周壁そばで確認された炭化物等の集積は、寺院境内内の利用を考えるうえでも重要な遺構であり、遺構の特徴や年代についても今後の課題として検討していきたい。

謝辞

本稿で報告する調査は上智大学アジア人材養成研究センターとアプサラ国立機構の MOU に基づき実施された学術調査である。考古学調査は人材養成プロジェクトの一環として、王立芸術大学考古学部 (Faculty of Archaeology, Royal University of Fine Arts) の学生研修 (現場実習) も兼ねている。同大 Heng Sophady 学長、考古学部長 Yong Rattna 教授、同学部 Preap Chanmara 教授から学生研修実施に関わる諸手続きにおいて多大なるご協力を賜った。文化遺産教育プログラムはシアマリアプ州教育局から許可を得、対象校である 1979 年 1 月 10 日高等学校 (10 Makara 1979 Highschool) は上智大学アジア人材養成研究センターが選定し、同校 Kim Leng 校長からご理解及びご協力を賜った。この場をお借りし謝して厚く御礼を申しあげる。

Preliminary Report on the Archaeological Excavation at Banteay Kdei

August 2023 (BK62) and February-March 2024 (BK63)

Sophia Asia Center for Research and Human Development, Sophia University, Tokyo,
Masako Marui, Nhim Sotheavin, Fumiaki Matsuura, Yasuharu Miyamoto, Choeun Vuthy
APSARA National Authority, Cambodia
Chhun Sambor, Vitou Phirom

I Background

Banteay Kdei temple is located around 4kms northeast of Angkor Wat, in a straight line. On the eastern side of Banteay Kdei is the water reservoir Srah Srang which was built in the middle of the 10th century, and it was expanded from the end of the 12th to the beginning of the 13th century when Banteay Kdei was built in the reign of King Jayavarman VII. On the northwest side is Ta Prohm temple, a Mahayana Buddhist temple built in the late 12th century (**Fig. 1**). Banteay Kdei has a laterite-lined perimeter wall measuring approximately 600 meters on the eastern side and 480 meters from north to south, with a double moat encircling the central temple (**Fig. 2**).

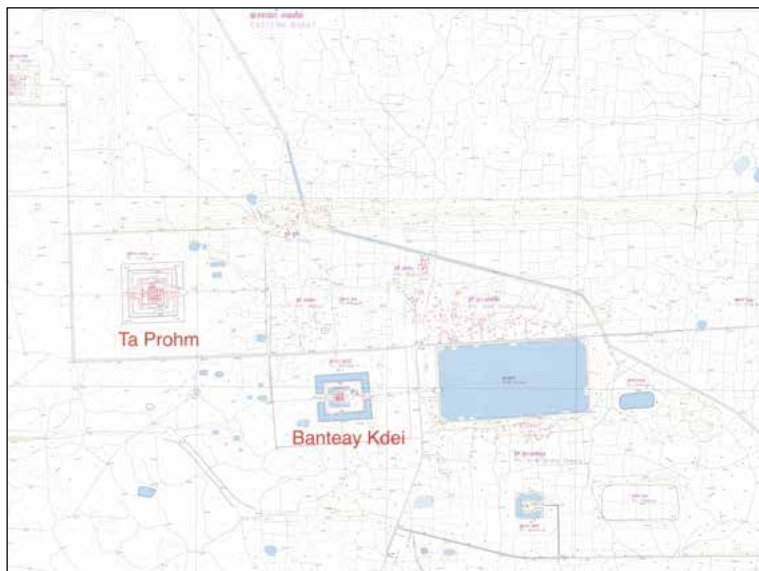


Fig.1 Location of Banteay Kdei temple

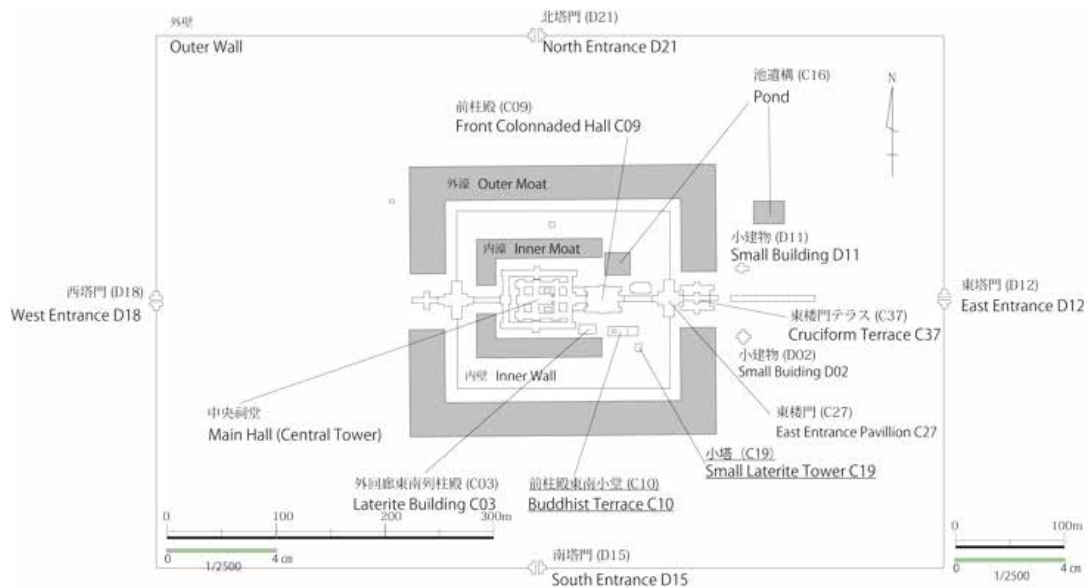


Fig.2 General Map of Banteay Kdei

II The Theme of the Research

Sophia Mission has contributed to exploring the temple's development from the foundation period of Banteay Kdei to the modern, based on various types of archaeological evidence. Since 1991, our survey has focused on the area of building construction. Through our continuous archaeological excavation, we found that the data suggests that people had been using area C09 and the central part of Banteay Kdei for their religious beliefs and practices. However, the question remains as to how the people used it within the enclosure of the Banteay Kdei compound. Hence, our target is to extend the survey to the whole area within the Banteay Kdei temple's enclosure.

As regards the work of the recent research team from Hawaii University that conducted the archeological excavation in the Angkor Wat complex, it was shown that the occupation of inhabitants inside Angkor Wat's space was revealed by some features such as postholes. It is also assumed that a residential space consists of a small mound and a small pond as a set (Carter, Alison et al. 2002). The topographical features of Banteay Kdei also show several mounds and ponds in the southern area inside the enclosure.

III Excavation in August 2023, BK62

1 Purpose of the Research

In August 2023, the Sophia Mission carried out the survey (BK62) to realize the following three purposes.

1. To reveal characteristics of small mounds located in the southeastern area within the Banteay Kdei temple's enclosure, as a comparative analysis of the foundation works, both in the enclosure and the mound.
2. To conduct a general survey outside the Banteay Kdei temple's enclosure
3. To interpret the historical relationship between the people and the area of Banteay Kdei. It was not only in the Angkorian period, but it also covers the period before and after Banteay Kdei's foundation. This is towards the alternative research frameworks, "local history based on the archaeological site" and "the archaeological site-based study on the local history."

There are some small mounds in the area inside the southeastern part of Banteay Kdei's enclosure. The scale of the mound is about 20ms east-west, which is the same scale as the mound in the Angkor Wat temple complex. Our primary survey aims to investigate the historical relationship between temples and people beyond the "history of buildings."

Earlier research on Angkor assumed that the inside of the surrounding enclosure is the 'temple space.' There has been a lot of research conducted inside the enclosure. For this time's survey however, we intend to collect basic data such as the state of soil deposition, and explore the land use situation of the surrounding outer enclosure. This aim is also to connect the temple and the related area.

2 Excavation Area

The excavation was conducted at the south-eastern part within the enclosure of the Banteay Kdei temple, a total of 22 m² (**Fig. 3, 4, 5**). After the general topographical work around the survey area, some mounds and depressed parts were observed clearly in the southeastern part of the inner enclosure of Banteay Kdei (**Fig 6**). In order to understand the area of the excavation, three trenches were set up between the wall enclosure and the mound (modern kiln charcoal in the 1980s that covers the old mound) (**Fig. 7, 8**). Among them, trench 1 adjoins the south enclosure of Banteay Kdei, to investigate the foundation layer of enclosure construction.

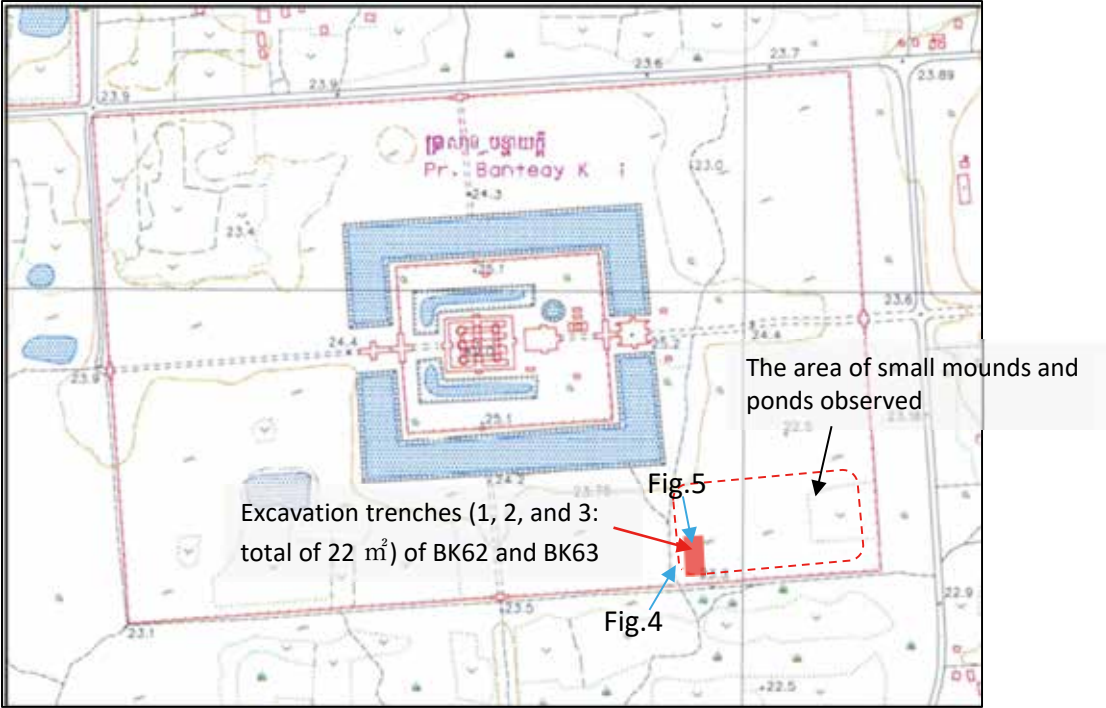


Fig.3 Survey area of BK62 and BK63



Fig. 4 View of the survey area from south



Fig. 5 View of the survey area from north

3 Preliminary Findings and Results

Owing lots of trees having grown over the mound, trenches unavoidably were set at the foot of mounds. Three trenches showed a general basic deposit of soil as a part of the mound, and there is a hypothesis that the mound had been filled several times during a certain period (Fig. 9). In trench 1, a trace of a fireplace was found (Fig. 10). The soil and lumps of clay fired had been observed. It seems that the feature had also been used and repaired repeatedly, but there are no artifacts concerning the date or period of its operation. Sophia Asia Center is waiting to get a result concerning the charcoal date. Due to the rainy season and time constraints, our excavation process was not fully done.

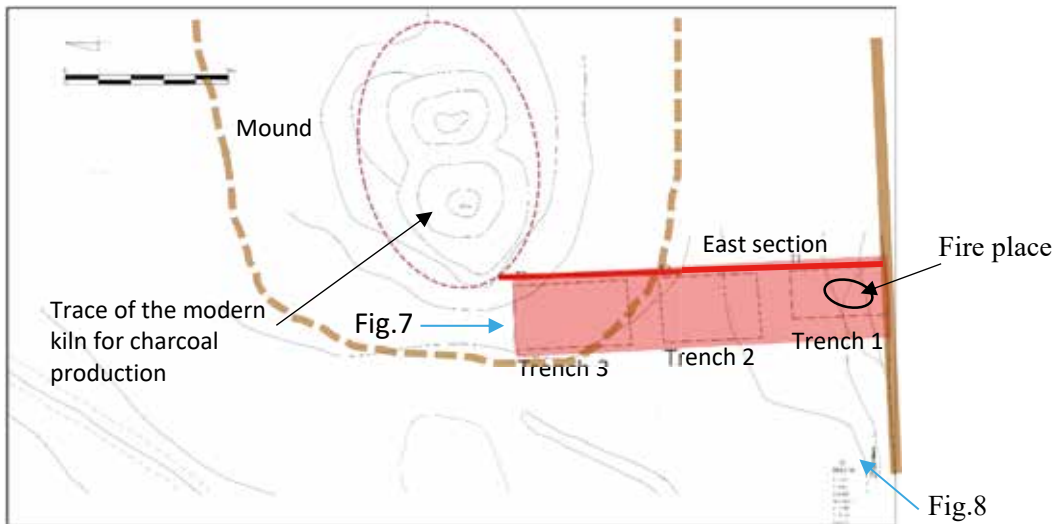


Fig. 6 Survey area and 3 trenches of BK62 and BK63



Fig.7 Trenches from the north



Fig.8 Trenches from the south

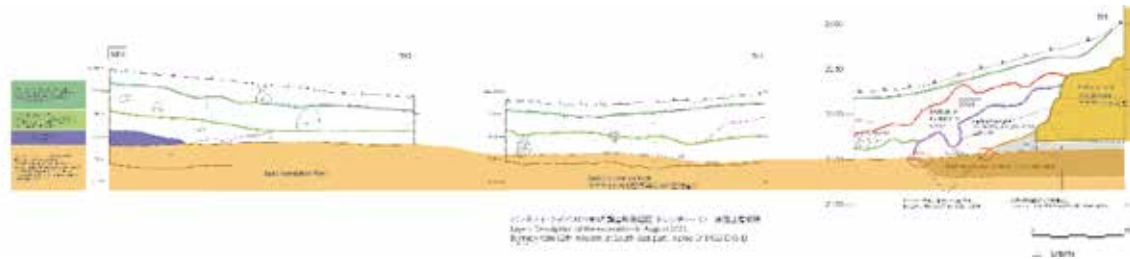


Fig. 9 Description of layers, the east section of Trench 1, 2, and 3, BK62



Fig. 10 Fireplace in Trench 1, BK62

The total number of artifacts found in the trenches and excavated was not much. However, layer 4 and the upper level of layer 5 consisted of potsherds such as roof tiles, stoneware, and Chinese white ware (Fig. 11). A piece of Chinese white ware is a part of the bottom of a covered box from Dehua kiln, southern Son dynasty, 12th-13th century, Fujian (Fig. 12). Other excavated artefacts were also the same as those unearthed in Banteay Kdei, such as roof tiles, including a finial (Fig. 13). They are suggestive pieces of evidence to understand the dates of layers 4 and 5, and some kind of settlement of a period in the past.

Artefacts excavated by BK62 (August, 2023)								
Layer	pottery	stone ware	roof tile	finial	brown glazed ware	Chinese ceramics	sandstone	total
3rd	0	1	2	0	0	0	0	3
4th	2	2	1	1	0	1	1	8
5th upper level of the 5th layer	43	4	0	0	1	2	3	61
total	45	7	11	1	1	3	4	72



Fig. 12 Fragments of Chinese white ware



Fig. 13 Fragments of finial and roof tiles

IV Supplementary Excavation in February 2024, BK63

1 Purpose of the Research

As mentioned in our report of August 2023, the work conducted was not properly completed, due to the rainy season obstructing our excavation process and our time constraints. The results as expected were not sufficient, to complete our report and/or article. Therefore, we would like to re-excavate Trench 1 in order to investigate the soil deposits, and to understand the foundation of the enclosure wall. We took the filled-up soil from August's excavation of Trench 1, and then we excavated more towards the lower layers. Our aim was to find the layers, in order to compare the relationship between the soil deposits of the mound and the basement of the enclosure.

2 Excavation Period

Our supplementary excavation of Trench 1 was carried out for 4 days, from February 28th to March 2nd, 2024.

3 Description of the Layers

We removed the deposit of a firing place (see **Fig. 10**) in Trench 1 that contained things such as a fired-clayed structure, blocks of charcoal, and blocks of browning soil. We collected some blocks of charcoal and soil that were located underneath the fired-clayed structure, as samples for determining the date and for pollen analysis. Then, as a supplementary survey, we began digging deeper to investigate the foundation work of the wall. Finally, Trench 1 and 2 combined to investigate the continuity of layers.

The layers observed in the eastern section (see **Fig. 14-18**) show the following process of soil deposits:

1. Layer 6 was deposited around the area before the construction of the enclosure wall of Banteay Kdei (in this layer, there has not been found any artificial objects in the trench). It is not “a natural layer” for sure.

2. Layer 5 was deposited during the same period as the construction of the Banteay Kdei temple's buildings (this layer has a few artifacts such as Khmer ceramics, roof tiles, and iron nails). The possibility has been suggested that the surface level of layer 5 was of the period of activity in the Angkor era, strictly focusing on the Bayon period and around.

3. Layers D, E, and F were foundation works of the laterite enclosure wall. For the construction of the wall, parts of two layers, 5 and 6, were dug in, and then silty soil and sandy soil (Layers E and

F) were filled in. We observed pure sand (Layer F: sand foundation work) at the right, under the wall. Layer D was an over-consolidated layer covering two layers of E and F. Layer D is a compacted soil for foundation works. Then, a laterite enclosure wall began to be built on Layer D.

4. Layer C was a very hard layer, mixed with small laterite grains. It was like protecting the bottom step of laterite blocks. The Laterite enclosure wall has 4 steps, and 8 blocks stand up vertically.

5. Layer B (1 and 2) was deposited along the wall sloping from south to north. Layer A was on and dug a bit the Layer B. From layer A, fired clay blocks, lots of charcoal pieces, and ash were found, however it was not considered as absolute proof of features such as the kiln body and furnace. As indicated by these findings, a hypothesis was that this was a disposal site from charcoal kilns that were operated nearby for a certain time, which may have been after the Angkor period.

6. Layer 4 was deposited at a period later than the operation of the charcoal kilns, on the hypothesis above mentioned. In the last research on August 2023, BK62, this layer was a part of mound 1 (see **Fig. 6**), containing a few artifacts of Chinese ceramics and Khmer ceramics.

7. Layers 1, 2, and 3 did not indicate positive activities by humans, as understood through archaeological artifacts.

4 Interpretation of the Layers Excavated

Based on the stratigraphical layers of the east section of Trench 1, we conclude as follows:

1. The construction process of the enclosure wall (basic foundation work) was clarified.
2. The geological formation of layer 5 strongly suggests that it was associated with the construction of the Banteay Kdei temple.
3. The foundation of the enclosure wall was built by digging through Layers 5 and 6, which archaeologically confirmed that the temple and the enclosure wall seem to have been built at about the same time.
4. This basic data is important to investigate the mound construction process.

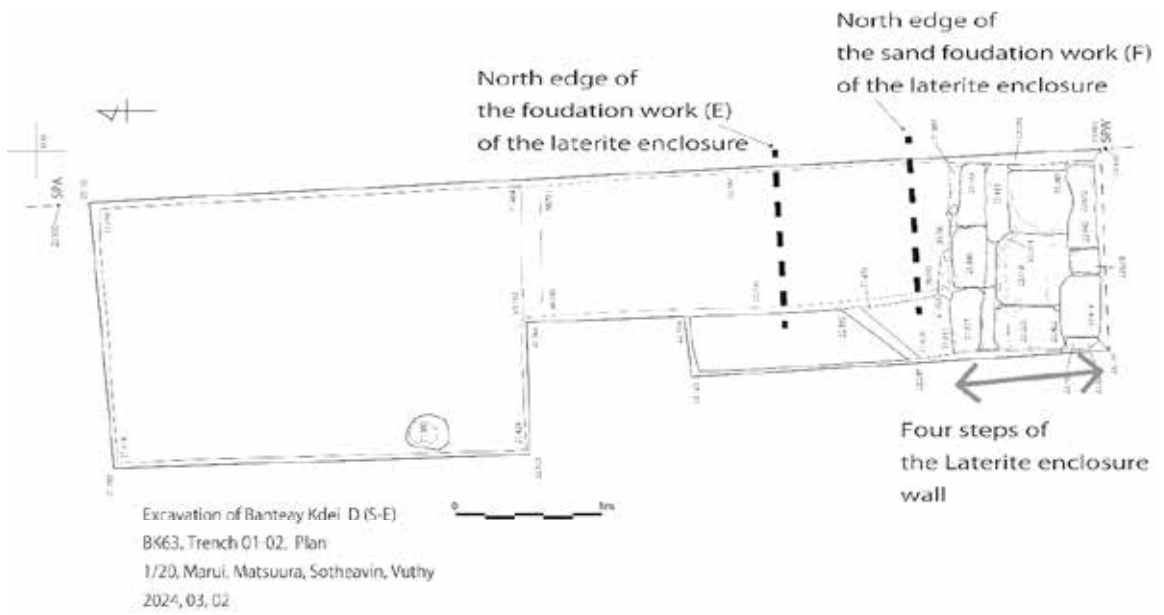
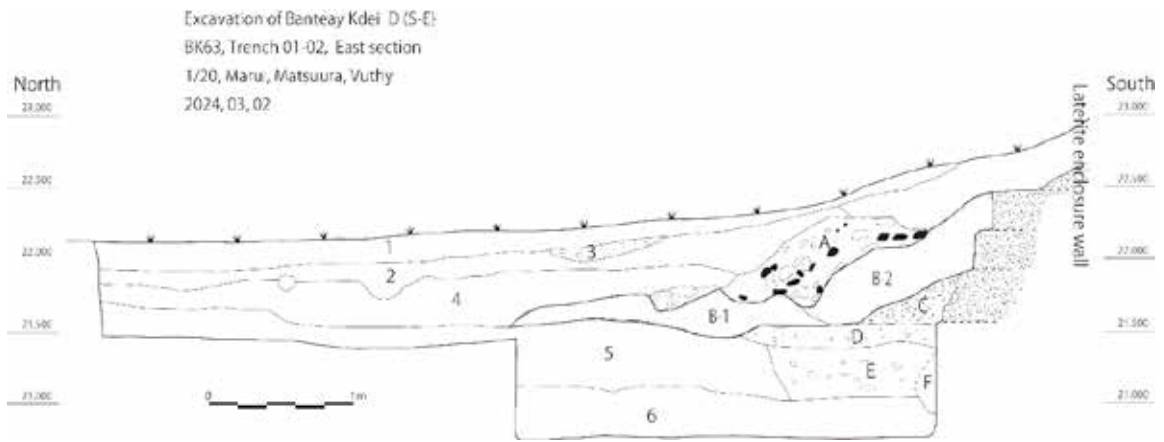


Fig. 14 Section and Plan of the excavation Trench 1, after combined with Trench 2



Fig. 15 Survey area in February 2024: view from north



Fig. 16. Survey area in February 2024, after excavation: View from the west of Mound 1 is behind on the left



Fig. 17 Laterite steps and the East section



Fig. 18 Details of the foundation work of the laterite enclosure wall including sand foundation, view from north

V Discussion

Two campaigns carried out in August 2023 and February-March 2024 revealed construction orders among Banteay Kdei's enclosure wall, deposit soil, Layer 5 which has a high probability of being the foundation layer for the entire site, and Mound 1. However archaeological artifacts were collected only in small amounts, stratigraphical evidence made it possible to describe a land using history.

Some questions still remain on the characteristics of Mounds around the area, including Mound 1. Our next excavation in August 2024 will make Mound 1 a target, to understand the overall structure of the mound.

VI Members

1 Participations of the Excavation, August 2nd -29th, 2023

Masako Marui, Professor, Faculty of Global Studies, Sophia University

Nhim Sotheavin, Ph.D., Researcher, Sophia Asia Center, Sophia University

Fumiaki Matsuura, Ph.D., Postdoctoral Fellow, JSPS and Sophia University

Yasuharu Miyamoto, Chief Curator, Osaka City Board of Education

Choeun Vuthy, Staff of the Sophia Asia Center for Research and Human Development

Chhun Sambor, Technical staff, APSARA National Authority

Vitou Phirom, Technical staff, APSARA National Authority

Phan Kunthanuk, Tao Marady, and Keo Chornlyly: Students from the Faculty of Archaeology, Royal University of Fine Arts.

2 Participations of the Excavation, February 29th-March 2, 2024

Masako Marui, Professor, Faculty of Global Studies, Sophia University

Nhim Sotheavin, Ph.D., Researcher, Sophia Asia Center, Sophia University

Fumiaki Matsuura, Ph.D., Postdoctoral Fellow, JSPS and Sophia University

Yasuharu Miyamoto, Chief Curator, Osaka City Board of Education

Akiko Miyazaki, Ph.D., Professor, Faculty of Literature, Ibaraki Christian University

Choeun Vuthy, Staff of Sophia Asia Center for Research and Human Development

Acknowledgments

We would like to express our sincere gratitude to H. E. Dr. Hang Peou, Director General of the APSARA National Authority, for having always supported the Sophia Mission. We would also like to express our appreciation to the staff of the APSARA National Authority for their collaboration, and we like to extend our thanks as well to H. E. Dr. Heng Sophady, Rector of the Royal University of Fine Arts, Dean and Vice-Dean of the Faculty of Archaeology, RUFA, for sending their students to join our Sophia Mission in August 2023.

編集長 石澤良昭

Editor in chief Dr. Yoshiaki ISHIZAWA

編集委員 ニム・ソティーン

Editor Dr. Nhim Sotheavin

カンボジアの文化復興 (34)

——アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査

発行者 上智大学アジア人材養成研究センター

所長 石澤良昭

発行年月 令和 7 年 (2025 年) 2 月

発行所 上智大学アジア人材養成研究センター

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話 (03) 3238-4136

Fax (03) 3238-4138

印刷所 株式会社リプラス

〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-37-9

電話 (03) 5978-6366